910.8
K0453

東京女子高等師範學校教授
金子彦二郎著

徒然草講義

全

株式會社
平凡社
受驗講座刊行會

(國文學講座)22

始

601-12

11

徒然草講義

目次

つれづれなるまゝに（序段）……一
いでやこの世に（第一段）……四
いにしへの聖の御代（第二段）……一七
よろづにいみじくとも（第三段）……二二
不幸にうれへに（第五段）……二六
わが身のやむごとなからむにも（第六段）……二九
あだし野の露（第七段）……三四
家居のつきづきしく（第一〇段）……三七
同じ心ならむ人と（第一二段）……四四
ひとりともしびのもとに（第一三段）……四七
和歌こそ（第一四段）……四九
よろづのことは（第二一段）……五四
風も吹きあへず（第二六段）……五七
名利につかはれて（第三八段）……五九

五月五日（第四一段）……六六
春のくれつ方（第四三段）……七〇
老來りて（第四九段）……七二
賀茂の岩本（第六七段）……七五
書寫の上人（第六九段）……七九
世に語り傳ふること（第七三段）……八一
人ごとに（第八〇段）……八七
うすものの表紙は（第八二段）……九〇
人の心すなほならねば（第八五段）……九三
下部に酒飲ますることは（第八七段）……九七
常盤井の相國（第九四段）……一〇三
寸陰惜しむ人なし（第一〇八段）……一〇五
明日は遠國へ（第一一二段）……一一一
宿河原といふ所にて（第一一五段）……一一六
養ひ飼ふものには（第一二一段）……一二一
悲田院の堯蓮上人は（第一四一段）……一二四
心なしと見ゆる者も（第一四二段）……一二八
筆を取ればもの書かれ（第一五七段）……一三二

徒然草講義

つれづれなるまゝに——序段

つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

【章旨】　趣味生活を生活してゐた作者の、隨筆を執筆するに至つた心的動向と、執筆して行くに從つて、引きずり込まれるやうに、其の述作に異常な興味を感じて行くといふ告白的記述で、要するに全篇の序ともいふべきもの。

【語釋】　○つれづれ　退屈。　○日ぐらし　終日。　ひねもす。　○心にうつりゆく　心に浮んで來る。　意識界に出頭沒頭する。　○よしなしごと　たわいもない事。　○そこはかとなく　たゞ漫然と、何といふ目的も意識せずに。　○書きつくれば　これには二說ある。一つは「書き付ける」で、經卷の餘白や裏などに書き付けるといふことで、たゞ「書く」といふに同じと見る說。もう一つは文段抄にある「書きつゞくれば」の中略だから、「書き付く」「書き續く」の字を當てゝはならぬといふ說であ

る。後者は餘りに考へ過ぎた説で、文法上からは無理なやうであるが、心持から言ふならば、この方を汲んで「興に乘じてどんどん書きつゞけて行く」と言ふ風に見たい。さうでないと次の「あやしうこそものぐるほしけれ。」といふ説明語の副詞的修飾句として餘りに力弱いやうな氣がする。　○あやしう　不思議と思はれるまでに、どうも變だぞと思はれ位に。　○ものぐるほし　氣ちがひめく。

【口譯】　退屈さにまかせて、日がな一日、机に對ひ、墨すり筆を執つて、それからそれへと(色々さま〳〵)心に浮んで來るたわいもない思ひつきやら聯想やらを、何といふあてもなく書いて見ると、(書いたものが)妙に氣違ひじみたものになつて行く。(と同時に、ます〳〵創作慾が猛烈になつていくのを感ずる。)

【餘論】　まづ「つれづれなるまゝに」といつてゐる隨筆執筆の動機について一考するに、第四段で「後の世のこと心に忘れず、佛の道うとからぬ、心にくし。」と述べて、一向專念、欣求淨土、佛道修行の三昧境に入つてゐる人を奥床しがつてゐる兼好も、もしさうした境地に浸りきつてゐたなら、さうして又第百八段で「……されば道人は遠く日月を惜しむべからず。只今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし……一日の中に飲食・便利・睡眠・言語・行歩、已むことを得ずして多く時を失ふ。その餘りの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことを言ひ、無益の事を思惟して、時を移すのみならず、日を消し月を渡りて一生を送る尤も愚なり。……『光陰何のためにか惜しむ。』とならば、内に思慮なく外に世事なくして止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。」と説き、なほ第九十八段で「佛道を願ふといふは別の事なし、暇ある身になりて世の事を心に懸けぬを第一の道とす。」といふ一

言芳談の箴言に、非常な同感共鳴の意を表してゐる兼好が、もしこれ等の言葉を、かの怠惰放逸な學生が、自分の怠惰心への警策とせんが爲に「勉强は幸福の母なり。」といふ格言を机のほとりに掲げて置くのと同一な意味合で表現してゐるのならいざ知らず、これが兼好の眞實の念願であり、心からの、聲であるとすると、「つれづれ」な一瞬一刻を持つまじき、否在り得ない筈であるが、そこに到底佛いちりや抹香焚きにのみ浸頭しきれない俗人兼好、趣味人兼好の面目が窺はれると思ふ。

卽ち佛徒としては「つれづれ」な時間に飽き〳〵した兼好は、其の佛徒としての勤行に耽るには餘りに多い俗界の名聞慾・衝動滿足慾・社交慾・趣味陶醉慾等々にさいなまれつゝある苦悶の象徴を、文藝創作の一路に求めて癒さうとしたらしい。だから此の創作の仕事に携はるや、讀經念誦の事に退屈がつてゐた彼も「ひねもす硯にむかひて」なほ飽くことを知らず、上記の引用文で、殆どその主要眼目とも見做すべき「只今の一念空しく過ぐる事」「無益の事をなし、無益のことを言ひ、無益の事を思惟して時を移す」こと、「内に思慮なく、外に世事なき」こと、「世の事を心に懸けぬ」事を全然裏切つた雜念、卽ち心中にむらがり湧く「よしなしごと」の記述に夢中になつてゐたのである。要するに兼好は、心の内外の抑壓や制御から、全く解放された此の絶對自由な心境に立つて個性を表現し得る唯一の世界であり、こゝにのみ純然たる生命の表現を許されてゐる此の文藝創作が、最も滿足な、得意な、さうして無我の心で沒頭し得る生活であるといふこと、換言すれば序段は「私は坊主になるべき人間ではなくて、文學者になる人間なんだ。でこれから其の道に精進するぞ。」といふ一大聲明と見るべきでなからうか。私がさきに「書きつ

くれば」を「書きつゞくれば」の意味に解したいと言つたことや、「あやしうこそものぐるほしけれ」の口譯に、單に其の創作物が矛盾・獨斷・非常識だらけなものだといふ從來の諸解の上に、創作しつつあることそれ自身が、更に大きな創作慾や創作家の旺盛な表現慾をそゝつて、とめどもなく調子づいて行くといふ心理狀態を附け加へた理由も實にこゝにある。

いでやこの世に——第一段

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。御門の御位は、いともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやむごとなき。一の人の御ありさまはさらなり。たゞうども舍人など賜るきは は、ゆゆしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つ方は、程につけつゝ時に遇ひ、したり顏なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口惜し。

【章旨】　人と生れた者の眞實の「望ましきこと」が、身の幸でなくて心の幸であり、心の修養であり、趣味への味識であることを說く。

【節意】　高位高官といふ世間的翹望の目標をあげ、これが決して望ましいもの、第一のものでないことを說く。

【語釋】　○いでや　さてまあ。　○この世　此の依望だらけな世の中、凡てが充ち足り、常に樂しいといふあの世（極樂）などに對す。　○御門　もと皇族の門其の物の尊稱であるが、それが轉じて皇居や朝廷其の他をさし、又、天子を直接に指し奉るのを憚り、其の御居所を言つて天子を敬稱し奉る言葉に用ひた。　○いともかしこし　これは誠に畏れ多い。　願望の對象などとして考ふべき筋合のものではない。　○竹の園生　皇族、前漢の文帝の子梁の孝王の宮苑の故事から出た語。「孝王築二東苑一、方三百里」（史記）とある註に「俗人言、梁孝王竹園也。」とあることから、帝王の子を竹園と言ふ。大和言葉では「竹の園生」といふ。　○末葉　子孫のことで、こゝでは帝王の子の其の又子孫のこと。　○人間の種　神の御子孫でいらせらるといふこと。この話は和漢朗詠集に出てゐる後江相公（大江朝綱）が「名花在二閑軒一」といふ題で作つた「此花非二是人間種一、瑤樹枝頭第二花。」の句から思ひついたものであらう。　○やんごとなし　非常に尊いものだ。「止むことなし」はもと「放つて置かれぬ。等閑にし難い」の意。貴人は等閑にしてはおけないものゆゑ、かやうに轉用してゐる。　○一の人　攝政關白のこと又執柄ともいふ。職原抄に「執柄必稟二一座之宣旨一、故稱二一人一。」。よく似てゐて異る「一人（いちじん）天子のこと」と「一の上（いちのかみ）左大臣のこと」とを牢記するがいい。　○更なり　言はずとも分つてゐる。「さら」は「伊勢の初旅さらの足袋」などの用例でも分るが、「新し」の意。「言ふも事新しい」といふことから上記のやうに解する。　○たゞうど　官も位もない庶人のことを言ふが、但しこゝでは上記一の人即ち攝關以外の貴人をさす。即ち清華（セイグワ）羽林家（ウリンケ）などのこと。　○舍人（トネリ）　隨身（ズキヲン）のこと。天皇や皇族などた近侍して雜役に服する官人。人臣でも勅許があればこれを警固として隨へることが出來る。弘安禮節によれば、太上天皇（上皇）十四人、或は十二人、攝政關白は十人、大臣・大將は八人、納言・參議は六人、中將は四人、少將は二人、諸衛府の督（カミ）は四人、佐（スケ）は二人と見えてゐる。よく神社の樓門などにある矢大臣といふものの髣

東が、この隨身姿にかたどつてある。○きは　際。身分柄。分際。○ゆゆし　素晴しい、大したものだ等の意。○孫（ウマゴ）　まごに同じ。○はふれにたれど　零落して見るかげも無いものでも。こゝの「はふれに」の「に」は「はふれぬる」などと使へる助動詞「ぬ」（過去）の變化で、助詞ではない。○なほ　こゝでは「やはり」「やはり何と言つても」の意。○なまめかし　上品、奥床し。○それより　「それ」は「一の人以外の貴族連中で舍人など賜る家柄の者」をさす。それ以下とは五位・六位・殿上人・受領などの身分をいひ、これらは家柄はなくとも、本人の腕次第で出世の出來る地位である。○程につけつゝ　それ〴〵身分や地位相當に。○時を得　立身出世して。順調にいつて。○したり顔　得意滿面、してやりたりといふやうな誇り顔。○いみじ　えらい。ここでは「どんなもんぢやい。」といふのが當る。○口惜し。つまらない。うんざりする。

【口譯】　さてまあ、（人間として）此の世に生れて來た以上、（あゝもなりたい、かうもしたい）といふ願望も澤山にあるやうだ。（で、先づ）天子樣の御地位であるが、これは（何のかの）と申上げる、いや思つて見るだけでも畏多いことで、人臣としてとやかく言ふべき筋合のものでない。）いやそれのみならず、親王樣や皇孫、さてはずつと其の御子孫の方々の御身分に至るまで、吾々一般民とは分を異にしてゐる神の御末でいらつしやるのだから、尊さも尊いし、又吾々の望むべき範圍のことではない。」それでは吾々一般民として望み得る最高のものは何かといふと、攝政關白の地位であるが、此の攝政關白の威容の素晴しく立派なことは、今更說き立てるも野暮な話だ。所でこれも五攝家の出身でなければなれぬ。これを除いた普通の貴族仲間でも、舍人なんか隨へることの勅許を蒙つてゐる程の身分の者は、何といつても素晴しいもんだ。さうした連中の子や孫（ずつと五世七世の後はいざ知らず）ぐらゐまでは、よしんばすつかり落ちぶれ果てゝ見るかげもない生活をしてゐても、やはり何と言つても（土臭い成上り者とは違つて）優雅高尙な氣品といふものが備つてゐる。（如何に成り上ることが出來たにしても、貴族仲間に伍することは、門閥家の出身でない吾々の望み得るところでない。）（さて吾々の腕次第でもなれる可能性のあるのは、それ以下の部類だが）それより下の（さうした）地位はどうかと見渡すに、それらの連中は、各自その地位相應に、幸運にめぐりあつてよい地歩を占め、得意滿面でゐるものも、御當人だけは（鬼の首でも取つたやうに）どんなもんぢやいと偉さうに構へてゐるだらうが、他（吾々）から見ると（噴飯したくなるくらゐ）いやもうお座のさめることではある。（かやうに、望ましい官位には成れないやうな門閥といふ關所があり、成り得る可能性のある官位はしてくれると言つても成りたくない。だから官位なんてちつとも望ましいことぢやない。）

【餘論】　この一節で面白いと思ふことは、昔も今もお役人といふものが、俗間一般の羨望の的であるといふことである。「それより下つ方」などゝ兼好は言ひくさしてゐるが、どうして〳〵、其の五位・六位・殿上人・受領などだつて大變な競爭者があり、めつたに成れなかつた時代が多かつた。少し時代は遡るが、平將門が攝政藤原忠平に歎願して任用方を賴んだのも檢非違使尉でしかなかつたのだ。それが聽き屆けられなくてあゝした大それた天慶の亂を惹き起したではないか。さう考へて來ると、こゝの兼好の言葉も何だかイソップ物語の「あの葡萄は酸つぱいのだ。」といつた狐の言ひ草のやうな氣がしてならぬ。

次に、うれしいと思ふことは、一寸これだけのうちにも我が國氏性が光つてゐることだ。「御門の御位は……」は、要するに現行大日本帝國憲法の第一條「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」や第三條「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」の信仰的な我が國民性を自らにして語つてゐるものである。老・莊の學を喜び、下つぱ役人なんか、してくれてもこちらからお斷りだと言つてゐる拗者の兼好も、この神州の水土に育まれてゐた人だけあつて、かの支那人のやうに、「舜人也、我人也」とか「王侯將相寧有レ種乎」などいふ思想にまでかぶれてゐないのが愉快ちやないか。この一句は、謠曲「羽衣」中の白龍が、拾つた天人の羽衣だときいて、一そも此の衣の御主とは、さては天人にてましますかや、さもあらば末世の奇特に留めおき、國の寶となすべきなり。」と言つた思想と一脈相通ずるものがあるではないか。

「はふれにたれど、なほなまめかし」の一語には、兼好一流の趣味識がにじみ出てゐる。

法師ばかり羨しからぬものはあらじ。「人々は木の端のやうに思はるゝよ。」と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひ猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀ひじりの言ひけむやうに、「名聞ぐるしく」佛の御教に違ふらむとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨人は、なか〳〵あらまほしき方もありなむ。

【節意】　時には大臣公卿とも肩を並べた當時の上流階級たる僧侶も亦願はしかるべきものではないといふこと。

【語釋】　○人には木の端のやうに　人からは木の切れ端かなんかのやうに何の役に立たぬ物のやうに言ひくたされ。これは次にも斷つてあるやうに、清少納言の枕草子の五段のところに「思はむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。さ　はいと頼もしきわざを、なゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそいといとほしけれ。」とある意を取り來つてこゝに引用したのである。○さる事ぞかし　さるは「然る」で、いかにも道理のある。尤も至極な、などの意。○いきほひ猛に　居たけだかになつて、威張りかへつて。即ち僧として高貴な位に上つて、えらい權幕でわめきのゝしること。○のゝしりたるにつけて　わめきのゝしつたところで。○増賀ひじり　増賀といふ高德な僧。參議橘恒平の子で、大和の多武峯に住すること四十一年、極めて心が嚴しく猛々しく、ひとへに名利を厭ひ嫌つて、故意に物狂ひのやうな振舞までした。と即ち師の慈悲(叡山の天台座主)が、はじめて僧正に任ぜられて御禮に參内した時、儀衛を盛にして、文字通りに「いきほひ猛にのゝしつた」のである。するとさういふことの大嫌ひな増賀上人は、乾鮭を太刀として佩き、瘠せた牝牛に乘つて先驅の列に加はり、さうして「名聞こそ苦しかりけれ、乞食(かたゐ)の身こそ頼もしかりけれ。」と歌つて去つたといふ。(鴨長明――發心集)　○名聞ぐるしく　上記「名聞こそ苦しかりけれ」の語を縮約して用ひたもの。名譽や外聞にばかり煩はされて齷齪してゐるやうで。虚名ばかり欲しがつてこせついてゐるやうで。　○佛の御教　欲念を離れ、世間を出ること、即ち六塵の樂欲を捨てよとの釋迦の教法。○ひたぶる　一心一向。專一。　○世捨人　出家。　○なか〳〵却て。　○あらまほしき方　さうあつてほしいと思ふところ。

【口譯】　法師といふものほど羨ましいと思ふ値打のないものはあるまい。世人からはまるで木の切れ端か何かのやうに思はれて(てんで人間扱ひもされない)と清少納言がの其の「枕の草子」に書いてゐるのも、(思へば)誠に尤もなことゝうなづかれる。(僧正の僧都のといつたやうな)高い僧官に經上つて、(あたりの者どもを)すばらしい權幕

でどなり散らして威張つて見たところで、（さつぱり男もあがりもせず）本當にえらいとも思はれもせぬ。いや却てさういふ（振舞をする）僧は、增賀上人の言葉のやうに、名譽外聞の爲にばかりいつも〳〵心を使ひ苦しんでゐて、佛の敎の本義にも背く者のやうにさへ思はれる。但し（俗世間の俗事から全然超脫した）本當の出家らしい出家で、名譽や外聞などには微塵も貪著せぬ修道三昧な僧ならば、それは却てなつて見て惡くもないと思はれるふしもあらう。（が、要するに法師などの身分や境界は何も羨むには當らぬことだ。）

【餘論】　自分自身が法師で、さうして法師の身分境界を說いたこの一節は、謂はゆる「食はず嫌ひ」な偏見とは違つて、そこに十分に聞くに値する眞實性があると見てよからう。丁度紫式部が源氏物語の「雨夜の品定め」のところで嫉妬論を述べて、「嫉くも不可、嫉かざるも不可、狐色にこんがりと嫉いて置け。」といつた言葉の味と同じ程度ぐらゐに。但しこゝに一つ大いに考慮して見なければならぬ一事がある。それは前々期から當時にかけての僧侶の地位と、これに志した人々の根本動機とである。前の節で、攝關大臣は望んでも成れないし、それ以ゞの小役人にはしてくれても成りたくもないと見えをきつた兼好が、次に一般世間から羨望すべき地位境遇と見做されてゐる法師の境涯について述べたのは、我田引水でも何でもなく、實際攝關大臣にも比ぶべき名譽ある地位であつたのである。門閥尊重と職業世襲とで、士庶人の出世のコースが絕對に閉塞されてゐたそれらの時代では、如何に優秀卓拔な頭腦や手腕を持つてゐても、これを以て異常な立身出世の綱とすることが出來なく、たゞ徒に骨肉の歎をかこち、幸薄き宿命に悲憤の涙を漏らしてゐるだけであつた。が、たゞ一つこゝに士庶人をして異數な立身、世人の耳目を聳動させ得るやうな花々しい出世をさせてくれる大道が開けて居つた。それは僧籍に身を投じて刻苦淬礪、あつぱれな大德智識と仰がれる者になることだつた。だから卑賤な家から身を起し、あはよくば帝王の師ともなつて名を後世に揚げたいと念じた偉人傑士たちは、多く大いにみな此のコースを選んだものだ。清少納言が「さるはいと賴もしきわざを」と言つたのにも理由があつたのである。さういふわけで佛敎が隆盛を極め名僧智識が頗る世の尊信を博してゐた當時としては、法師は貴族同樣な待遇をうけ、羨望の標的の一つであつた世相を知悉して置かねば、本節の眞の意義が發揚出來なからうと思ふ。

さて兼好自身の身の上をかうした世相から考へて見ると、彼は一生涯一文學法師で終つた人で、僧正にも僧都にも律師にもなれず、つまり僧侶として得意な「いきほひ猛にのゝしる」ことの出來るやうな境界に立至ることの出來ぬ人であり、藝術的執心と人間的趣味性の享樂とに浸ることに於て、寧ろ本當な生活を見出した人であつたことがうなづかれる。この一節のやはらかい一種の毒舌には、「ひたぶるの世捨人」になりきれない、僧侶としての不成功者であつたことからの反感も、いくらか手傳つてゐないだらうか。節全體の調子から、私にはさうした心ばへも直覺されるやうに思ふ。

人は、かたち有樣のすぐれたらんこそあらまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて言葉多からぬこそ飽かず對はまほしけれ。

めでたしと見る人の、心劣りせらるゝ本性見えんこそ口惜しかるべけれ。品・かたちこそ生れつきたらめ、

心はなどか賢きより賢きにも移さば移らざらむ。
かたち・心ざまよき人も、才無くなりぬれば、品くだり、顔にくさげなる人にも、立交りて、かけず、けおさる〜こそ本意なきわざなれ。

【節意】　容貌・風采の優雅は望ましい。それからよき心術（心根）も大切だ。これに學問才藝が加はることが更に望ましいことである。

【語釋】　○かたち・有樣　容貌風采。　○聞きにくからず　聞いてゐて快感を覺える。　○愛敬（アイギヤウと讀つて訓む）　今日「あいきやうがよい」などと用ひてゐるあいきやう。　○飽かず　何時までも何時までも。　○對はまほし　對坐してゐたい。　○めでたし　立派なものぢや。好ましい。　○と見る人の　と思つて見る人が。　○心劣りせらるゝ本性　見かけ倒しな案外ゆかしげのない心根。　○品・かたち　容貌（人品）風采。　○生れつきたらめ　生れついてもゐよう。親讓りで修正も出來まい。　○賢きより賢きにも　普通賢いといふ程度から更に一段と賢いといふ所までも。　○才（ザエ）　學藝才能「才なくなりぬれば」才のないものと決着してしまふと。　○品下り顔にくさげなる人　人品の低い其の上容貌の醜い人。この語は次の「かけず、けおさる」にかゝる。　○立ち交る　同列に交つて。　○かけず　比肩することも出來ず。　○けおさる　壓倒される。頭があがらぬ。　○本意なきわざ　心外千萬な。殘念な。

【口譯】　人の身（に具はつてゐることで望ましいことは、其の）容貌や風采の優れて美しいといふことである。（かういふ人は）一寸何か一言言つたのでも誠に聞き心地がよく、（溢るゝばかりの）愛敬があつて、しかも決して多辯でない――かういつた（諸要件を具へた）人に對しては、何時までも〳〵對座してゐたい。（だが、容貌や風采だけが美しいだけではまだ物足りない。その上に目には見えないが、心が又美しくないといけない。なぜかといふと）容貌や風采が誠に立派だわいと思つて（飽かず見とれて）ゐる人が、どうかした拍子に、今まで懷いてゐた感歎や尊敬の念の薄らがせられるやうな卑しい本心をあらはすやうなことのあるのは、誠に遺憾至極なものである。（なるほど人に生れつき）の人品や容姿といつたやうなものは、親讓りなもので變改も修正も出來なからうが、心（の方だけ）は修養次第で、なみ〳〵な賢者の域から更に〳〵賢い人の部類へまでも、移し進めようといふ心掛けさへあるならば、移し進め得る筈だ。

（然らば）容貌・風采と心根さへ美であつたらよいかといふに、まだそれでは十分でない。それにもう一つ才藝といふものが無いといけない。（この人は何等）才藝の持合せが無いな（といふ見極めがついてしまふと）、人品の卑しい、さうして顔立ちなどもにくさげなさうした人々にさへも、それらとつき合つて對等といふまでも行かずすつかり壓倒され（つき合ひ負けして）てしまふ。それは誠に心外千萬なものである。

【餘論】　この節の說き方は、中々整頓してゐる。先づ秀麗な眉目、閑雅な態度といふ外的美をあげ、次に隱れた心の玲瓏たる內的美について、これを一個の靜的存在と見做して述べ、最後に、其の心と外貌（謂はば體）との調和的な發動に因つて最もよい效果をもたらし、能率をあげ得る才學藝能（謂はば用）に說き及んでゐるところに妙があ

る。この體・用兼ね具へた人こそ最も望ましいといふのは、今日の言葉でいふならば、容姿端麗、四肢五體の均齊な發達、それに知・情・意の圓滿な錬成された人とも稱すべきところであらう。

色卽是空、空卽是色、眉目容貌等は假の姿と觀じ、それらについて云爲するを戒められてゐる佛徒として、大いに容姿の美を高調するところに、趣味の人であり、ひたぶるの世捨人になりきれぬ兼好の面目があることを忘れてはなるまい。

ありたき事は、まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道、又有職に公事の方、人のかゞみならむこそいみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかくして拍子取り、痛ましうするものから、下戸ならぬこそ、男はよけれ。

【節意】　前節に述べた謂はゆる才について、これを具體的に例示し、上流紳士としてのたしなみについて言及してゐる。

【語釋】　○ありたき事　習得しておきたいこと。　○まことしき文の道　實地に應用出來る學問。世道人心に裨益し得る學問。修身齊家治國など。役立つ經書などもそれである。　○作文　漢詩・漢文を作ること。　○管絃　音樂のわざ。管は笛・笙・篳篥などの類、絃は琴や琵琶など。　○有職　朝廷や武家などの古來の典禮や儀式等に通曉してゐること。もと「物知り」の意味の語で「有識」と書くべきを、誤つて「有職」と慣用されて來たのだといふ。　○公事（クジ）　禁裡に於ける行事や公務。　○手筆　○走り書き　すら〳〵と巧みに達者にかくこと。　○聲をかくして　聲がよくさうして節の運ばし方が巧みで。一說に「聲を隱して」と讀み、「微吟しつゝ拍子を取る」意に解するものもある。　○拍子（ハウシ）　今日い所の拍子。それ〴〵の歌に合せて週期的に手を拍つたり、笏（シャク）を打つたりすること。　○痛ましうするものから　痛み入り、困じ果てた風にはするものゝ。（待つてゐましたとばかり意地きたなく手を出すことの反對）。　○下戸（ゲコ）　酒の量の少いこと。　上戸（ジャウゴ）の對。　○男はよけれ　この「男」は社交界に顏を出してゐるほどの男（紳士）といふ程の意味である。「いでや此の世に願はしかるべき」とあつた冒頭の文の主體も、この「男」の願望なのである。

【口譯】　人として身に習得しておきたい才藝では、經世濟民など實地に應用出來る學問や、漢詩漢文・やまと歌・音樂などの諸藝である。又有職故實や公事などの方面で、他人の師表になつてゐるといふことは、誠にえらい望ましく羨しいことである。そのほか、手書くことも、きれいにすら〳〵と達筆に書き、聲がよく節廻しも巧みで、歌の拍子も上手にとり、盃などをさゝれた場合には、（さゝの露にも醉ふ意氣地なしで、いやもうさうは戴けませんなどゝ）痛み入り、持てあました風にはしてゐるものゝ、さりとて滿更の下戸でないといふあたりが、男として具へたい禮度であり、たしなみである。

【餘論】　この一節によつて、私達は兼好法師の當時の上流社會の人々の學問才藝に關する趣味好尙を知ることが出來た。同時にこゝに列擧してある諸藝や學問は、とにかく一わたり作者兼好自身にも心得のあつたやうに思料される。徒然草一卷は、まさに、この希望によつてはげんだ才學技藝の集積ともいふべきか。それとも已にこれだけの

修養が出来てゐて、自分の持つてゐるものを標準として、紳士の必備條件として數へあげたものか、其の先後は今こゝに妄斷すべきではないが、とにかく彼自身もこれらに對して可なり自信の持てる程度にまで達してゐたものと思はれる。

從つて、「痛ましうするものから」などいふ、誠に人情の機微を穿つた說明をなし得る點から推して、彼も亦この程度の般若湯愛好者であつたと思はれる。さうして微醺を帶びて、聊かお自慢の咽喉と節まはしで、當時流行の早歌（サウカ）などロずさんでゐたらしい樣子も仄見える。

かう仔細に讀み味つて來ると、この第一段全章は、兼好の生活史の縮約であり、兼好自身の縮圖的告白のやうにさへ思はれる。攝關大臣には成らうとして成れず、殿上人や受領級の小役人にはなることを屑しとせず、佛徒たるには、餘りに人間味や藝術的氣分が豐富で俗界から脫離しきれず、遂に趣味の園に優遊涵泳して、言ひたいことを言ひ、したいことをして過さうとしてゐた兼好の略傳が、此の第一段の底流として波うつてゐるではなからうか。

「下戶ならぬこそ男はよけれ。」の末句は、冒頭の莊重さに比して、餘りにくだけ過ぎた觀がないではないが、そこに衣冠束帶を脫いだ本當の人間味――虛僞虛飾の殼の凡てを取り去つた最後には、誰もが到達せずにはゐない人性の眞を以てとゞめをさしてゐるのだと思ふと、內容的には押しも押されもせぬ强味のある結びであることを感じさせられると思ふ。

いにしへの聖の御代――第二段

いにしへの聖の御代の政をも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづに淸らをつくしていみじと思ひ、所せき樣したる人こそうたて、思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬・車に至るまで、あるに隨ひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ。」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「公のたてまつりものは、おろそかなるをもてよしとす。」とこそ侍れ。

【章旨】　其の身の富貴なのに任せて奢侈贅澤を恣にすることが、却て其の身の品位をおとす所以であることを說き、名君賢相の輝ける實例を示す。

【語釋】　○いにしへの聖　昔の明君聖天子の御治世、但し和漢を通じてのことである。　○民のうれへ　しもゝの人民どもが難儀（疲弊困窮）することを。　○國のそこなはるゝをも　國力伸展が阻害され或は內亂や外敵の國家的危機に逢着することをも。　○知らず　こゝでは「知つても知らぬ顏をしてゐる」の意で、「意に介せず。」「頓着せず。」などと譯す。　○淸らをつくし　華美や奢侈のありつたけをし盡して。「つくす」は漢字なら「盡す」「悉す」があたる所。　○所せき樣したる人　あたり狹しとばかり驕り高ぶつて振舞つてゐる人。他人の迷惑や思はくも省みず婆婆一ぱいに幅とつて傍若無人に振舞ふ人。　○うたて　忌はしく。あさましく。呆れかへるほどに。　○思ふところなく見ゆれ　嗜のない、無分別なもて餘され者と思ひ做される。　○馬・車　當時の風とて、馬は乘馬であり、車は牛車のこと。漢文なら「車馬」とあるべきところ。　○あるに隨ひて　有り合せ

の物で間に合せて置け。　○衣冠　これには服飾の全部を含めてゐる。衣服袴袴履等をも。　○九條殿の遺誡　九條殿とは朱雀・村上兩朝に仕へ天暦元年右大臣になつた藤原師輔公のこと。邸宅が京都の九條通にあつたので斯う呼んでゐる。公は其の遺誡即ち子孫の爲に書き殘した家憲の中で、「始レ自ニ衣冠一及ニ于車馬一、隨レ有用レ之。勿レ求ニ美麗一。不レ量ニ己力一好ニ美物一、則必招ニ嗜欲之謗一……」と言つてゐる。それを指したのである。　○順德院の……　これは第八十四代の帝のことで、其の御著に「禁秘抄」といふのがあるが、それを指す。これは禁中の儀式や有樣など細別してお書きになつてある。「『禁中の事ども書かせ給へる』にも」とは、つまり「『禁秘抄』にも」といふに同じ。　○公のたてまつりもの　天子の御召しになるもの、「お召しになる物」とだけいへば、衣服でも車馬でも、供御即ち御食膳などのことにも通ずるのであるが、禁秘抄卷上、御裝束の事の條に、「天位者御物以レ疏爲レ美」とあるから、こゝでは主として天子の服御と見るべきである。それが又上記の「衣冠より馬・車に至るまで」といふ九條殿の遺誡の引用とも相通ずることになる。　○おろそか　原文に「疏」とあるのでもわかるが、前の「清ら」の反對で、質素・お手輕などの意。

【口譯】　（和漢の）昔のよく治つた明主賢皇の御代の政（が頗る質實であつたこと）を忘れてしまつて、人民どもが困憊疲弊しようが、國力の減衰し、內亂外寇の國家的危機が迫つて來ようが、さうしたことには一切無頓着で、萬事芦端たゞ〳〵華美豪奢のありつたけをし盡して、これ見よがしにえらいと思ひあがり、あたり狹しとばかりふんぞりかへつて驕りたかぶつて居る人は、（痰唾でも吐きかけてやりたいほど）忌はしく、さうして又無分別な嗜のない者と思ひ做される。（名君賢相とも言はれる方々は皆この點に深く心を御用ひになつたものだ。）かの九條殿の御遺誡にも（身に着ける）衣服冠履をはじめとし、乘用の馬や牛車の如きに至るまで、すべて皆有り合せの物で間に合せて置け。（決して）華美や綺羅を希ひ求めてはならぬ。」とある。尙又順德院の禁秘抄にも「天子のお召しになる御服などは質素なお手輕なもので結構である。」とさへ仰せられてゐる位であるぞ!!

【餘論】　「こそ……けれ」の第三終止形は兼好の好んで用ひた句法である。いや兼好のみならず當時の文學には共通的な流行性をもつてゐた。だが斷章を疊みかけてある隨筆文の特色として、きび〳〵した表現の力とクライマックスの明示とに主力をこめてある文體には、特にこの種の强調的力說的句法の必要が多かつたものと思はれる。乃ち「こそ……けれ」は、決して第一終止形ばかりでやつてゐるのが單調だからとて、時々これを使用して見るといふやうないゝ加減なものでなかつたことに注意せねばならぬ。もしもこの場合を直接兼好の口から聞かされてゐるとすると、きつと逆吊つた眥、上氣した頰、それに切齒扼腕か然らずんば拳骨などを振り上げて卓を叩きつつ厲聲疾呼した場所に違ひない。この語氣と身振と情熱とを以て强調力說すべき箇所も、如何んせん、文字といふ記號ではさうした複雜した內容を表記することが不可能である。それで或は傍線を施したり、朱點や圈點を加へたり、現代では「!、!!」など外國語に使用されるエキスクラメーションマーク（感嘆符）などを使用してゐるのであるが、兼好時代の人々は、その代りに「ぞ、なん、や、か」の係を用ひて第二終止形（連體段）で結び、或は「こそ」の係に對して第三終止形（已然段）で結ぶといふ普通でない句法を採つて、讀者の注意を惹き、創作者の意圖を暗示したのである。だからこれが口譯に當つては、決してこれら係の詞「ぞ、なんや、か、こそ」を除去して、さうして結びを第一終止形（終止段）に還元しておいただけでは作者の創作心理に透入したものとは言へない。必ずそこに

語勢、身振、表情等の强調力説的背景を想はせるだけの暗示性・刺激性を含んだ表現を持ち來さねばならぬ。此の段の口譯で、「所せき樣したる人こそ……」の處に

「痰唾でも吐きかけてやりたいほど」

といふ語を挿入したのも、「『……結びのおろそかなるをもてよしとす』とこそ侍れ。」といふ所で、

「……とさへ仰せられてゐる位であるぞ!!」

と言つて、「さへ」や「……だ!!」など添へたのも其の意味である。

邊幅を修飾することにのみ憂身をやつす輕薄漢に對して、俗界脱離の象徴たる文樣もなく飾りもない墨の衣に身を包み、極端な簡易生活に浸つてゐる兼好が漏らした怒罵の聲とも思はれるのが本段である。「いにしへの聖の御代の政をも忘れ民のうれへ、國のそこなはるゝ……」のあたりは、平家物語の卷頭の文の「……これらは皆荷主先皇の政にも從はず、樂を極め、諫をも思ひ入れず、天下の亂れん事をも悟らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば……」の文と一脈相通ずるふしがあるやうに思はれる。

兼好が簡素な生活を力説し、又は共鳴してゐるのは、一つには、彼自身の趣味でもあり哲學でもあつたやうだ。徒然草に到る處に此の思想の表れが伺はれる。以下しばらくこれが摘錄を試みる。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ……多くのたくみの心を盡して磨き立て、唐の、大和の、珍しく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の煙となりなむとぞ、打ち見るより思はるゝ。……（第一〇段）

人はおのれをつづまやかにし、おごりを退けてたからをもたず、世を貪らざらむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。……（第一八段）

名利につかはれて靜なるいとまなく、一生を苦むるこそおろかなれ。たから多ければ身をまもるにまどし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。……大きなる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらむ人はうたておろかなりとぞ見るべき。……（第三八段）

後世を思はむ者は、糂粉瓶一つも持つまじきことなり。持經・本尊に至るまで、よきものを持つ、よしなき事なり。（第九八段）

遁世者は、たきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。（同上）

「（松下禪尼）ものはやぶれたる所ばかりを修理して用ふることぞと若き人に見ならはせて、心づけむためなり。」と申されける、いとあり難かりけり。世を治むる道、儉約をもととす。女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける、まことにただ人にはあらざりけるとぞ。（第一八四段）

「……（最明寺入道）『肴こそなけれ、人はしづまりぬらむ。さりぬべきものやあると、いづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さしてくまなくを求めしほどに、臺門の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得て候ふ。』と申ししかば、『こと足りなむ』とて、心よく數献に及びて、興に入られ侍りき。その世にはかく

こそ侍りしか。」と申されき。（第二一五段）

昭和二年十二月廿八日、歳末御慰勞の思召により、諸大官と共に宮中豐明殿で御陪食仰付けられて退出した田中首相謹話の一節に「……平常御所持の御時計の如きも貴族院議員山崎龜吉氏の經營する時計製作所の製作に係るもので、十二三圓程度の品と拜承してゐる。御腕時計の方もニツケルか銀の十二圓程度のものを玉體におつけ遊ばされていらせらるゝ由、御質素の程恐懼に堪へない次第である。……（東京朝日）といふことがあつたが、兼好がこの昭和に再生してゐたら、きつと驚喜してこれを引用したらうと思ふ。

よろづにいみじくとも——第三段

よろづにいみじくとも、色好まざらむをのこは、いとさうざうしく、玉のさかづきそこなき心ぢすべき。露霜にしほたれて、所定めずまどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるはひとりねがちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて、ひたすらたはれたるかたにはあらで、女にたやすからず思はれむこそあらまほしかるべきわざなれ。

【章旨】　この世の中の現象のうちで、最も嚴肅な、全生命的なさうして藝術的な戀愛といふものに關する兼好一流の徹した趣味的考察の人生記錄である。

【語釋】　○よろづ　紳士として具備すべきすべての才藝をさす。即ち學問・藝能・容姿・道德など。　○色好まざらん　色は女色で、好まざらんは「好まざる」といふに同じ。男は世間的に相當に認められる地位階級の者をさし、今日なら紳士といふほどの意。　○さうざうし　「淋々し（さみさみし）」の音便で、「神々し」が「かうごうし」となると同形。物足りなさを感じる。淵ひがない。人間味がない。　○玉のさかづきそこなき　玉は美稱立派は立派ながら最も肝心な部分（本屬的屬性）を缺いて居て役に立たぬといふことの喩。韓非子の外儲說右上傳二に「爲ニ人主一而溺ニ世其群臣語一、譬猶三玉巵之無レ當。」とあるのが此の語の出典であるが、兼好の引用はむしろ文選卷一の左思の三都賦序に「玉巵無レ當、雖レ實非レ用。」とあるものに因つたものと思はれる。これは徒に美辭麗句を駢べて眞理實相を逸してゐる文章を誇つた評語である。　○露霜にしほたれて　着てゐる衣服が露や霜にびしよ濡れになつて。　○親のいさめ　親の强意見、折檻。當時は目上から目下に對する誡めを「いさめ」といひ、目下から目上に對する諫言を「教訓」と言つてゐた。平家物語にはかうした例がある。　○世のそしりをつゝむ　世間の非難に對する氣兼苦勞。つゝむは憚つてつゝみ隱すこと。　○あふさきるさに　「合ふさ離るさに」で、此方が思ふ壺に合致したと思つて喜んでゐると、いつか彼方に離間が生じてゐる意。あちらが首尾がよければこちらが不首尾になつて。　○さるは　「然あるは」の約で、さういふ男は。　○ひとりねがちに　とかく不首尾つゝきで添寢の出來ぬ夜ばかり續いて。　○まどろむ　「目瀉むで」とろ〳〵と眠ること。　○をかし　笑止千萬であるが又興あるものである。「お氣の毒な」と十分同情は感ずるものゝ、とにかく興趣につぶりものである。　○たはれたるかた　身も心もとろけるやうに溺れたはけきつてゐるといふだらしない部類。　○やすからず思はれんこそ　お安く見られぬのが。どうにも丸められる愚下長男と甘く見られないのが。

【口譯】　いかに萬事に堪能であつても、戀愛を解しないやうな男はどうも（人を近づけ親しませる）人間味といふも

のが乏しくて、いはゞ折角の玉の杯に(一番肝心な)底が無いといつたやうな(物足りなさ)を感じがするのを否むわけにゆかぬ。(さても戀することの面白さよ)夜露や霜に濡れそぼちなゞら、(自分に聊かでも氣のありさうだと認めた)女を尋ね求めて、あそこやこゝを浮かれ歩き、親の意見や世間の惡口をおそれ憚る氣兼苦勞で心の休まる暇もなく、(思ふ人には思はれず、思はぬ人から戀ひ慕はれるなど)あれやこれやの思はく違ひに思ひ亂れてゐる。そんな男の(常として)とかく逢ふ夜は少く、大方は獨り寢がちで、(待つ戀のじれつたさ、逢はぬ戀のつらさに夜毎夜毎)とろりとする間もなく歎き明かすといふ有樣。それがいかにも(お氣の毒とは思ひながらも)情趣深く思はれる。しかしさうかと言つて、たゞもう一がいに色戀にうつゝを抜かして、だらしなく惑溺しきつてゐるといふ手合ではなくて、女どもから「どうにも丸められるそんじよそこらの鼻下長男とは違つて、どこかにキリツとした類もしい男らしい所があるわねえ。」と敬服されるやうな一ふしのある男でありたいものだ。

【餘論】「花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情深し……」(一三七段)と言つてゐる兼好は、決して食はず嫌ひで超然高擧を決めこんでゐる君子・似而非ピューリタンではなかつた。だが皆人の味ひ所とする徹底飽和の狀態を好まなかつた。漱石の草枕に「喜の深きとき憂いよ〳〵深く、樂の大いなる程苦も亦大きい。之を切り放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ、大事なものが殖ゑれば寢る間も心配だらう。戀はうれしい、嬉しい戀が積れば、戀をせぬ昔がかへつて戀しかろ。……うまい物も食はねば惜しい。少し食へば飽き足らぬ。存分食へばあとが不愉快だ。」といふ一節があるが、色戀に對する兼好の考は、この「食はねば惜しい。」「存分食へばあとが不愉快だ。」との中間を採つて「少し食つて、いつも飽き足らぬ」狀態を玩味してゐたやうに思はれる。此の章に於ける「露霜にしほたれて……獨り寢がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。」といふ所などがそれにあたるやうに思ふ。だから夫婦生活さへ、天下晴れての同棲生活などは沒趣味な骨頂と見て、「妻といふものこそ男の持つまじきものなれ。『いつも獨住みにて』など聞くこそ心にくけれ……如何なる女なりとも明暮添ひ見んには、いと心づきなく憎かりなん。女のためも中空にこそならめ、餘所ながら時々通ひ住まんこそ年月經ても絶えぬ仲らひともならめ。あからさまに來て泊り居などせんは珍しかりぬべし。」(一九〇段)と言つてゐる。すなはちこゝでも戀の重荷に人々は言はれぬ苦勞するのや、待つ戀や、逢はぬ戀や叶はぬ戀や無限の趣味があると喝破してゐる。それゆゑ、草枕の中の志保田の娘那美さんが、觀海寺の納所坊主泰安から艶書を受取ると、本堂で和尚さんと御經を上げてゐる最中へいきなり飛び込んでいつて、「そんなに可愛いゝなら、佛樣の前で一緒に寢ようつて、出しぬけに泰安さんの頸つ玉へかじりついた。」と言つたやうな露骨な徹底的な戀愛沙汰には共鳴出來ないに違ひない。

それから第一〇七段に、「……女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、引きつくろふ人も侍らじ。」といつてゐるのも、「玉のさかづきそこなき心ちぞすべき。」といふ造化の妙諦を側面から叙説したものと見てよからう。それはとにかく「女にたやすからず思はれむこそあらまほしかるべきわざなれ。」と結論した一語こそ粹道の極意といふべきであらう。

不幸にうれへに——第五段

不幸に、うれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつつかに思ひ取りたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つ事もなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基の中納言のいひけむ、配所の月、罪なくて見むこと、さもおぼえぬべし。

【章旨】　方便としての出家隠遁でない、それ自身を享楽してゐる隠遁生活や、罪なく配所の月を見る寂靜な境地を述べてゐる。

【語釋】　○不幸に　夫に先立たれたとか妻子に死に別れたとかいふやうな不幸な目に逢つて。　○頭おろし　剃髪して出家すること。落飾ともいふ。　○ふつつかに　間違つた料簡から、さもしい心根から、不純な動機から。（虚名譽や權勢などの得たさで、門を鎖して閉ぢ籠つてゐて。　○待つ事もなく　何等（名聞利達などに對して）期待する所もなく。　○さしこめて「鎖し籠めて」し　さういふ風にしてゐるのが本當の遁世生活だ。　○さるかたにあらまほ　○顯基の中納言　從三位權中納言源顯基卿のこと。後一條院の近習の臣で、西宮左大臣高明の孫。三十七歳の時出家して圓昭といつた。永承二年四十七歳で寂す。　○配所の月　流罪左遷の人の望れる都離れした遠い山間か海邊など。さて撰集抄の卷三、「中納言顯基の事」に、「帝……（後一條天皇）はかなくならせ給ひしかば、中納言、天台楞嚴院にのぼりて頭おろして、大原といふ所になん行ひすましていまそかりける　朝に仕へし其のかみより、明暮あはれ無くして淺所の月を見ばやとて泪を流し……」とあり、又發心集　卷五「中納言顯基出家籠居の事」に「若うより司・位につけてうらみ無かりけれど、心は此の世の榮を好まず、深く佛道を願ひ、菩提を望む思ひのみあり。常の言草には、彼の樂天が詩に、『古墓いづれの世の人ぞ、姓と名とを知らず、化して路傍の土となりて、年々春草生ひたり。』といふことを口づけ給へり。……朝夕琵琶を彈きつゝ、罪無くして罪をかうぶりて配所の月を見ばやとなん願はれける。」などゝあるものから引用したものである。　○罪なくて　罪あつて配流されたのでは、當然の酬とは言ひながら、そこに悔恨憤懣の念が伴つてゐて、明鏡止水の心境であるわけにはいかぬ。それゆゑ何等咎めらるべき罪科なくて配流されてゞ希つたのである。然らば自分勝手にさうした山間や海邊へ旅行し滯在してゐてもよいではないかと言はれるだらうが、さういふ自發的な旅行　滯在では何時でも歸京が出來るので、この種の生活からのみ感得される「藻鹽たれつゝ侘ぶと答へよ。」といふ風な「侘びしさ」の眞髓を味ふことが出來ぬ。そこで、やはりどうしても勅勘といふ自由意志に任せぬ重い拘束を蒙つて、淋しからうが、侘しからうが、不自由であらうが、じつとこらへて一定期間そこに落ちついて居らねばならぬといふ束縛處命が必要となるのである。但し犯せる罪なくしてといふのであるから、思へば贅澤な注文であり、無理な願望ではある。　○さも覺えぬべし　さうした感じが起るであらう。尤なことだ。

【口譯】　不幸な目に逢つて、悲歎の涙にくれてゐる人が、剃髪して出家したことも、（虚名や權勢などの得たさといふやうな）さもしい料簡から決行したので（さら〳〵）なく、（眞實脱俗的閑寂を喜んでの出家遁世であつて）（外間から伺つても其の庵室に人が居るのやら居ないのやらわからぬくらゐに、ひつそり閑と、門をしめきつて閉ぢ籠り、何等虚名や世俗的な利達などについて待ち設けてゐる風もなく（閑寂生活それ自體を享樂して）明かし暮し

てゐるのが、本當の遁世生活といふものだ。（みなこの種の出家遁世でありたいものだ）顯基の中納言は「どうぞして配所で眺める（あの佗びしさ閑けさ、明らけさに滿ちてゐる）月の情感を、罪の無い身で（其の配所で）眺め味つて見たいものだ。」と言はれたさうだが、（思へば隨分我儘な注文ではあるが）成るほど（本當の出家遁世を願つた顯基の中納言にとつては）さうした感じが起るであらう。（尤なことだとうなづかれる。）

【餘論】　他目的的な、方便の爲の、手段の爲の仕事は、何事にまれ厭味のあるものである。況して出家遁世などゝいふ全生命的に打込んだ筈の一大事にまで、さうした臭味があつては、誠に鼻持のならぬ氣障なことである。當時よくさうした心にもない空念佛を唱へて、見てくれをよくしたり謂はゆる「行ひ澄ました」ぶりを發揮してゐたらしいいかさま坊主があつたものと見える。さういふ兼好もあんまり大きな口の利ける方でもないかと思ふが、とにかく彼は趣味としてさういふ境地に憧憬してゐたやうである。

顯基の中納言の願望は心理的な苦痛悔恨の體驗は持たずに、單に環境乃至身體的條件を設定することによつて、寂照な眞如の月を心ゆくばかり玩賞したいといふので　肺結核患者でも何でもない無病、健全な人が、茅が崎あたりの結核療養地に轉地して、眞症患者達が感ずると同一な儚ない絶望的・悲觀的人生觀を懷抱して見たいと念ずるやうな無理が横はつてゐると思ふ。大凡の見當はつくか知れないが、配所の月の本當の趣致は、どうしても罪あつて流謫の憂目に逢つた人でなければわかるものではあるまい。世間によくこれに類した願望を描く人があるやうだから附言した次第である。

名聞利達に心ひかれる出家遁者に痛擊を加へてゐる兼好も、それが自然への憧憬である時には、大いに共鳴同感してゐる。第二〇段に「某とかやいひし世捨人の『此の世のほだし持たらぬ身に、たゞ空の名殘のみぞ惜しき。』と言ひしこそ、誠にさも覺えぬべけれ。」とあるのが其の一例である。

わが身のやむごとなからむにも——第六段

わが身のやむごとなからむにも、まして數ならざらむにも、子といふもの無くてありなむ。前の中書王・九條の太政大臣・花園の左大臣、皆ぞう絶えむ事を願ひ給へり。染殿の大臣も、「子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろきことなり。」とぞ世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓を豫て築かせ給ひける時も、「ここを切れ、かしこをたて、孫あらせじと思ふなり。」と侍りけるとかや。

【章旨】　子孫無用論、否子孫斷絶論の主張を前人の例を擧げて說く。

【語釋】　○數ならざらんにも　取り立てゝいふ程にもない卑しい身分であらうとも。　○無くてありなむ　無い方がよい。　○前の中書王　醍醐天皇の皇子兼明親王のこと。中書とは中務卿の唐名。この親王は中務卿に任ぜられた。世俗で村上天皇の皇子具平親王を後中書王と申し上げるに對して「前」と申し上げる。兩親王とも才學を以て一世に鳴つた方。　○九條太政大臣　藤原伊通のこと。永曆元年太政大臣となり永萬元年薨じた。京都九條に邸宅があつたので斯く呼びなした。子に夭折され、それ以來子の無い方であつた。　○花園の左大臣　源の有仁。後三條天皇の御孫。子持たずであつた。　○ぞう　族（ゾク）の音便。賊

（ゾク）と同音なのを忌んで音便でかういふのである。「子孫」の窓。さて花園の左大臣の言葉といふは、續世繼卷八、「月のかくるる山の端」の條にある。曰く「我も宣はせけるは、いとしもなき子どものあらむは、いと本意なかるべし。村上の帝の末に中務の宮のむまご（孫）といふ人々見るに、させる事なき人々どもこそ多く見ゆれ。我が子などありとも甲斐なかるべし、などぞありける。」　○染殿の大臣　藤原良房のこと。染殿とは京都の地名で、今御苑内に屬してゐる。そこに邸宅があつたので此の稱呼がある。こゝは前の花園左大臣などの例と違つて、良房自身が下記「子孫おはせぬぞよく侍る……」の言葉を弄したのではなく、世繼の翁の物語の筆者が上記の如く評した趣向になつてゐるのである。だから「染殿の大臣に關しても」と譯すといゝ。因に良房は染殿の后即ち文德天皇の皇后となつた方御一人きりしか實子は無かつた。それで甥の基經を養子にした。　○子孫おはせぬぞよく侍る　後を繼ぐべき子孫が無かつたのは、丁度幸なことである。　○末のおくれ給へる　「末」は子孫のこと。「おくれ」は劣ること。祖先より子孫の方が成りさがる。　○世繼の翁の物語　大鏡のこと。但しこゝに引用した通りの文句は大鏡にはない。或は同書中この大臣の事を記した條に「斯くいみじき幸ひ人の子のおはしまさぬこそ口惜しけれ、御このかみの長良の中納言ことの外に越えられ給ひけむ折いかばかり辛うおぼされけむ……」などゝある例を思ひ誤つてゐた記憶のまゝに書いたものか。

○聖德太子　用明天皇の皇子で推古天皇の皇太子となる。我が國佛法の興隆に非常に功勞のあつた方。　○豫て　生前。　○築かせ給ひける　河内國石河郡科長（シナガ）に設置された。　○こゝを切れ……子孫の斷絶を望まれたのは、後世參詣する者の爲の通路の必要がないので、墓へ達する周圍の參詣道を斷ちきるやうに命ぜられたのである。聖德太子傳曆に、「太子四十七歳、命レ駕、科長ノ墓處ニ覧ニ造レ墓者。曰此處必斷、彼處必切、欲レ令レ塵レ絶ニ子孫之後。」と。　○侍りけるとかや　と仰しやつたさうだ。原則通りにと「と」いふ助詞に接續させれば、「侍りけりとかや」とあるべきところ。

【口譯】　（よしや）身分が高貴であらうと、況して又ことさら取立てゝいふ程もない卑賤な身分であらうとも（此の方なら尙更なことであるがどのみち）子などゝいふものは無い方がよい。前の中書王兼明親王も、九條の太政大臣藤原伊通公も、花園の左大臣源有仁公も、皆子孫の絶滅することを冀つて居られた。（又かの）染殿の大臣藤原良房公に關しても「この大臣にも（染殿の后以外に）子孫がおありなさらなかつたが、この事を大鏡に「丁度よい幸である。（一體）子孫の方が成り下つて居るといふのは（誠に）まづいことです。」と評して居る。又聖德太子は、御生前中にすでにお墓を作つておかれたが、その時にも、「この道を切り取れ、彼處の道路を斷ち去れ。（死後參詣してくれるだらう）子孫を絶やさうと思ふのぢや。」と仰しやつたさうだ。

【餘論】　この子孫絶滅論は、理由として「つまらぬ子孫の殘ることは好ましくないから」といふ所にあるやうだが、進化說が肯定され優生學が主張され優良種の繁榮が企畫される現代に出てゐたら、ちよつと論鋒が挫けるが、さうでなければ論點を變更したかも知れぬ。何しろ人類社會の繁榮とか國家の消長とかいふ事から懸け離れた佛の教空想世界に生きてゐる兼好としては、例の趣味感からかう論じて見たものであらう。とにかくこの娑婆世界に於ける未來を目的とした計畫や豫定は、一切賴みにならぬはかないものだといふ考は、大體兼好の根本的人生觀と見えて、「さればよろづに、見さらむ世までを思ひおきてむこそはかなかるべけれ。」（二五段）と唱道してゐる心持は隨所に散見してゐる。

この兼好は又第四二段に「……ある荒夷（あらびす）の恐しげなるが、かたへにあひて、『御子はおはすや』と問ひしに、『一

人も持ち侍らず。』と答へしかば、『さてはもののあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむといと恐し。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。』と言ひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。」といつて、子孫無用論を裏切つた子持讃美論を力説してゐるが矛盾といへば矛盾ながら、「是も一時、彼も一時」と、心にうつり行くよしなし事をそこはかとなく、しかも時間的距離を隔てゝ書き散らした隨筆として、もとより許容すべきことであるばかりか、此の方が却て人間生活の實相に卽してゐると思ふ。火事に逢つた時に、「世の中で火事ほど辛いものはない。」と最上級（most）な言葉を放つた同一人が亦、病氣をすれば「世の中に病氣ほど辛い厭なものはない。」と最上級（most）な苦痛を訴へる。形式論理的につきつめるならば、同一人格に最上級の苦痛が二つ若しはく二つ以上存在する筈がなく、二つ以上あるならば、それはすでに中級（more）の苦痛であらねばならぬ筈だ。併し其の時の其の人にとつて、事實どこまでも最上級（most）として儼存してゐるのである。兼好の上記矛盾した兩說の存在それ自身が、やはり人間生活に儼存するより眞實味のある實有の相であると思ふ。これについて思ひ出されるのは平家物語卷二「少將乞請」の章に出てゐる門脇宰相敎盛の食言である。鹿谷謀議が露顯して大納言成親一味の者が搦め捕られた時、成親の子息丹波少將成經も固より其の魔手の裡にあつた。成經は門脇宰相の婿である。宰相は今臨月に惱んでゐる我が女卽ち成經の妻かはいさに、我が平家一門を亡ぼさうとした者の片割である成經の助命を、到底好い顏して承諾しやしまいと分りきつてゐる兄淸盛の處へ歎願に行く。案の定受けつけるどころか對面さへしてくれぬ。『それでは只今から出家入道して高野・粉河へでも籠居して再び世の交らひはせぬ。』と堅き決意を示して歸りかけると、やつと『いや〳〵出家入道までは餘りにけしからず。その儀ならば、少將をば暫く敎盛に預くる。』といふ許諾が出た。これをきいた宰相が長大息數多たびして『あはれ人の子をば持つまじけるものかな。わが子の緣に結ぼれざらんには、是程まで心をば碎かじものを。』とうめくやうに言つた。正にこれ深刻なる子孫無用論である。然るに舅の心婿知らず、だつこをしてやればおんぶといふやうに、成經は助命斡旋の挨拶につけて、「それにつき候うては、父で候ふ大納言が事をば何とか聞し召されて候ふやらん。」と父成親の助命方まで持ち出すので、呆れかへつた宰相は、そんな我儘を言ふ奴があるかと睨めつけて嗜めてから『いさとよ、御邊の事をこそやう〳〵に申したれ。それまでの事は思ひも寄らざりつれ。』といふと、わつと泣き出した成經は『命の惜しう候ふも、父を今一度見ばやと思ふためなり。ゆふさり大納言斬られ候はんにおいては、成經命生きても何にかはし候ふべきなれば、唯一所で如何にもなるやうに申してたばせ給ふべうもや候ふらん。』と身も世あらぬ體たらくなので、見るに見兼ねた宰相が一時の氣休めにもと、『いさとよ、御邊の事をこそ樣々に申したれ。それまでの事は思ひもよらざりつれども、今朝內の大臣の樣々に申させ給ひつれば、それも暫はよきやうにこそ聞け。』といつてやると、悲しみの涙を忽ちにして喜悅の涙にかへた成經は、『聞きあへ給はず、泣く〳〵掌を合せてぞ悅ばれける。』とある。宰相がつい今しがた呻き出したばかりの深刻な子孫無用論を、忽然として臆面もなく翻へしたのは實に此の一刹那であつた。『子ならざらん者が、誰か唯今我が身の上をさしおいて、是程までは悅ぶべき。實の契りは親子の中にぞありける。子を

ば持つべかりけるものかな。とやがて思ひぞ返されける。」これが宰相の決定的な絶叫である。誰がこ　數分時を隔てて叫ばれた、此のあまりに露骨なさうして全然相背反した變節改論に對して不合理呼ばゝりをするか。人情の機微、人性の眞は寧ろこの矛盾撞着不合理の中に於てはじめて赫燿たる靈光を放つてゐるのではなからうか。

あだし野の露——第七段

あだし野の露、消ゆる時なく、鳥部山の烟、立ち去らでのみ住みはつる習ならば、いかにもののあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。

飽かず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心ちこそせめ。住みはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。命長ければ恥多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なむこそ、すかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはむことを思ひ、夕の日に子孫を愛してさかゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなむあさましき。

【章旨】　世は不定に出來てゐてそれでよい。生物中で人間ほど長命なものはない。四十歳位で死んで結構、老いさらぼうて生きながらへてゐるのは誠にみじめなものである。

【語釋】　○あだし野の露消ゆる時なく　あだし野は墓地の名で洛西嵯峨野の奥、愛宕山の南麓にあつた墓地の總稱といふ。あだし野　露」は後に「消ゆる」と言はんが爲の序詞である。さて此の句は「命が、あだしの露のごとく消え失せる時もなく」といふので、「人が皆不死で」といふに同じ。　○鳥部山の煙立ち去らで　鳥部山は京都の東山、阿彌陀ヶ峰の裾、清水寺の下にある墓地・火葬場。「鳥部山の煙」は「立ち去る」の「立ち」にかゝる序詞。一句の意は「鳥部山の烟のごとく立ち去ること」なくやはり前の句の如く「人が皆不死で」の意。　○住みはつる　住み通す。即ち何時までも生存しつゞける。　○もののあはれ　物の興味情趣。　○定めなき　老少不定。萬物が生滅流轉して永久不變であり得ないこと。　○いみじけれ　頗る妙だ。至極面白い。　○命あるもの　生物。　○久しき　長壽。　○かげろふ　蜉蝣(かげろふ)は蜻蛉に似てもう少し小さい昆虫。羽化して成蟲となると間もなく死んでしまふ。准南子(エナンジ)の説林訓に「蜉蝣朝生夕死。而盡二其樂一。」などゝある。　○夕を待ち　夕を待つ間も遲しとばかり死ぬ。夕が來ればすぐ死ぬ。　○夏の蟬の　夏だけで死んでしまふ故に、夏以外の季節は知らぬ。莊子の逍遙遊篇に「蟪姑不レ知二春秋一。」とあり。其　註に「蟪姑寒蟬也。春生夏死、夏生秋死」とある。　○つくづくと　つらつらみりと。　○こよなう　「此上無く」の音便。　○飽かず惜しと思はゞ　いつまで生きのびても姿婆が厭にならず存命を喜ぶならば。　○住みはてぬ世に　どうせ住みおほせるわけには行かず、やがては死なればならぬ此の世で。　○みにくき姿　老いさらぼうたむさくるしい姿。　○命長ければ恥多し　長生きすると自然へまを仕出來して恥かくことが多い。莊子の天地篇に「富則多レ事。壽則多レ辱。」とあるのが出典である。　○めやすかるべけれ　見よいだらう。　○夕の日に　白氏文集卷二秦中吟の一「不致仕」に「……可レ憐八九十。齒墮髮眸昏。朝露貪二名利一。夕陽憂二子孫一。……」とあるを引く。夕陽云々は

日もや　西山に入りかけたやうな老先の短い身でありながら、子孫のことをあれこれと心配して、奔走してゐる。憂ふることは愛する者の爲への苦勞であるから、同意に解してよい。　○あらまし　豫定し。　○世を貪る　名聞利達のやうな俗世の欲望を選しらする。即ち無暗にたゞ長生きをしたがる。　○あさまし　呆れてしまふ。何ていやなことだ。

【口譯】　あだし野の露は脆く消え失せるが、我々人間の命だけが不死で、其のやうに消え失せる時がなく、又鳥部山の煙はいつか立ち去つて跡方もないのに、我々人間の肉體だけが不滅で、其のやうに亡び去ることもなく、たゞ長生きする一方で、いつまでも〳〵此の娑婆に生存し續け得るものであるとしたならば、どんなにか物事の情趣といふものが失はれてしまふことであらう。（やはり何と言つても）此の娑婆は、無常であり、人の命は老少不定であつてこそ、そこに迚もたまらない味ひといふものがあるといふもの。

生物界を見渡すに、人間ぐらゐ（全體として）長命なものはない。蜉蝣は朝生れたかと思ふと夕にはもう死んでしまふし、夏の蟬は夏だけが一盛りの命で、春や秋といふものを知らぬ。しんみりと（みつめ味ふ態度で）一年を暮して見よ。（たつた）一年三百六十五日暮す間だけでも、（いやもう）此の上もなくのんびりして長いものぢや。

（これに反して）何時まで生きても飽きたらず、まだ〳〵どうして死ねるものかと（執念深く）思ひ込んでゐるならば、よしや千年のよはひを身にうけ樂しんでも、ほんの一夜の夢（といつたやうなあつけない）心地がするだらう。どうせ不老不死といふことはありえない此の娑婆に、（徒に）長生きをして、見るかげもないよぼ〳〵姿で（もそ〳〵して）ゐた所で何にならうぞ。莊子にも命長ければ恥かくことが多いと言つてゐる。長くてもせい〳〵四十になるやならずといふあたりで片づいてしまふのがさつぱりしてゐる。

その四十の坂を越すと、（人間もだん〳〵づう〳〵しくなつて）容儀を繕ふとする氣心も失せ、見つともない姿に面恥ぢもせず、のこ〳〵さい〳〵人中へ出しやばりたがり、棺桶に片足突込んだ身空で、まだ子孫のことなどいろ〳〵取越苦勞をして、それらが繁榮していく末々まで生き伸びる筈にきめ込んで居り、只無暗に長命欲ばかりが深くなつて、物事の情味も興趣（不定な點がたまらぬほど面白いといふこと）も皆目わからないやうになつていく、これはまあ！何といふいやなことだ。

家居のつきづきしく——第一〇段

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらきらかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭も、心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も、昔覺えてやすらかなるこそ心にくしと見ゆれ。多くのたくみの心を盡して磨きたて、からの、やまとの、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで、心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらひ住むべき、時の間のけぶりとなりなむとぞ、うち見るより思はるる。

【章旨】　豪奢一流の住宅論を述べたもの。

【節意】　理想的住宅を概叙してから、上品なゆかしい住宅と豪奢ではあるが俗悪で厭味たつぷりな住宅とについて述べてゐる。

【語釋】　○家居　住宅、すまひ。いろ〳〵な古典を渉猟した活字本などに「すまひ」といふ所によく「住居」といふ漢字をあてゝあるが、この語は「住ふ」といふは行四段活用の名詞形から來てゐるのであるから、「住ひ」「すまひ」とかくのが正しい。　○つきづきし　似つかはしい。しつくりと整ひ調和してゐる。　○假りのやどり　佛教では極樂世界を常住安養の淨土といふに對して、此の現世即ち娑婆世界をほんのかりそめの一時の住ひ場所と稱してゐる。　○よき人　上品な、物事のわかる、嗜みのある人、「下品なわからずや」の對語。　○住みなす　住みついてゐる。住んでゐる。　○今めかしく　當世風、現代式。　○きらきらか　けば〳〵しい。金びかづくめ。　○木立ものふりて　庭の植込などが古木がちで、いかにも古色蒼然たる趣をあらはしてゐて。　○わざとならぬ　殊更に人工を加へたのでなく。上記「きらきらか」の反對。　○心あるさまに　いかにも趣の滿つた樣で。　○簀子　竹を並べてしつらへた竹緣及び、板張りの緣側にもいふが、一般的にはたゞ緣側といふと同じ意味にも用ひる。　○透垣　「すきがき」の音便で、又「すいがき」と訓む。間を透かして作つた目の荒い垣根。　○たよりをかしく　工合がよく。　○うちある調度　その邊にちよいと置いてをる手まはりの道具類。　○背覺えて　古風で雅致があつて。　○前栽「せんざい」の讀み方に注意すること。庭先の植込み。　○心のまゝならず　自然に伸びたまゝにしておかず、枝を剪つたり、矯めたり、葉をすかしたりすること。　○見る目も苦しく　見てもいやらしく思はれ。前の「やすらか」とあつた語に對する。　○わびし　不快だ。前の「心にくし」の對。　○さてもやは　こゝは「さてもながらへ住むべきやは」と「やは」といふ反語の位置を入れかへて見ると解しよい。そんなにして見た所で、永久に住みおほることが出來ようか、出來はしない。　○時の間のけぶり　やがて又べら〳〵と燒け失せもしよう。　○うち見るより　一寸見かけただけで。

【口譯】　住宅が（いかにも）似つかはしく、理想的に構へられてあるといふことは、どうせ（永久に住みおほせるものでない）ほんの假の宿（腰掛的な居場所）だとは思ひ知つてはゐるもののやはり（何といつても）興趣の多いものである。

人品の卑しくない人が閑靜にゆつたりと住みなしてゐる住宅・構では、（そこへ）射し込む月の光までが、（月の光は一樣であるに拘らず）特別に身に泌みて情味深く思はれるものよ。（さうした所では）當世風に、けば〳〵しい金びかづくといふのではないが、植込の竹木なども、（それ〴〵）古色蒼然とさびがついて、殊更人工を加へて矯めたり作つたりしたのではない自然のまゝに素直に伸してある庭の草も、（如何にも捨て難い）趣のある樣子で、簀子や、透垣などのうつりもよく、無造作に置き散らしてある手廻り道具類も、（何となく）古風な韻致が籠つて見え、しつくりと周圍の有樣に適合して落ち着いてゐる。かうした住宅や構は（言はうやうもなく）奥ゆかしく見えるものである。

（ところがこれと反對に）澤山の大工や左官達が腕に撚をかけて（光るばかりに）磨きたて、唐渡りのや、内國產の珍奇で高價な善盡し美盡した手廻り道具類などを（所狹きまでにどた〳〵と）並べて置き、前庭の植込みの草や木に至るまで、（其の素直な伸び〳〵した）自然の風姿をそこなつて、（むやみに）人工を加へて作りなしてあるのは、見る目にも（かうまでしなくてもよかりさうにと）いやらしく、すつかりうんざりさせられる。そんなにした

つて、（今日あつて明日知らぬこの裟婆に）一體何時まで生き永らへて、そこに住むことが出來ようぞ。やがて又火災にでも逢つたら、見る間に燒け失せて煙となつてしまふではないか。こちよつと見かけただけでもすぐさう思はれる。

【餘論】　兼好は衣食住などの物欲に累はされることをさげすみながらも、住宅に關しては折々其の理想論や趣味論を洩してゐる。この一節には彼の理想的住宅論が可なりはつきりと語られてある。が、どこまでも「假の宿り」「さてもやはながらへ住むべき、また時の間の煙となりなむ。」といふ無常觀が離れないところに、佛徒としての彼の面目がある。簡素な自然的な構や庭園を愛して、金力にあかして善美を盡し、家具類も雜多紛々と骨董やの店頭の如く並べたてたのを嫌忌する處は、日本國民性の一面の粹を代表してゐるものと見てよい。雜多紛々と、餘りに巧緻を求めることの嫌忌とは、他の場合では彼はしば〳〵言及してゐる。「賤しげなるもの」（第七十二段）の條にも「居たるあたりに調度の多き、硯に筆多き、持佛堂に佛の多き、前栽に石・草木の多き、家のうちに子孫の多き」と言つて、雜多紛々の醜を難じ、第五十四段の「御室にいみじき兒の」の條の結語としては「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなきものなり。」と述べて、一般的眞理を提唱してゐる。併しながら、兼好の住宅論が、單純な素朴簡素を愛したのではなく、凝つて無いやうで實は大いに凝つて居り、贅をつくさないやうで實は人知れぬ所に大いに贅をつくしてゐる謂はゆる凝りに凝つた高級な趣味にあつたことは、第五十五段の「家の造りやうは」の條に「造作は用なき所を造りたる、見るも面白く、よろづの用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。」といつて、無用の用に會心の賞意を表明してゐるところでも看取してやらねばならぬ。

大方の家居にこそ、ことざまは推し量らるれ。後徳大寺のおとどの寢殿に鳶ゐさせじとて、繩を張られたりけるを、西行が見て、「『鳶の居たらむは何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ。』とて、その後は參らざりける。」と聞き侍るに、綾の小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや「烏の群れゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲ませ給ひてなむ。」と人の語りしこそさてはいみじくこそと覺えしか。徳大寺にもいかなる故か侍りけむ。

【節意】　住宅や構のありさまで、おのづからそこに住む人の心情も推量出來るとて、其の例を擧げてゐる。

【語釋】　○ことざま　心情とか心用ひの程。　○後徳大寺のおとど　左大臣藤原實定卿のこと。建久二年に薨じた。平家物語に舊き都を來て見れば、淺茅が原とぞ荒れにける、月の光はくまなくて、秋風のみぞ身には沁む。」の作者として知られてゐる才學優長な人。この人を後徳大寺といふのは、其の祖父實能が洛北衣笠（キヌガサ）村に徳大寺を建立し、徳大寺左大臣といはれたので、同じ左大臣で紛れ易いので、「後」の字を添へて言ひならはしたのである。　○寢殿　中古時代、貴族の邸宅の構（寢殿作り）の中で、最も大きな主だつた棟で、寢殿とは「正殿」といふ意。閨などと間違つてはならぬ。井蛙抄に據ると、徳大寺家には「獸の間」といふ室が寢殿の西のすみにあつて、そこで實定卿が西行に對句したといふ。　○西行が見て、古今著聞集卷十五、宿執二十三に「西行法師、出家よりさきは、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ歸りて、年頃の主君におはします陰まじさに、後徳大寺左大臣殿のおん許にたどり參りて、まづ門外より内を見入れければ、寢殿の棟に繩を張り

けり。あやしう思ひて人に尋ねければ、『あれは鳶する丞じとて張られたる。』と答へけるを聞きて、『鳶の居る、何かは苦しき。』と疎みて歸りぬ……」とあるをいふ。さて、西行は俗名佐藤憲清（ノリキヨ）後鳥羽院に仕へて北面の武士であつたが、二十三で出家、建久元年に年七十三で寳した。　○何かは苦しかるべき　何でまあ不都合なことがあらうぞ。　○さばかりにこそ　それくらゐのものだ。人柄の底まで見え透いた。　○綾小路の宮　龜山上皇の第十三皇子性惠（シヤウエ）法親王のこと。　○かのためし　後德大寺の大臣の例。　○まことや　なるほどさう言はれて見ると全く。　○悲ませ給ひてなむ　「然せさせ給ひけるとぞ」などの語が略しである。不便（ふびん）に思し召されて、其のやうにおさせになつた。　○語りしこそさてはいみじくこそ（待れ）と覺えしか。　して見ると、さういふ有難いお心根からの御處置であつたかと感心した。こゝの結びの「しか」を往々「しが」と濁つて接續の詞と見誤るものが多い。上に「語りしこそ」といふ係りの詞が出てゐるので、「き」といふ過去の助動詞の第三終止形で結んだのであることを忘れてはならぬ。即ち

未然	連用	終止（第一終止形）	連體（第二終止形）	已然（第三終止形）	命令
○	○	き	し	しか	●

といふ活用表を頭の中に思ひ起し見る必要がある。さうして前號でも說いたやうに、口譯では、其の「こそ」といふ係りを取り去つて、結びも第一終止形に直して「語りし（を聞きて）さてはいみじくこそ（待れ）と覺えき。」といふ風に書き改め、さうしてそこに力說高調的語勢をこめて譯出するがよい。　○德大寺　前記後德大寺とあるを、分りきつてゐるので略記したのである。　○如何なる故かありけむ　どんな仔細があつたであらうか。きつとさうするだけの理由があつたに違ひない。「鳶は古來惡鳥の仲間に見做されてゐるので、それが屋上で鳴く時は凶事があるなどゝも言ひ傳へてゐるから、それこれの理由で網を張つたのかも知れん」といつて、德大寺殿に味方し、物事の是非の斷定にはもつと愼重であらねばならぬものだといふ悟りをも加へてゐる。

【口譯】　大體住宅や構の有樣で、（そこに住む）人の心根や好尚を推量して（十中の九までは誤りがない。）（此の事について思ひ出す一事がある）後德大寺の左大臣實定卿が、寢殿の棟の上に、鳶を止まらせまいとて、其の棟に繩を張らせて（如何にも不體裁極る處置をさせたのを）、西行法師が見て、（其の理由を聞いた後）「鳶ぐらゐが止まつたとて、何でまあ不都合があらうぞ。（鳶は暫し居てやがては飛び立つもの、其の一寸止まる鳶の爲に、あゝして折角の寢殿の棟に繩など張り渡した不體裁さを見苦しいとも思はぬ）此の主人公（大臣）の御心根はこんなに無慈悲、沒趣味であつたのかと、愛想もこそもつき果てた。」といつて、其の後は二度と尋ねなかつたと聞いてゐるが、綾の小路の宮のいらつしやる小坂殿といふお邸宅の棟に（も）、いつか（烏除けらしい）繩を引かれてあつたから、かつて西行法師が後德大寺殿に愛想をつかした前例と思ひ合せて、この宮樣も烏よけの爲にこんなことをさせられたかと考へてゐたところ、さう言はれゝば尤な處置だと頷かれるが、これは「棟に烏が集つて、（そこを丁度よい控へ場所にして）寢殿作りの構內の前庭にある泉水（中島のある池）の蛙を捕り食つたから、（もとより慈悲を第一となされる）宮樣が（蛙どもを）不便に思し召されておさせになつたことである。」と誰かゞ話したが、それなら、誠に有難いお志からのお計ひだと（すつかり）感心してしまつた。（して見ると）あの後德大寺殿が（不體裁をも厭はず）繩を張らせられたのにも、どんな仔細があつたのであらうか。きつとそれには相當な理由があつた

に違ひない。

【餘論】　西行が後徳大寺殿の處置に愛想をつかした理由は、爲に少時くらゐ翼を休めさせてやつていゝぢやないか、それがうるさいとて、四六時中、あの莊嚴端麗なるべき正殿の棟の上に、繩など引き渡して、何といふ無慈悲なそして美的趣味を解せぬ没分曉漢ぢやといふ點にあたつたらしいが、屋上に繩を張り渡した不體裁は、この頃ラヂオのアンテナの林立や引渡した針金でもよくわかるやうに思ふ。小坂殿の棟の繩張りに象好が感心したのは、外觀の不體裁を犧牲にしても、生類（蛙）を不便に思召された貴い慈悲心に對してである。さうして尚象好はこの事から、「盾の兩面を觀よ。」といふ金言の眞價と、孔子の「始吾於レ人也、聽二其言一而信二其行一。今吾於レ人也、聽二其言一而觀二其行一。」（公冶長）といふ人物品隲法上の革命宣言の趣をも傳へてゐると見てよからう。

同じ心ならむ人と——第一二段

同じ心ならむ人と、しめやかに物語して、をかしきことも世のはかなきことも、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆたがはざらむと向ひゐたらむは、ひとりある心ちやせむ。互にいはむほどのことをば、げにと聞くかひあるものから、聊かたがふところもあらむ人こそ、われはさやは思ふなど、爭ひにくみ、さるからさぞともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには少しかこつ方も、われと等しからざらむ人は、大方のよしなしごと言はむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、はるかに隔たるところのありぬべきぞわびしきや。

【章旨】　朋友の種々相をあげ、全然自己と共鳴した心の友の得難きことを詠歎してゐる。

【語釋】　○同じ心ならん友　凡ての點（趣味や性向等）に於て全然自己と共鳴し肝膽相照し得る友。　○世のはかなきこさも　取りとめもない世間話。四方やまの話。　○うらなく　心置きなく。腹藏なく。　○嬉しかるべきに　こゝは和歌などに謂はゆる「句跨り」の姿の處で、「嬉しかるべけれ。」ときつてから更に「然るに」といふ接續詞で之を起すと見るがよい。　○つゆたがはざらんと　何一つ對手と齟齬を生じさせまいと努力して。　○獨ある心ちやせむ　人は二人であるが、相手が少しも自分といふものを出さず、迎合これ事としてゐるなら、萬事自分の考から一歩も出來ないことになるから、結局一人で居ると同樣な結果にしかならないだらう。　○げにと聞くかひあるものから　尤なことととうなづきつゝ傾聽するだけの友達甲斐はありながらも、併し又一方では。　○さやは思ふ　「然思ふやは」と反語「やは」の位置をかへて見るとよくわかる。即ちさう思ふものか、さう思ひはせぬ。　○さるからさぞ　さういふ譯だからさうなる筈だ。」　○げには　實際は。　○少しかこつ方、前の「聊か違ふところも有らん人」のことで、少しは違つた意見も持つてゐて、相手に對して不滿を感じ、不足を言ふやうな人でも。　○言はむほどこそあらめ　言ひ合つてゐる分にはよからう。　○まめやかなる心の友　本節冒頭の「同じ心ならん人」をさす。　○隔りたるところ　彼と此との間の趣味や性向や學識などの懸隔。　○わびしきや　物足りなく淋しい。

【口譯】　氣心のしつくり合つた友人と、しんみりと語り合つて、面白をかしいことも、取りとめもない世間話も、心置きなく語り合つて氣晴らしにするといふことは（どんなにか）嬉しいことであらうに、（さうした註文通りに

氣心のしつくり合つた）友人もありはしまいから、（それで）お互同志がどちらからも相手の氣心を害せぬやうにせいぐ〳〵氣を使ひながら對談したりするやうなことになるが、それなら、自分一人でゐると同じ寂しさしか感じられないだらう。

お互同志が話し合はうといふぐらゐの事は、（すぐ其の意味を悟つて）いかにも尤もなことだと合槌打つてやるだけの友達甲斐は持ち合せてゐるものの、（一から十まで御無理尤もといふのでなしに）少しは異つた意見も持ち合せてゐるといふ、さうした人が、（堂々と）「私は（どうも）さうは思はない。」などと論爭したり反駁したり、「さういふ譯だから、さうなる筈ぢやないか。」などと（鼻息荒く）論じ合つたら、（大きに）退屈凌ぎになるであらうとも思はれようが、實際のところ、少々異つた意見を開陳して相手に不足を感じ且つ口走つたりする類の人でも、要するに、自分と氣心のしつくりと合つてゐない友人であると、通り一遍の世間話等を話し合つてゐる間はよからうが、一歩を進めた（眞劍な）話になると、（どうしてもやはり）眞實、心から許し合つた友達といふものに比べて見ると、そこにひた〳〵とせぬ大きな隔りといふものがある筈で、それが（いかにも）淋しくもあり物足りなくもあるものぢやて。

【餘論】　好きな友と好かぬ友、共鳴する友と共鳴せぬ友との微妙な差別段階が頗る穿つた表現で語られてある。自分をほめてくれてゐる友達が却て氣にくはず、眞向正面から思ひ切り惡口を言ひかける友達を却て痛快がつたり頼もしがつたりするといふことのあるのが、この世間の實相である。趣味識が極度に發達し、自然の奥祕に透入融會した人にとつては、まことに十幾億の自己以外の人間「うるさき人々」とのみ見做されたことであらう。かう考へて見ると此の朋友論を吐露した兼好の心持が少しは分るやうな氣がする。

「つゆ違はざらんと」は、他の同じ心ならむ人」「聊か違ふところもあらむ人」「我とひとしからざらむ人」の句から類推すると、これもつゆ違はざらむ人と」の意に見る方が穩當であり、且つはつきりして始末がよいのである——と藤田學士の「徒然草精義」に說いてあるのは、傾聽すべき見解であると思ふ。

ひとりともしびのもとに——第一三段

ひとりともしびのもとに、書をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、よなうなぐさむわざなれ。書は文選のあはれなる卷々、白氏文集・老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのはあはれなること多かり。

【章旨】　同時代の人々の中から全然共鳴する心の友を得難いので、古人の述作詩文を通して、古人を友とすることの心安さと悅びとを說く。

【語釋】　○ともしび　今日いふ燭臺の類。　○見ぬ世の人　すでに物故した古人。　○文選（モンゼン）　支那の、梁の武帝の皇子である昭明太子が撰つたもので、周の末から六朝にかけての名詩名文をあつめてある。六十卷（もとは三十卷）我が平安朝の上流社會には大いに愛讀され「文選爛、秀才半」といふ位に言はれたもの　○あはれたる卷々、　趣味感興の多い六十卷といふ

ふ意。　○白氏文集（ハクシモンジウ）　支那唐代の詩人白居易（白樂天）の詩や文章を集めたもの。もとは七十五卷あつたさうだが、漸く散佚して七十一卷として傳つてゐる。文選と共に大いに愛讀されたのである。白氏長慶集ともいふ。　○老子のことば　謂はゆる「老子」のことを指し、支那周の老子の著作である。老子道德經ともいふ。上下二卷ある。　○南華の篇（ナンゲヱ）　周の莊子（サウシ）の著した莊子（書名の時はサウジと濁つてよむのが普みぐせ）のこと。八卷ある。姓は莊、名は周と呼ぶ謂はゆる莊子が、曹州の南華山に隱遁して此の書を著した。後、唐の玄宗皇帝が莊子を尊崇して、封じて南華眞人といひ、其の著書を「南華眞經」又は「南華經」と稱した。三十三篇から成つてゐる。　○この國の博士　わが日本の物識り、學者。　○古の人は　懷風藻をはじめ經國集や本朝文粹（ホンテウモンズヰ）其の他をさす。

【口譯】　たゞひとり、（夜靜かな時など）燈のそばで、書物を繰りひろげて、すでに故人となつてゐる昔の俊秀な人々を友として（その思想や感情に觸れることは）（まことに）此の上もない氣晴らしになることである。さて其の書物としては、全卷趣味と感興とにみち〳〵した文選をはじめとし、白氏文集や、老子の書いた道德經五千言や、莊子の著した莊子八卷などが特に面白く思はれる。我が日本の物識りや學者たちの著作も、（此の頃のには碌なものはないが）昔の書物（述作）には、感興をひかれるふし〴〵が澤山ある。

【餘論】　藤田學士の徒然草精義に「こゝの讀書に、三つの閑寂がある。「ひとり」とあるのは人の閑寂、「こもしびの下」とあるものは、晝夜のうち、夜といふ時の閑寂、「書をひろげて」とあるのは、事の閑寂である。卽ち「ひとり」「こもしび」「書」の三者は字眼で、閑寂の象徵である。」と評してあるのは誠に面白い着眼であり鑑賞であると思ふ。その三つの閑寂な境内の呼吸のぴつたりと合つた中に住して心眼をみひらき心耳を澄ます時、兼好はその絹介孤獨な生活から來る物足りなさを暫し忘れてゐたものと思はれる。

但し「ビールは新しいほど良く、葡萄酒は舊いほど良い。」と、いふが、物は新しいほど佳なるものは、新しきがよく、舊きほど佳なるものは舊きがよいので、決して舊いものは、それが舊いからといふ單一な理由で直ちに佳なりとは斷定されないと同樣に、新しいものは、又それが新しいからといふだけで、卽ち不佳なりと言ひきれるものでない。此の點に於ては兼好は、やゝ尊外卑內の醜惡な國民性の一部と、徒らに古に溺れてゐるといふ無批判な尙古主義者であるといふ謗からは免れぬやうだ。だがこゝにあげてある愛讀者が、彼の趣味や性格の上にも、又思想の上に幾多の共鳴點や類似點を色どつてゐることに至つては、其の原因結果の先後はこもあれ、確認せずにはゐられない。

和歌こそ——第一四段

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしのしづ・山がつのしわざも、言ひ出づればおもしろく、おそろしき猪も臥すゐの床と言へば、やさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれにけしき覺ゆるはなし。貫之が「絲によるものならなくに。」と言へるは、古今集の中の歌屑とかや言ひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがた・ことば、このたぐひのみ多し。この歌に限りて、かく言ひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には「ものとはなしに。」とぞ書ける。新古今には、「殘る松さへ嶺にさびしき。」と言

くる歌をそいふなるは、まことに少しくだけたる姿にもや見ゆらむ。されどこの歌も、家隆卿の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰せくだされけるよし、家長が日記に書けり。歌の道のみ古に變らぬなどいふことはあれど、いさや、今も詠みあくる同じことば歌枕も、昔の人のよみるは、さらに同じものにあらず。やすく、すなほにして、姿も清げに、あはれも深く見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のことばこそ又あはれなることは多かめれ。昔の人は、いかに言ひすてたることぐさも、皆いみじく聞ゆるにや。

【章旨】　やまと歌といふものゝ頗る情趣の深いものであることを說き、更に當時の歌風を論じて、古に及ばないと難じてゐる。

【語釋】　○なほ　やはり。○あやしのしづ山がつ　見るかげもなき下賤な者、百姓などや木樵や炭焼など。　○言ひ出づれば　歌の材料として三十一文字に詠ずると。　○臥するの床　猪の別名、猪が枯草などを臥床にするより出た語。八雲御抄（順徳天皇の御著で、歌學の書）に「寂蓮法師が言ひけるは、歌のやうにいみじきものなし、猪といふ恐しきものをも臥するの床など言ひつれば、優しきなり、云々」とあるに據つた語。　○この頃の歌　後好在世時代即ち新古今集の歌の新勅撰集から南北朝時代をかけていふのであらう。　○一ふしをかしく　一寸一句どころは雅致あるやうに。　○ふるき歌ども　後に引用してゐるこころから見ても、古今集・後撰集・拾遺集から、新古今集などの歌をさしてゐるやうだ。　○あはれにけしき優ゆるは　あはれ（趣致）を感じ、景致に心動かすやうな作は。　○貫之　紀貫之、古今集の撰者、延喜より天慶にかけて和歌國文を以て朝廷に仕へ、書も亦見事であつた。天慶六―天慶九。年六十五。　○縁による……　古今集卷九羇旅の部に「東へ罷りける時、淀にて詠める」と詞書して出てゐる。「歌意は、別れといふものは、捲き合せて太くしてある縑でもないのに、どうしたものか、別れるとなると、其の絵が細くなるやうに人は心細くなる。」といふので、要するに「人と別れる時には心細く感じるものだ」といふだけのこと。○古今集　醍醐帝の延喜五年勅撰和歌　勅撰集の第一で二十卷。　○歌屑　最も拙劣な歌。　○詠かぬべき　詠めさうな。　○ことがら　言葉の言ひ廻し。　○すがた・ことは　歌意や修辞。上記の歌のやうなのは　心細いの「細い」といふ言葉を引き出す爲の序として上の句を言ひ續けたもので、かやうな歌を序歌といふ。他の例をあげれば「心すぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな。」「朋霧のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな」などもそれ。　○源氏物語　紫式部の著、五十四帖あり。さて總角の卷に『物とはなしに』と貫之が此の歌からの別れをだに心細き筋に引きかけ心を……」とあるのを引く。　○新古今　土御門帝の建仁三年の勅撰集。二十卷。　○殘る松さへ　冬の部に「後日吉の歌會に落葉といふことを詠みて卷りし」と詞書して、祝部成仲の詠じた「冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ嶺にさびしき。」をさす。陶淵明の四時の詩の終四句「冬嶺秀孤松。」の意を歌つたもの。歌意は冬枯の季節になつて、山骨もあらはに木々の葉がすつかり落ち盡くしてしまつたので、落葉せずして殘つてゐる冬嶺の松までが、いかにも孤影悄然たる有樣で嶺につつ立つてゐる。」　○言ふなる　新古今集中の歌屑と言つてゐるのは。　○しだけたる姿　「木の葉降り」のあたりを初めとし、上下の句の調和も整はず、續きのよからぬをいふのであらう。　○家隆卿　歌合の一方法、普通は一人の判者で勝ち負けを判じるが、家隆卿といふのは參合した作者の多數で、互に優劣を批判論評して判定する仕方をいふ。　○よろしき　常時の言葉では（尤づよし）といふ位の心持で、「よし」といふのが當上の評語であつたと。　○沙汰　評定、評釋。　○家長　土御門帝の建久元年に、和歌を好ませられた後鳥羽上皇が和歌所といふ司を置かせられたが、この源家長が、そこの開闔（あつかり役。所長）となつた。「家長日記」は彼

の書いた和歌所の記錄である。　○歌の道のみ　八雲御抄に「何のわざも衰へ行くに、只この道(歌道)ばかり末代に絶ゆべからず」などゝあるをさす。　○いさや　さあ、どうだか分つたものぢやない。　○詠み合へる　誰も彼も詠んでゐる。　○歌枕　歌によく詠み込まれる諸國の名稱や名物など。例へば「吹上の濱・難波津・ありそうみ・千賀のしほがま・末の松山・六玉川」など。

○やすく・すなほ　穩當で且つ自然的にすら〳〵してゐた。　○清げに　垢拔けがしてゐて。　○梁塵記抄　八雲御抄によれば、後白河院の勅撰だといふ。梁塵とは「漢有二虞公一。善歌、能令二梁上塵起一。」とある故事から出た語で、「謠ひ物」のこと。さて梁塵記抄は、神樂・催馬樂などいふ平安朝の謠ひ物を集めた書物で、二十卷。　○郢曲　俗曲・歌謠の類の總稱。即ち神樂歌・催馬樂・風俗歌・今樣・朗詠などをさす。語の起りは、支那の戰國時代に、楚の國の都郢で、客が歌謠した俗曲を「郢曲」といひならはしたことから、之を上記の意味に用ひたので、恰も唐の都の洛陽といふことから、我が國の帝都をもさう呼稱するやうな用例。　○言ひ捨てたることぐさ　不用意な口ずさみ。「ことぐさ」は「言草」で、言葉・言の葉ぐさなどといふに同じ。

【口譯】　(この前段で漢詩文の趣味について述べたが、)大和歌といふもの、こいつもやはり頗る趣味に富んだものであるよ。誠に見るかげもない下賤な身分の者や木樵や草刈・炭燒男などの營みも、これを和歌といふ姿態に盛り、三十一文字の韻律に調べると、忽ち雅趣のあるものとなり、(あの見るから)不恰好で恐しい野猪でも、「臥すゐの床」といふ大和言葉で詠じ出すと、すつかり優美な(代物)になつてしまふ。一體當世の和歌を見るに、一寸一句ぐらゐは(如何にも)雅致あるやうに諷詠してあるわいと思はれるのはあるが、どうしたものか、古い頃の歌なんかのやうに、謂はゆる言外に餘韻や餘情をこんもりと感ずるといつたやうな作はない。あの貫之が「絲に搓ろものならなくに……」と詠じた歌は、古今集の中での最も拙劣な歌だとか世間に取沙汰されてゐるけれども、これだけの歌でも、どうして〳〵當世の歌詠み仲間には詠めさうな言ひ廻しとも思はれぬ。貫之時代の歌には、歌の姿にも詞にも、今引合ひに出した歌のやうな(序詞や、懸詞や緣語など、謂はゆる今日の修辭法の緣裝法と稱する辭樣を用ひたもの)作が頗る多い。それだのに「絲による」の歌だけ取り立てゝ集中での歌屑だたどゝ取沙汰されたことも、思へば不合理な話で、(これなみの歌がまだ〳〵さらにある筈だ。)貫之こそいゝ面の皮だ。(とにかく)自分兼好には此の歌のどうしてそんな謗を受けたのかよく了解されぬ。(現に)源氏物語には、此の歌の第二句を「ものとはなしに」として採り入れてある。(これによつて見ると、當世歌人の眼から見て「ものならなくに」と言つた其の箇所にけちをつけて集中での歌屑だなどゝ非難を加へたのであらうが、こんなに極論されるほどの駄作とも思はぬ。)それから新古今集では、あの祝部成仲の作「殘る松さへ嶺にさびしき。」といふのを集中での歌屑だと言つてゐるが、なるほどこいつは少々調はないところもあるやうに思はれる。けれども、此の歌にしたところで、一人の判者の評決ならともかく、衆議判に、先づ無難な作だといふ評決があつて、其の評決後にも後鳥羽院から特に御賞詞をさへ賜つたといふことが、(時の和歌所開闔)家長の日記にも書いてある。して見ると、さう一がいに言ひくさすべき歌でもなからう。此の歌道だけは昔に變らず、(其の隆盛を持續していく)などゝ言つてゐる向もあるけれど、さあ、どうだか分つたもんぢやない。今日其の道の者どもの誰や彼やが詠み合つてゐるのと、同一な詞や歌枕などでも、昔の人が驅使し詠み込んであるのは、まるで別物といつたやうな、語感がする。穩當で自然的ですら〳〵としてゐて、歌の姿態もすつきりと垢拔けがして居り、情趣もたつぷりこめられてゐるやうに思はれる。それからあ

の梁塵秘抄に採錄されてゐる俗謠や宴曲の類の文句、こいつも又堪らないほど情味の深いのが多いやうである。おしなべて古人のは、ほんの假初に口ずさんだ片言隻句でも、皆どこかに一種の詩趣があふれてゐるやうに聞えなされるやうな氣がしてならぬ。

【餘論】　詩人の仕事は森羅萬象と人事との妙所を選擇し、單純化して、それを諷詠する者に美の悅樂を與ふるにある。さてこそ、あやしのしづ・山がつのしわざも言ひ出づればをもしろく、怖しきわのしゝも、臥すゐの床といへば優しくなり、美化されてしまふのである。拾玉集卷四に「夏の野の萩の初花をりしかむ臥猪の床に枕ならべて」とあるのと、「ゐのしゝも共に吹かるゝ野分かな。」との語感の相違なども味つて見ると面白い。兼好一流の尙古主義は、歌論に於てもひたすらに上代を讃して、當世をおとしめてゐるが、これと同樣なことは、前段及び第二十二段にも麗々と書かれてある。「何事もふるき世のみぞしたはしき。今樣はむげにいやしくこそなりゆくめれ。」とて、うつはもの、文のことば、たゞ言ふ言葉の何れに對しても、隨喜の涙を流してゐる心底がよく窺はれる。

よろづのことは——第二一段

よろづのことは月見るにこそ慰むものなれ。ある人の、「月ばかりおもしろきものはあらじ。」と言ひしに、またひとり、「露こそあはれなれ。」と爭ひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらむ。

月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住ることしばらくもせず。」と言へる詩を見侍りしこそあはれなりしか。稽康も「山澤に遊びて魚鳥を見れば、心たのしぶ。」と言へり。人遠く、水・草清きところにさまよひありきたるばかり、心なぐさむことはあらじ。

【章旨】　折にふれゝば、あらゆる風物が、人の心に著大な感興を催さしむるものであることを說き、次に水について力說してゐる。

【語釋】　○よろづのこと　色々な物思(悲喜憂患)。　○月見るにこそ　大江爲基の歌「ながむるに物思ふことの慰むは、月はうき世の外よりや行く」(拾遺集雜上)によるか。　○折にふれば　丁度折が折であるなら。即ち、其の人の主觀と、季節やら、景情やらといふ客觀とが互に相即し、調和し、共鳴を起させる狀態になつてゐるなら。　○人に心はつくめれ　その人に對して感興を誘發させるやうだ。　○時をもわかず　季節や時刻・春夏・秋冬)朝・晝・夜を超越して。○めでたけれ　愛でたしで、好い、快適感を與へる者。　○沅湘日夜　唐の戴叔倫の「湘南即事」(三體詩卷一)と題する詩に「蘆橋花開　楓葉衰。出一門何處望二京師一。沅湘日夜東流去。不レ爲二愁人一住　少時。」とあるのを引く。作者が洞庭湖附近に在つて帝都を懷ひなつかしんで詠じたもの。沅湘は沅水と湘水との二つの川で、共に洞庭湖に流れ入つてゐる。引用句の意味は、こんなに日夜懷郷の情に胸をこがして寂しがつてふさいでゐる愁人(戴叔倫自身のこと)の心を察して、少しは都の方に流れ去ることを遠慮すべきであるのに、心無き沅水・湘水の二川共に、夜となく晝となく東へ東へと流れ去つて、ちつともとゞまらうとしない。しかも自身はこゝを立去つて懷しの都へ行くわけには行かない。あゝあの東流の水が羨ましい。　○稽康　晉代の謂はゆる竹林の七賢の一人。稽山に隱棲したので稽康と稱した。本姓を二奚」といふ。　○山澤に　山林や沼澤などに遊んで、鳥や魚などの解放された思ふさま

な生活を觀ると、すつかり氣も心ものびく〳〵して來る。この引用は文選卷九からで、嵇康の友人で竹林の七賢の一人である山濤（さんたう）といふ男が、吏部尚書となつてゐたが、後この嵇康を推擧して自分の官を讓らうとしたら、以ての外の事と怒つた嵇康は直ちに絶交の書を送つた。その文句が、これで、「游（シテ）二山澤一（ニ）、翫（レバ）二魚鳥一、心甚樂（ダシムル）之。一（ヒトビト）行作（イナラバ）レ吏、此事便廢（ノスナハチセンイヲダンズ）。安能拾（ニ）其所（ノ）樂（シムル）、而從（シテ）其所（ノ）懼（ルル）哉。」と書いてある。　○人遠く　人里から遠く隔たつた。　○水草清き　水が清く、草の緑も鮮かな。

【口譯】　色々な物思ひ・苦勞といふものも、（あの美しい）月を眺めるとすつかり慰めやはらげられるものである。それで或人が、（まづ世の中に）「月ぐらゐおもしろいものはあるまいなあ。」と言つたところ、又他の人が、「（さうばかりも言はれまい。あの露に備はる風情（ふぜい）こそ、月以上であらうぞ。」と言つて優劣論をたゝかはせたのは面白い。（私をして言はしめれば、何れにもせよ、絶對的な美的價値といふものゝあらうやうがない。）求める心にぴたつと來たやうに、丁度その折に適合するなら月と言はず露と限らず、何が面白く感ぜぬものがあらうか。みんな趣あるものとなるのである。さういふわけで、月や花や（雪）は言はでものこと、何物もみなこの道理に洩れないが、あの風といふものだけは、特に人の心に多大の感興や景趣を催させるものゝやうだ。それから又、あの岩に碎けて（水晶玉のやうな飛沫を飛び散らしつゝ、輝く日光のもとに七色の虹彩を現じつゝ）清く流れる水の趣、こいつも何時と言はず快適な感を與へてくれる。二沅・湘日夜東に流れ去る、愁人の爲に住まること少時もせず。」とうたつてある戴叔倫の詩を讀んで、流るゝ水に懷ひを寄せた作者の哀情にほろりとさせられた。晉の稽康も、其の友に與へた書に「山林・水澤に清遊を試みて鳥や魚類の自由や境地を觀てゐると、おのづから心が愉悅にみち〳〵て來る。」と說いてゐる。なるほど、うるさい人里から遠く隔つた、水の清い草の緑のすが〳〵しく鮮かなあたりをそゞろあるきするぐらゐ、浮世の苦勞も忘れ果てゝ、心ののどやかさを感ずることはあるまい。

【餘論】　山水放浪の優游自適な生活を理想とする口ぶりに兼好の老莊趣味も浮んでゐる。作中に呼び出して來る人にも、みんな彼の趣味と共鳴共感する風變りな人であること、趣味の對象としてあげてゐるものも、月・露・花はともかく、風・水といふやうなものにまで及んでゐるのは、幽寂愛好の一面を仄めかしてゐると見てよからう。

⑨　風も吹きあへず——第二六段

風も吹きあへず、うつろふ人の心の、花になれにし年月（としつき）を思へば、あはれと聞きしことのはことに忘れぬものから、わが世のほかになりゆくならひこそ、なき人の別（わかれ）よりもまさりて悲しきものなれ。されば白き絲の染まむことを悲しび、道の巷（ちまた）の別れむことをなげく人もありけむかし。堀川院の百首の歌の中に、

昔見しいもがかきねは荒れにけり
　つばなまじりのすみれのみして

さびしきけしき、さること侍りけむ。

【章旨】　移ろひやすき人心のあさましさを叙し、生別の死別よりも痛ましく悲しい旨を述べ、さて古い悲戀悲歌をかゝげて、其の眞實性を說く。

【語釋】　○風も吹きあへず　風が吹いて來るよりも先に、目まぐるしく移り動いてしまつてゐる人の心。この句は古今集中の二つの歌、櫻花疾く散りぬるともおもほへず、人の心ぞ風も吹きあへぬ。（紀貫之）」「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける。（小野小町）に據つたもの。　○人の心の花　人心といふ花、花にも譬ふべき人の心の意に、戀し合つた人の心根。　○あはれと聞きし　情愛の濃さを身に沁みて喜び聞いて居つた。　○わが世のほかに　思ひ思はれた兩者の戀愛關係が絶えて、まるで無關心な行路の人のやうになつて行く。　○ならひこそ　よくさうなり勝ちなものだが、そこの點が。　○白き絲の　淮南子說林訓にある語を引く。即ち「墨子見二練絲一而泣レ之。爲ル其可二以黃一可ヤ以黑ム。」により、唯一色で、もはやどうにも變化出來ぬものならよいが、黃にも黑にも御意のまゝになるのが頼りなくて怨じ泣いたのである。　○路の巷　同上に「楊子見ル逵路一而哭レ之。爲ル其可二以南一可ヤ以北ム。」とあるを引く。逵路（キロ）とは九方に通じる大路のこと。　○堀川院の百首　堀河天皇の康和年中に、當時知名の歌人十四人に命じて各百首づゝの歌を奉らしめた。正しくは「堀河院御時百首和歌」といふので、一名堀川太郎百首とも稱へてゐる歌集。　○昔見し　藤原公實の作で、「菫」と題してある。さて一首の意は「曾て相思の仲となつて通ひ馴染んだ女の家の垣根は、それから年月經た今日やつて來て見ると、すつかり荒れ滯れてゐる。そしてそこには茅花（茅萱の花のことであるが、こゝでは轉じて茅萱そのもののこと。）の中に交つて、しほらしい菫の花がちらほら咲いてゐるばかり、その外には、何一つ目に觸れるものもない。まして當時睦言をかはし合つた彼女の姿などは見るべくもない。思へば味氣なく又佗びしいことよといふのである。　○ミる事　歌の上に表はれてゐるやうな事實が、本當にあつたことであらう。

【口譯】　一陣の嵐がやつて來れば、花が散つて處をかへるのは言はでものことであるが、（移り氣な）人の心の花（戀心）は、それよりももつと早く、吹く風も追つかけきれぬ間に、移ろひ變つてしまふ。さうした移り氣な人心に（逐つて、つい淺墓にも）曾て契りを結んで居つた過去を追憶すると、その頃、何と濃い情愛の籠つた、うれしい呀きだらうと身に沁みて聞いてゐた戀人の睦言が、今なほ一つ〳〵耳にこびりついて忘れはせぬものゝ、（さうした熱かつた戀仲もいつの間にか）冷め果てゝ、まるで見知らぬ他人同志のやうになつていつてしまふといふ事は、ごく世に有り勝ちなことではあるが、併し破綻がもたらした悲痛さは、死別にもまして痛ましくも亦悲しいものである。だからこそ、白絲が黃にも墨にも染まり、九逵の巷に立つ人が、西へも東へも氣まぐれな心次第で向はれるのを見ては、移り氣な人の心も丁度この通りぢやと思ひ合せて、歎きもし、悲しみもしたものゝ思はれる。堀川院の百首に「昔見し妹が垣根は荒れにけり茅花まじりの菫のみして。」といふ藤原公實の歌があるが、いかにも佗びしい味氣ない情景が生きてゐる。實際作者公實自身には、さうした、戀人に見換へられたといふ泣くにも泣けない悲痛な體驗があつて歌ひ出したものであらう。

【餘論】　人情の離合背叛といふ最も微微な問題を巧に取扱つたものとして、第二十七段の「今の代の事繁きにまぎれて、院には參る人もなきぞ淋しげなる。」といふあたりのそれと共に、味深い一段である。

名利につかはれて——第三八段

名利につかはれて、靜かなるいとまなく、一生を苦しむるこそおろかなれ。

財多ければ身をまもるにまどし。害を買ひ、わづらひを招くなかだちなり。身の後には、金をして北斗を支ふとも、人の爲にぞわづらはさるべき。おろかなる人の目を喜ばしむるたのしび、又あぢきなし。大いなる事

肥えたる馬、金玉の飾りも心あらん人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利にまどふは、すぐれて愚なる人なり。

【章旨】　俗人の生命に換へても欲しと思ふ名聞利慾などは、決して恃み糞ふべき對象の最後のものでないことを力説してゐる。

【節意】　第一節、名聞利慾は、人の希求すべき第一義的のものでないことを概叙す。

第二節特に財産及び財産慾の有害なことを指摘し、これが奴隷となつてゐる者を憫笑してゐる。

【語釋】　○名利　名聞や利慾を求める事に東奔西走して。名利の爲に浮身を窶して。此の句、愚迷發心集の「名利大毒、儲ニ二世之身心ヲ」などに據つた觀がある。　○まどし　「貧し」に同じ。不爲である。弱味を與へる。　○害を買ひわづらひを招く　この句は、文選にある阮嗣宗の「詠懷詩」の「多ケレバ財爲ニ患害ト」や、文選の「不ニ懷レ寶以買レ害ヲ。不ニ飭レ表以招レ累」に據つたものと思はれる。　○身の後には　死んだ後に、あの高い空の北斗星に聞へるほど遺産を積み殘したところで。此の句も白氏文集卷二十一に「身後堆レ金圧ニ北斗一、不レ如ニ生前一樽酒ト」　○人の營にぞ　後の人から其の遺産の分配や消費に關して厄介がられるであらう。　○心あらん人　思慮深い人。　○うたて　厭はしく。　○金は山に　文選卷一に出てゐる班固の東都賦の「賤ニ奇寶一而不レ珍。損ニ金於山一。沈ニ珠於淵一」などに據る。　○すぐれて　取りわけ。格別。

【口譯】　名譽や聲聞や利慾を獲んとて浮身を窶して東奔西走して、じつと落著いた長閑な時間を持つことなく、再び經がたい一生を斯うした體たらくで苦しめ終るのは、てもさても馬鹿な骨頂である。

（一體）財産を多分に持つと、身を無事平安に持するといふことに關しては不爲である。貨財あるが爲に、人はとかくそれが原因となつて危害を蒙つたり、七面倒をひき起したりするのである。死んだ後に、あの天空の北斗星に聞へるほど黄金白銀をたんまりと積み殘しても、子孫の者達は却て其の金故に飛んだ荷厄介を背負ひこまれることになるだけのこと。愚な手合の目を悦ばせ驚歎させるやうな樂しみ事、こいつが又誠に小づまらない。堂々たる車や、肥えたさうして毛並のよい馬、金銀珠玉の七寶を鏤めたりして飾り立てること、これには俗物の度膽を抜き、低劣な虚榮心の滿足を買ふには役立たうが、すべて思慮深い人にとつては、何といふ厭はしい（氣障な）愚かしい營みだぐらゐにしか思はれぬ。（思ひきつて）金銀財寶は山に投げ棄てよ、珠玉の類は深い水底へ投げ込んでしまへ。そんな財寶利慾などに心引かれて思ひわづらつてゐる輩は、人間の中の屑ともいふべき取りわけ愚劣な手合である。

うづもれぬ名を永き世に殘さむこそあらまほしかるべけれ。位高く、やむごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。おろかにつたなき人も、家に生れ、時にあへば、高き位にのぼり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人・聖人みづから卑しき位に居り、時にあはずして止みぬる、また多し。ひとへに高きつかさ・位を望むも次におろかなり。

【節意】　つかさ・位の名聞を求めること亦愚なる俗念であることを說く。

【語釋】　うづもれぬ名　後世まで言ひつぎ語りつがれるやうな盛名、即ち高位高官。　○おろかにつたなき人　智慧才覺愚昧で且技能藝術拙劣な人。　○家　權門。門地家柄の高い家柄。　○時にあへば　幸運な機會にめぐりあへば。　○賢人・聖人　善

通賢人とは孟子や顔回などを、聖人とは孔子などを指稱するが、こゝでは大體兼好の意中の人即ち老子や、莊子や許由や巢父などの無欲恬淡な人々をさしてゐるやうだ。　○自ら　われとわれから。自ら好んで。　○時にあはずして　一生不遇で終る。　○また多し　許由や巢父其の他いくらもある。　○次におろかなり　前節の「利に惑ふものはすぐれておろかなり。」といふに對し、それよりはやゝよいにしても、それに次ぐ程度の愚者であると論じたのである。

【口譯】　永遠に言ひつぎ語りつがれるやうな素晴しい盛名を千載の後にまで殘すといふこと、こいつは望ましいことゝ言つてよい。だが高位顯榮な身分になつたからとて、直ちに古今に卓越した逸才だと斷ずるわけには行かぬ。世には、誠に箸にも棒にもかゝらないやうな愚昧庸劣なおつちよこちよいでも、たま〳〵門閥の家に生れ合せ、幸運にめぐり會はすと、(とん〳〵拍子に)高位高官に經あがり、驕り贅澤のありつたけをし盡す者もあるのである。さうかと思へば又これと全然反對に、誠に不出世の偉才を懷いて此の世に生れた賢人や聖人でありながら、自ら好んで卑賤な地位に甘んじて居り、一生芽の出ることもなくて空しく果てゝしまふといふ類の人も亦なか〳〵に多い。かう考へてくると、たゞもう一がいに高位高官病に取りつかれて藻掻きあがいてゐるのも、前の名利の爲に一生汲々たる輩に次いでの愚昧漢といふべきである。

智惠と心ととそ、世に優れたる譽も殘さまほしきを、つらつら思へば、譽を愛するは、人の聞きを喜ぶなり。ほむる人、そしる人、共に世に住らず、傳へ聞かむ人、また速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られむことを願はむ。譽はまた毀のもとなり。身の後の名殘りて、更に益なし。これを願ふも次におろかなり。但し強ひて智を求め賢を願ふ人のために言はば、智惠出でては僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。

【節意】智惠や心術の方面で聲譽を博さうとあせる者のおろかしさを嗤ふ。

【語釋】　○人の聞きを　世間への聞え即ち評判。　○身の後の名　晉書に張翰の語として「使ヨ我有ニ身後名一。不レ如ニ即時一盃ノ酒一。」といふのがあり、又列子に「身後餘名、豈足レ潤ニ枯骨一。」などゝあるに暗示を得たものか。　○智惠出でては　老子第十八章に「大道廢有ニ仁義一。智惠出有ニ大僞一。」とあるを引く。　老子の句の意は、人が天地自然の大道に則つて生活してゐる時には僞などゝいふ事はなかつた。後世、小賢しい人智を以て物事を詮議し、處理するやうになつて、僞などといふ香しからぬことが生じて來、それで僞りとか不正不義とかを擊退救治しようとて仁義などといふ小やかましい道德論が唱傳されるに至つたのである。」といふほどの義。　○煩惱　我々人間の心身を迷はし惱ます慾情や我執や願望などをいふ。

【口譯】　さて(前述の名利や高位高官などで俗念を滿足させようとせずに)たゞひたすらに、(精神的な)睿智と心術といふこの方面に於てこそ、千載不朽の聲譽を博したもの、(さうして又これなら天邊から愚者のわざといふ誘を受けずに濟みさうにも思はれるが、)よく〳〵考慮して見るに、一體この譽を愛好する心理を解剖して見ると、これは取りも直さず、他人が、自分の睿智心術の卓拔を聞いて褒めそやしてくれるのを喜ぶことなのである。所で今少し大所高所から考察するなら、其の譽め手も、毀り手も、何れも、此の世に永久に住みおほせる人達ではない。それから、又、そのほめそしりを人の口から聞き傳へてゐる人も、同樣にやがて此の世から姿を消すのであろ。かう考へて來ると、(どの道永久性を持たない人達に對して)誰に不評判をされるのをおそれ、誰に好評をして貰ひたい

とあせる必要があらう。更に一歩を進めて考へると、譽は毀の本であり、毀は又譽の本である。（樂は苦の種、苦は樂の種といふと同樣な考へ方）、それゆゑ、死後に譽が殘つて見たところで、一向有難味がない。さういふわけで、睿智や心術といふ精神的方面での香しい名を殘したいと念ずるのも、官位欲求者に次いでの愚者といはねばならぬ。但し、かう說破しても、なほ肯かずに是が非でも智者・賢才たるの聲譽を贏ち得ようと念ずる人の爲に更に一言するならば、一體智惠といふものを働かせてから、世に僞りといふものが發生し、事面倒になるし、妙智とか才能とかいふものは何れも、名利慾から刺激されて發達したもので、極言すれば、煩惱が附けあがつて幅を利かしてゐるといふ代物なので、決して、無理おしをしてまで冀ひ求むべき對象物ではないぞといふ一事である。

傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき、可・不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。誰か知り　誰か傳へむ。これ德をかくし、愚を守るにはあらず、もとより賢愚得失の境に居らざればなり。まよひの心をもちて名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事みな非なり。言ふに足らず、願ふに足らず。

【節意】　上述俗人冀求の對象たる財產や官位や、睿智・心術など、何れも識者の冀ふべからざるあだなる一假象に過ぎないと斷じてゐる。

【語釋】　○可不可は一條なり　正不正、智不智・善不善は畢竟一如（同一）である。莊子の齊物論に「方可、方不可、方不可、方可因レ是因レ非、因レ非因レ是。」とあつて、結局萬物は皆齊しき由を說く。齊物論の語はこれを取る。　○まことの人　大悟徹底した人。宇宙や人界を大觀してゐる達人。　○智もなく德もなく　莊子逍遙篇に「至人無レ己、神人無レ功、聖人無レ名」などゝあるによる。まことの人には、智德功名などいふ淺薄な見え透いたやうな物で、傳ふべき、明示すべき何物も無いものだ。　○德をかくし　自分の睿智や心術の光を隱し包んで、一般の凡愚俗衆の中に紛れてそれゝ目立たせぬこと。「和レ光同レ塵」の意。　○名利の要を　この「要を」の二字は衍文と見做すが適當である。莊子の第二十九、盜跖篇に「以爲レ害二於性一、故辭而不レ受也。」とあつて、「名利を要むるに」と書いてあつたのが、かういふ風に後人に衍り挿入されたものと思はれる。非ニ以要ニ名譽一也。」により、　○萬事みな非なり　世間一切の事は皆誤つてゐる。

【口譯】　ほかから傳へてはじめて聞き知つたり、學んではじめて知つたりするやうなのは本當の智とは言はれない。それではどんなのを本當の智といふか。（生知が本當の智で學智や困知を純粹な智と見做さない）抑々世間で可とか不可とか區別してゐることもつまりは一如である。又如何なるを善といふか、（眞理の體に於ては善・不善など區別すべき何物もない。）本當に大悟徹底した謂はゆる眞人には、俗衆の目に觸れるやうな智も顯れてゐなければ、德も顯れてゐない、功も顯れてゐなければ、名も顯はれてゐないものだ。だから誰あつて其の智德功名を知り辨へる者もなく、隨つて又これを傳へる人もない。これといふのも、眞人がことさらに身に備はつてゐる智德功名を隱し包んで、つとめて愚昧な徒から目立たないやうに紛れこませてゐるといふわけではなく、本來、さうした賢とか愚とか能者とか不能者とか、善とか不善とかいふやうな差別的な境界を超脫して、萬物一如といふ境地に安住してゐるからである。俗世間の人々は我執我慾に迷つた心で名聞利慾を求めることに汲々としてゐるが、さうした心構

からすると、結句前述のやうな愚劣なあさましいことにしかならない。之を要するに世間的な一切事は皆駄目だ、又、是非・善惡・可不可を論究するにも足らず、齷齪と心身を勞し苦しめてまで貪ひ求めるだけの價値性のないものである。

【餘論】　超然高擧の兼好の立場から、その最も共鳴してゐる無欲恬淡說の提唱者老子莊子の言をしば〳〵藉り來つて、一世を罵倒し、獨り自ら高く清しといつた氣概のよく表はれた一章である。

五月五日——第四一段——

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍りしに、車の前に雜人立ちへだたりて見えざりしかば、各々下りて、埒のきはによりたれど、ことに人多く立ちこみて、わけ入りぬべきやうもなし。かゝる折に、向ひなる樗の木に、法師の上りて、木の股についゐてもの見るあり。取りつきながらいたう眠りて、落ちぬべき時に、目を覺すこととたび〳〵なり。これを見る人あざけりあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて、やすき心ありて眠るらむよ。」と言ふに、わが心にふと思ひしままに、「われらが生死の到來、たゞ今にもやあらむ。それを忘れてもの見て日を暮す。愚なることは、なほまさりたるものを。」と言ひたれば、前なる人ども、「まことにさにこそ候ひけれ。最も愚にて候。」と言ひて、みな後を見かへりて、こゝへ入らせ給へ。」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひ寄らざらむなれども、折からの思ひかけぬ心ちして、胸に當りけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、ものに感ずることなきにあらず。

【章旨】　木の股から眠りこけて落ちさうになりながらも、賀茂の競馬見物を斷念しようとせぬ法師を罵詈嘲笑してゐる俗衆に向つて、生死の無常迅速なこの世の習、我等とても次の一刹那にどうした運命が見舞つて來るかも知れぬ身ぢやないかと自己内省の巨彈を一發くらはせた兼好の得意談の一つといつてよかちう。

【語釋】　○賀茂のくらべ馬　京都市外上賀茂神社境内で、昔五月五日に催された競馬會のこと。神慮を樂しませる爲の競技である。　○車の前に　兼好たちが乘つてゐる牛車の前に、下賤の群集が立ちはだかつて。昔、牛車に乘り歩くやうな上流社會の人々は、車を横づけにして其の車中から簾越しなどで見物してゐた。　○埒　馬場のめぐりの柵のこと。矢來ともいつてもよい。この語について附說したいことは「埒があく」「埒があかぬ」といふ言葉である。言海に「埒が明　。仕事のはかどる。(賀茂の競馬の見物人の待ち佗びて言へる語に起るといふ。)とある。○わけ入りぬべき　割り込みの出來る。　○樗(アフチ)の木　今いふ楝檀(センダン)の木のこと。丁度陰曆の五月の初旬に花をつける木だといふ。　○ついゐて　こゝでは「しやがんでゐて」又は「馬乘りになつてゐて」などと解したい。　○取りつきながら　樗の木の幹か枝かにしつかりと取りついてゐながら。　○いたう「痛く」の音便。ひどく、ぐだぐだに。　○落ちぬべき時　こゝの「ぬ」は完了の助動詞の「ぬ」の適切な用例で「落ちてしまはうとする時」の義。　○嘲りあざみて　嘲りさげすんで。　○世のしれもの　「世の」は「一世に」といふ用例と同じ意味で、「非〳〵な、箸にも棒にもかからぬ、途方もない。」などの最上級を(est 又は most をつけるところ)表はす詞。「阿呆の骨頂」などゝ意譯する。○生死の到來　「生」には意味なくたゞ「死」といふに同じ。順逆・本末・輕重などいふ語の用例と同じで、「逆」「末」「輕」には意味がなく、「順」「本」「重」に強く言はんが爲の添へ詞である。「死といふことが見舞つて來る」などゝ譯す。　○なほまさりたる　この「なほ」は「一層」とか「より以上に」とかいふ意。　○所を去りて　自分等の席を明けて。　○かほどのことわり　こんなわかりきつた道理。　○折からの　場合が場合なので。寺詣りや說敎聽聞の際なら誰も氣がつくのであらうが、物見遊山の時で生死の

一大事など考へてゐない丁度さうした所へ。　○胸に當りけるにや　胸は「こゝろ」の意。ハッと我と我が心に思ひ當るところがあつたればこそ、自分に敬意を拂ひ、好意を示してくれたのであらう。　○木石にあらねば　人間は木石のやうに非情(喜怒哀樂愛惡欲に心動かさぬこと)なものではないから。白氏文集に「人非ニ木石一、皆有レ情。」　○時にとりて　それ〴〵時と場合とに應じて深く感動(ショックを受ける)することがないものぢやない。

【口譯】　五月五日に、上賀茂の神前で催されるくらべ馬を見物したが、自分たちの(棧敷代用に横づけにした)牛車の前の方には、(山なす)群集が立ち塞がつてゐて、(さつぱり)見えなかつたので、(同車の)めい〳〵が車から下りて、埒のきはへ寄つたけれども、其の邊は特別に多人數がこみ合つてゐて、(どうにもかうにも)割り込めさうにもない。丁度其の時、(馬場の)向側の樗の木に、一人の法師がのぼつて、(見おろしの利く)木の股に馬乘りにしやがんで、競馬見物をしてゐる。幹か枝かに(しつかりと)しがみつきながら、ぐた〳〵に眠りこけて、(もうすんでに)轉落してしまはうといふ際どい所では、(ハッと)目を覺すことが度々である。(競馬の方はそつちのけで、)この體たらくを見てゐる群集が、(口を極めて)嘲りさげすんで、「阿呆の骨頂とはあの法師のことよ。あんなに危險千萬な樹の股だのに、まあどうしてあんなに安心して眠るんでせうよ。(そんなに眠いなら早速歸宅して疊の上にでも寢たらよかりさうなものを。)」と話し合つてゐるので、これを聞いた自分には、ハッと胸に涌いた一事があつたものだから、「(それもさうぢやが、一體、)さう言ふ御同樣にだつて、何時死といふものが見舞つて來るか分つたもんぢやない。すぐ次の瞬間にもやつて來るかも知れない。その(無常迅速、生死の)一大事を忘れて、(かうして)物見遊山をして(うか〳〵と)暮すなんて、(考へて見れば)あの木の股の法師以上のたわけ者ぢやのに。(まあ、さう他人の惡口なんか言はれる御同樣ぢやありませんや)」と口走つたら、前の方に立ち塞つてゐた人々が、(びつくりして振り向いて)「ほんに〳〵仰しやる通りでございますよ。(いやはや)私達の方がずつと阿呆のうは手でございましたなァ。」と(いかにも感に堪へぬやうな口調で)言つて、其の邊の人たちが皆一樣に後をふり返り、「さあ〳〵、(今のお方)こちらへお進みなさい。」といつて、(どや〳〵と)席をあけて、(見物しよい席へ)自分を呼び迎へてくれた。ナニこれぐらゐな分りきつた物の道理は誰だつて氣のつかない筈はなからうけれど、競馬見物に心奪はれて、生死の問題なんか夢にも思はぬ場合の事とて、あまりの意外さにぎよつとして、ハッとショック(衝撃)を與へられ、それであゝした取りなしをしてくれたのであらう。(一體)人間といふものは、あの木や石のやうに非情無心な物でないから、それ〴〵時と場合といふものによつて、非常に感動させられることがないわけぢやないんだ。(かういふことも得て有るべき筈だ。)

【餘論】　この一章は、私にはやはり二四三段の「父をやりこめた話」や、二三八段の「自讃の事七つ」の條など〻共に、兼好の自慢話をした一つと思ふ。それはさうと兼好は、かうした無常觀をあちこちに力說してゐる。第一五五段に「生住異滅のうつりかはる、まことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。」とか「生老病死のうつり來ることまたこれに過ぎたり。四季はなほ定れるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも來らず、かねてうしろにせまれり。人みな死ある事を知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の滿つるが如し。」とか言つてゐるが、しかもさうした考を持ち、競馬見物の愚業に警告を與へたりする身でありながら、しかもさう言ふ自分自身も、その渦の中へにとり込んでゐるのは、やはり生死の一大事を忘れ

て只管歡樂を追ひ求めてゐるのではないか。併し兼好にはかうした享樂主義辯護になる論說も同時に吐き得る自在さがある。即ち第九三段の牛賣の一條には「……されば人、死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂しまざらむや。……生ける間生を樂しまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂しまざるは、死を恐れざる故なり。死の近き事を忘るゝなり。」といつてゐるのは、「死の近きことを忘れないなら」といふ條件はあるが、大いに現在を享樂せよといふ生命頌歌乃至刹那主義的享樂主義を吐露してゐる。そこに兼好らしいところも窺はれる。

春のくれつ方——第四三段——

春のくれつ方、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の奥深く、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過し難きを、さし入りて見れば、南面の格子みなおろしてさびしげなるに、東に向きて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、ひちとげたれど、心にくくのどやかなる樣して、机の上にふみをくりひろげて見ゐたり。いかなる人なりけむ。尋ね聞かまほし。

【章旨】　季節は人なつかしさに惱ましい暮春、時は眞晝、青葉若葉が翳鬱と茂つて、綠の香にむせかへるやうな舊家の奥庭、そこに配するに清雅な若人を點じた調和のよさと忘れがたい若人の印象とが叙してある。

【語釋】　○春のくれつ方　暮春(晩春)の頃。「春の夕暮」ではない。「つ」は助詞で「の」に同じ。「天つ風」「沖つ白波」の「つ」に同じ。この頃は性の内部的衝動などで惱ましい季節。　○艶なる空に　なまめかしくほがらかな空合の日に。　○見過し難きを

そのまゝ素通りしかねたので。　○花　さくら　花。　○格子　今日の雨戸の代用とも見るべきもので、角材を縱横に組んで間の透くやうに作つたもので、柱と柱との間にはめる。上下二枚で一間を塞ぐ。下の一枚は上からはめおろし、上の一枚は上で蝶番でとめ、はね上げたり、おろしたりする。「皆おろす」とは閉めきつてあること。　○さびしげ　ひつそり閑としてゐる。　○かたち清げ　容貌の優雅な。　○うちとけたれど　きちんと畏つた風ではないが、(行儀も服裝も、どことなくゆつたりと寛いださましてゐること。」　○心にくゝ　奥ゆかしい。近づきになりたい。

【口譯】　物なやましい晩春の頃、(まことに)のどかなさうして空合のなまめかしいほがらかな日に、見るから氣品のあるらしい或邸宅、それはずつと奥深い家であつたが、いかにも老樹が森々としゐた。そこの庭に大方散りつくしてほんの少し許り名殘りをとゞめてゐる櫻の梢がなつかしくて、素通りをしかねたので、門内に入つて見ると、南に面した方の格子はすつかりおろしきつてあつて、(あたりは)ひつそり閑としづまりかへつてゐるが、東に面した方の妻戸だけが、丁度よい程合に開いてゐる。そこで其の前に垂れかけた御簾の破れ目のところから、中の方を見やると、容貌の優雅な二十ばかりの若者が、餘所行きのやうな角ばつた服裝や居ずまひはしてゐないけれど、如何にも奥床しい、ゆつたりとした物腰で、机の上に本をばら〳〵繰りひろげて書見に耽つてゐた。どんな氏素性の人であつたんだらう。あのまゝ永久に未知の人として置ききりに出來ないやうになつかしく思はれてならない。

【餘論】　他の段にもちよい〳〵出て來る兼好の垣間見癖の一つの收穫である。兼好の年配と、暮春と、奥床しい舊家の奥庭、たゞ一人靜まりかへつての讀書、それも御簾の破れ目からの覗き見であるから、一段と艶麗に見えたのである。「天の橋立股目がね」の美を美學者は「股間美學」などといつてゐるが、部屋のほの暗さを背景として浮き出

たやうな優男を、しかも天の橋立股めがね式に、小さい間隙から區ぎつて見たことが、眞價以上に美しく印象させたものと思はれる。このやうなことから兼好の性的生活の一部も想像される。

老來りて——第四九段——

老來りて、はじめて道を行ぜむと待つことなかれ。ふるき墳、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽にこの世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれることは知らるれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべき事をいそぎて、過ぎにし事のくやしきなり。その時悔ゆとも、かひあらむや。

人はただ無常の身に迫りぬる事を、心にひしとかけて、つかの間も忘るまじきなり。さらばなどか、この世の濁りも薄く、佛道をつとむる心もまめやかならざらむ。昔ありけるひじりは、人の來りて自他の要事をいふ時、答へていはく、「今、火急の事ありて、既に朝夕に迫れり。」とて、耳をふたぎて念佛して、遂に往生を遂げけりと、禪林の十因に侍り。心戒といひけるひじりは、あまりにこの世のかりそめなる事を思ひて、しづかについゐけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

【章旨】　年若しとて佛道修行を怠るものは、最期に及んで後悔する。常に人生の無常を忘れずに居れば、修行にも專念になり得るものである。さうした人の實例を二つ。

【點釋】　○老きて　寒山の詩に「莫レ待ニ老來一方學レ道、古墳多是少年人」とあるに因る。但し兼好は「老來りて方に道を學ばんと待つことなかれ」と訓んでゐる。　○道を行ぜんと　佛道修行をしようと。　○過ぎぬる方のあやまれるを　若い時から佛道修行に志し、さうして安心を得ておかなかつた身の懈が後悔される。　○知らるれ　「知らるなれ」とある一本もある。　○速にすべき事　佛門に歸依して修行すること。　○その時　臨終に至つて。　○ひしと　みつちりと。　○つかの間　一つかつかみ即ち指四本並べた長さ)ほどの間の意味で、ほんの一寸の間。　○この世　濁りも薄く　この世の名聞利慾を求めるといふやうなけがれた心も稀薄であり。　○まめやかならざらむ　眞實でないことがあらうか。眞實であり眞剣味があるに違ひない。　○昔ありける　曾てこの世に現存してゐた。　○自他の要事　お互にとつて大切な用事。　○火急の事　こゝでは無常迅速な一大事。即ち臨終の近い事。　○往生を遂げけり　立派に成佛をした。　○禪林の十因　京都東山の禪林寺(永觀堂)の永觀律師著述の「往生十因」一卷のこと。極樂淨土に往生すべき十種の因緣の修行を述べた佛書。同書中に「傳聞有レ聖、念佛爲レ業、事惜ニ寸分一。若人來謂ニ自他要事一、聖人陳曰、今有ニ火急事一、既終ニ於且暮一。塞レ耳念佛終得ニ往生一。」といふところがある。　○心戒　平宗盛の子平宗親の事。平家滅亡後、出家して高野山で修行し、後久那に渡航した。歸朝して東北地方に住した。ふと都の附近へやつて來た時、其の妹天王寺の理圓坊(もと八條といひ、建禮門院に仕へてゐた人)が諫めて、山崎に庵を結ばせて住ませたのに、暫くして又こゝを立去り、遂に往く所を知らないといふ。一言芳談(九八段に「尊き聖のいひ置きけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙」とあり。)卷下に「心戒上人、常に蹲居し給ふ。或人その故を問ひければ、三界六道中には、心安く尻さし据ゑて居るべき所なき故なり。」とあることを引用したのである。　○ついゐける　膝をついて坐り込んでゐた。　○常は　「つねに」といふに同じ。　○うづくまりて　しやがんで。

【口譯】　年とつて(身の衰を感じ出して)から、はじめて佛道修行を始めようなどゝたかをくゝつてゐて、うかうかと老境に入るのを待つやうなことをしてはならぬ。朽ち古びた墓を見よ、其の墓の主の大多數は、若死にした者達

である。まだ大丈夫と氣をゆるしてゐるうちに、思もかけぬ病氣にとりつかれて、俄に委靡におさらばせねばならなくなつて、始めてこれまでの不料簡に氣がつくのである。其の不料簡といふのは外の事でもない。疾くに發心修行しておかねばならぬことを後廻しにし、後廻しにしておいてもよいやうな俗事を急いで片づけたり力瘤を入れたりしてゐたこれまでの間違つた世渡りの仕方が悔まれるのである。だが、愈々息を引きとるといふ際に及んで、いかに後悔したからとて、何の甲斐があらうぞ。

人はたゞもう一途に無常迅速な死といふものが眼前に襲ひ迫つてゐるといふ一事をしつかりと思ひ辨へてゐて、しばしの間も忘れてゐてはならぬ。この一事さへ始終念頭からはなさないならば、きつと此の塵の世の俗悪な利慾に迷ふ心からも遠ざかり、佛道修行の信心も眞劍さを加へるに違ひない。昔のことだが或高僧なんかは、人がやつて來て、双方の間に關係のある用事を話しかけると、「そんな話はまあ待つてくれ、今、（わしにとつて最も肝心な）急ぎの用事があり、しかもそれが最早肩に火のつくやうにさし迫つてゐるんだから。」といつて、（臨終正念の邪魔になるとて）耳を塞いで、きゝ入れず、たゞひたすらに念佛三昧にふけりつゝ、つひに其のまゝ立派に成佛したといふ話が禪林の十因に書いてある。又心戒といふ高僧は、あまりにこの世が夢幻泡影の如くはかないといふことを思ひつめた擧句、（どつしりと）御腰を据ゑて坐つてゐたことさへもなく、いつも〳〵中腰にしやがんでばかり居た。

【餘論】　この世の無常迅速をかやうに痛感し、「しづかについゐることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。」といふやうな行爲に共鳴してゐるのは、つまり兼好自身の思想もこれなみであつたものと察せられる。これには人生の無常をはつきりと見つめさせられる時代相からの影響もあつたに違ひないが、一つには又兼好自身が病弱であつたといふことを語つてゐるのではなからうかと說く人もあるやうだが、一種の新見だと思はれる。第五九段に「命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に、逃れ難きものを。」も本段と同じ思想を說いたものゝ一つである。

賀茂の岩本——第六七段——

賀茂の岩本・橋本は、業平・實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の遣ざしを呼びとゞめて、尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺え侍る。吉水の和尚、「月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあり原。」とよみ給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、おのれらよりは、なかなか御存知などもこそ候はめ。」といと恭しく言ひたりしこそ、いみじく覺えしか。

今出川の院の近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌をよみて、かの二つの社の御前の水にて書きて手向けられたりけり。まことにやむごとなき譽ありて、人の口にある歌多し。作文・詩序などいみじく書く人なり。

【章旨】　業平・實方を祀つてある賀茂の橋本・岩本の社のことについて老宮司に尋ねた時の答へぶりにすつかり感服したこと。それから此の社を信仰した歌人今出川の院の近衛のこと。

【語釋】　○岩本・橋本　共に上賀茂神社の末社で、本社に向つて右側にあるのが岩本社、左側にあるのが橋本社。さうして、岩本社は在原業平を、橋本社は、藤原實方を祀つてあるといふ。　○いひまがへ　取り違へる。混名する。　○宮司　ミヤヅカサ　神官のこと。　○實方は　實方を祀つてある橋本社の方は。　○御手洗　こゝは社前を流れてゐる御手洗川と稱する小川のこと。御手洗は參拜者が手を洗ひ口をすゝぐ所。　○影の映りける　實方はもと右近衛中將であつたが、一條院の御時、藤原行成と殿上で口論し、行成に凌辱を加へた科で陸奥守に貶謫されて彼地で横死を遂げた。その亡靈が王城に歸り、宮中に現れて不思議を示したといふ。そのやうな傳說から、實方の亡靈の影が髣髴として此の御手洗川に映つたので、その地に亡靈をなだめる爲に實方を祀る社を建てたなどゝ社の緣起に書いてあるのを指すのであらう。　○橋本やなほ水に近ければ　御手洗川に亡靈の影が映つた所は、今の社の故地であり、川に映つて見えたとあるからには、其の故地は必ずや川添ひの處であらねばならぬ筈。處で、此の二社の中、橋本の社の方が、岩本の社より川に近いから、それが實方を祀つたのであらうといふ風に推理的判斷を下したのである。　○吉水和尙(ヨシミヅクワシヤウ)大僧正慈圓のこと　關白藤原忠通の子で、京都東山の吉水(今日の圓山(マルヤマ)のこと)に住つてゐたので此の名がある。天台の座主で、慈鎭といふのが其の諡號。和尙(クワシヤウ)天台宗では上のやうに讀むことになつてゐる。ヲシヤウとよむのは禪宗。　○月をめ　花をながめし　月や花を賞翫した昔のみやび男はこゝに在る。「あり」は「こゝに在り」と「在原業平」の「在」とをかけて用ひてある。○恭しく　寺や宮の緣起を食ひものにしてゐる世間の宮司や案內人とは事變つて謙遜的に素直な態度で。○今出川の院　龜山天皇の中宮嬉子といふ方が、出家して今出川の院といふ所にいらした、それを申す。○近衛　今出川の院にお仕へしてゐる左近衛の局といふ女官のことで、藤原伊平のむすめであつた。○集ども　集は歌集のこと。「ども」は複數を表はす接尾語。　○歎多人り　十八首入選してゐる。　○若かりける時　九歲から詠歌したと傳へられてゐる。　○御前の水にて　その社前の水を硯にうけて墨すつて。　○手向けられけり　岩本・橋本の二社に奉獻された。この二神はもと和歌の神だといふ。　○人の口にある　人口に膾炙してゐる歌。　○作文(サクモン)漢詩や漢文を作ること。　○詩序　漢詩の前につける序詞序文。和歌の詞書(コトバガキ)に當るもの。　○いみじく　すばらしく上手に。

【口譯】　上賀茂神社の社前にある岩本・橋本の兩社は、前の方が業平、後の方が實方を祀つたものである。(ところで)世人がよくこの兩社の祭神を混同するから、往年(そこに)參詣した折に、白髮の老神官が通りかゝつたのをこれ幸ひと呼びとめて、聞いて見ましたら、件の神官がいふには、「實方(の靈を祀つた方)のは、御手洗川に其の亡靈が髣髴として現じた所と申し傳へてあるから、兩社のうち、橋本の社の方が一層、御手洗川に近接してゐることから、(考へて)、其の方が實方だと思ふ。吉水和尙が

月をめで花をながめしいにしへの
やさしき人はこゝにあり原

と詠じられたのは、岩本の社の方のことだとは承つて居りますが(そりやさうと)私等風情よりは、(さうお尋ねになる)あなたの方がよつぽどよく御存じでいらつしやいませう。」と(如何にも)嗜みのあるやうな態度で答へてくれたのは、何といふ奧床しいことゝ思つたつけ。

【餘論】　老神官の答ぶりが、兼好の敷島の道や故實の穿鑿癖などいふ趣味傾向に丁度當て込んだやうに來たので、すつかり嬉しくなつたといふ實感である。兼好が文として書き殘した程のものには、それ〴〵の感激が力强い底流をなしてゐるに違ひないが、然し其の感激ぶりや批評や彼自身の立場は、或は之を文中に明白に表はし、或は表はさない場合がある。「鼎かつぎ」の法師に對する場合などには、あんなことがよいとも、惡いとも、嗤笑すべきである

さも、同情すべきであるとも、文中には露出せずに、たゞ事件の客觀的描寫で終つて、「後は讀者の判斷に委す」といつた體であるが、「栗柄野の柑子」(第十一段)の段の住僧の心事や、「綾小路宮のおはします小坂殿の棟に繩を引かれ」た行爲(第十段)などでは、

「少し事さめて、此の木無からきしかばと覺えしか。」

「……さてはいみじくこそと覺えしか。」

などと、彼自らの批評が加へられてある。本章の前節の如きも、

「いと恭しく言ひたりしこそいみじく覺えしか。」

と感歎の心事を吐露してゐる方の表現である點を味つておくがよからうと思ふ。

書寫の上人——第六九段——

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅のかりやに立ち入られけるに、豆の殼を焚きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「うとからぬおのれらしも、うらめしくわれをば煮て、からきめを見するものかな。」と言ひける。焚かるる豆殼のはらはらと鳴る音は、「わが心よりすることかは。燒かるるはいかばかり堪へ難けれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ。」とぞ聞えける。

【章旨】　書寫の性空上人が法華讀誦の功德によつて、萬物の理に通達し、人間以外の物の音や聲までを聽きわけ得たといふ奇蹟的珍談を物語る。

【語釋】　○書寫の上人　播磨の國書寫山圓敎寺の開山性空(シヤウクウ)上人のこと。非常に德の高い僧で、山禽野獸までも其の德を慕つて馴れ親しんだといふ。上人は德行ある高僧のこと。釋氏要覽に「內有二習德一、外有二勝行一、在二人之上一、名二上人一。」　○法華　法華經のこと。さて無量義經一卷、妙法蓮華經八卷、觀普賢經一卷、これを合せて法華經十卷といひ、佛陀が、毗舍離國の大林精舍で、阿難・迦葉等が、佛の滅後に五欲を離れないで修行する要法を求めたことと、それによつて普賢菩薩を觀ること、又多寶佛、釋迦牟尼佛を觀ること等を說き、且つ六根清淨の法を明かにしたもの。　○功つもりて　功德がつもり重なつて。　○六根淨にかなへる人　六根とは眼・耳・鼻・舌・身・意の六つをいふ。さうして六根淨は正しくは六根淸淨で、六根を煩惱の汚れのない美しさにすること。法華經法師功德品に淸淨にすることが書いてある。　○豆の殼を……　魏の文帝が皇弟の曹植に、七步する間に詩を作つて見よ、若し作り得ないならば殺してしまふと嚴命したので、曹植は、直に席に應じて、一詩を作つて示した。それは「煮レ豆持作レ羹。漉レ汁以爲レ汁。其在二釜下一燃。豆在二釜中一

泣。本是同根生。相煎何太急。」といふので「七歩の詩」と稱してゐる。○つぶつぶ「ぶつぶつ」に同じ。煮えてゐる際の擬聲語である。○聞き給ひければ　聞き取り聞きわけて見たら。○うとからぬ　あかの他人ではない。（骨肉の）○おのれらしも　お前たちが。○うらめしく　うらめしや、邪慳にも。○はらはら　ぱちぱち。○我が心より　自分の思はく一つから。○いかばかり……　どんなにかつらいのだが。○力なき　どうにもしやうのない。○聞えける　さういふ風に聞きとれた。

【口譯】　播州書寫山の開祖性空上人といふ方は、（數多たび）法華經を讀誦して修行した功德が積りつもつて、六根清淨といふ聖域にまで進んだ人であつた。（或時）旅をして宿屋につか〳〵入つて行かれたところ、豆がらを焚いて豆を煮てゐる音が、ぶつ〳〵と鳴るのを（ふと）聽きわけて見ると、「おい、これ、あかの他人でもないお前たちがまあ、一體どうしたわけで、）かうむごたらしくも私を煮てひどい目にあはせるのですか。」といつてゐる。すると焚かれてゐる豆殼のぱち〳〵と鳴る音が「なに、それは私自身の考からすることぢやありやしないんだ。（お前の事までもない我が身自身）燒かれるのは、どんなにか我慢しきれないほどつらいのであるけれども、どうにもしやうがないのである。（だから）さう〳〵怨みなさるなよ。」と言つてゐるのが聞えた。

【餘論】　この話はもとより「七歩詩」などから思ひついたものゝやうであるが、この哀話はよほど我が國人の興味を唆つたものと見えて、俳句などにも此の趣向を採つて物したものがある。蕪村の句に「題七歩詩」と前置きした

雪折や雪を湯に焚く釜の下

といふ作があり、又几董の句にも、同じく「題七歩詩」といひ、「豆在釜中泣」の一句を翻案した

柚を燒くや味噌は釜中にありて泣く

といふ作があり、現代人の句にも

夕涼み七歩の才をこゝろみぬ

などいふのがある。公冶長が鳥語を解したといふ逸話や、アラビアンナイト物語の中の鳥話を解した人の話などゝ共に興味中心の小話といつてよい。さればこそ次に講述する第七十三段で「世に語り傳ふること、まことはあいなきにや、多くはそらごとなり。あるにも過ぎて、人はものを言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定りぬ。……下さまの人の物語は、耳驚くことのみあり、よき人はあやしきことを語らず。」と言つてゐる兼好でありながら、かうした奇蹟的物語を敢へてしてゐるのである。尤も引用した第七十三段の末尾の方にはかくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。」といふ豫防線は張つてはゐるが。

世に語り傳ふること——第七三段——

世に語り傳ふることゝいまことはあいなきにや、多くはそらごとなり。あるにも過ぎて、人はものを言ひなすに、まして年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきまゝに語りなして、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定りぬ。道々のものの上手のいみじき事など、かたくなる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人は、更に信を起さず。音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。かつあらはるるをも顧みず、口にまかせて言ひちらすは、やがてうきたることと聞ゆ。又われもまことしからずは思ひながら、人の言

ひしまゝに、鼻のほどをごめきていふは、その人のそらごとにはあらず。げにげにしく所々うちおぼめき、よく知らぬよししして、さりながらつまづま合せて語るそらごとは恐しきことなり。わがため面目あるやうに言はれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらごとは、ひとり「さもなかりしものを」と言はむも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにもそらごと多き世なり。たゞ常にある、めづらしからぬことのまゝに心得たらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚くことのみあり。よき人はあやしきことを語らず。

かくは言へど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗のそらごとを、ねんごろに信じたるもをこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、ひとへに信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

【章旨】　世俗に傳へられることに虚言の多いこと、漠たる噂や虚言がいつしか確實性を帶び來つて、遂に事實と確認されるやうになる經過、虚言の種類や發生心理について論じ、虚言に對して如何なる態度を取るべきかを述べてゐる。

【語釋】　○まことはあいなきにや　生地のまゝで尾鰭をつけてない眞實そのまゝの事は、聞くも語るも興味が無いせゐか。○あるにも過ぎて　事實以上に。○言ひなす　言ひこしらへる。○年月過ざ、境も隔りぬれば　時間的、空間的にかけはなれてしまふと。○筆にも　記錄にさへのこす。○やがて　其のまゝすぐ。○定りぬ　定つてしまふ。事實ときまつてしまふ。○道々　それ〴〵の藝能。○ものの上手　其の道の巧者、名手。○いみじき事　奇蹟的な妙技や逸話など。○ふたくなる人の　頑固一徹で、自分の考へにばかり信をおいて融通の利かぬ人で。○そゞろに　無暗やたらに。○神の如く　非凡超人的な名手のやうに。○音に聞く　風評できいてゐる手腕や技倆。○がつあらはるる　嘘をまことしやかに述べてゐる一方からすぐ其の虚言であることがばれていく。○やがてうきたる事と　すぐ其の場で根も葉もない虚言と。○われも語る人自身も。○鼻のほどをごめきて　得々然として小鼻のあたりをうごめかして。○げにげにしく　いかにも尤もらしく。○所々うちおぼめき　そちこちをわざ〳〵少しづゝぼかして。○知らぬよし　知らぬ風をよそほひ。○つまづま合せて　辻褄を合せて。急所々々だけはぴつたり筋がとほるやうにして。○わが爲面目あるやうに　聽かされる人に花を持たせるやうに(迷惑でなく寧ろ名譽になるやうな)。○人はいたくあらがはず　その聽かされる本人は、一應は抗辯はしても、徹底的にさうぢやないなどゝ抗辯否定しようとはしない。○人の興ずる　虚言とは感づかず、聞く人々が面白がつて聞いてゐる。○さもなかりしものを　さうでなかつたのに。○いとど定りぬ　いよ〳〵事實だといふことに確定してしまふ。○珍しからぬことのまゝに心得たらん　世間にざらにある話のやうに心得てゐさへすれば。○下ざまの人　下賤な人。○耳驚くこと耳驚かす事といふに同じく、びつくりするやうな奇怪千萬なこと。○よき人　上品な、たしなみのある人。○怪しきことを語らず　奇怪きはまるやうなことを言說しない。論語の述而篇に「子、不レ語二怪力亂神一。」とあるのと同意である。○奇特　靈妙不可思議な瑞應。○權者　或は權化(ゴンゲ)といふも同じく、もと佛菩薩が衆生を濟度する爲に、權(カリ)に人身と化して出現したものゝこと。こゝでは世にも稀な高德の僧や、修行者などのこと。○さのみ信ぜざるべきにもあらず　さう一概に信じないでばかり居るべきではない。(中には信じてよいものもあつて然るべきだ。)　○これは　佛や神の靈驗や權者の傳記などは。　○まことしくあひしらひて　いかにも信じてゐるやうにあしらつて。　○ひとへに信せず　てんで信じない。

【口譯】　世間で取沙汰されて居る事は、正眞正銘の眞實そのまゝでは(どうも)面白味がうすいせゐか、大がいは作

りごとである。(一體)人は(現に目前に其の眞相を熟知してゐる證人がゐるやうな場合でも)事實以上に物事を誇張して言ふものであるのに、況んや、すでにもう年月が經つて居たり、場所も變つてしまふと、何とでも言ひ放題に語りちらしてゐるばかりか、書物にも同トやうに書きのせてしまふから、すぐ其のまゝ事實として決定してしまふ。

その道その道の名人巧者と言ひはやされてゐる人々の(技神に入る)といつたやうな非凡などを、頑固無知なさうして上記のやうな方面のたしなみや心得のない人は、無暗やたらに、上記諸名人たちを神樣かなんぞのやうに(無性に)尊み有がたがつて持てはやしてゐるけれども、其の方面の心得ある者は、(さうした名人達の技倆を見拔くだけの眼識をもつてゐるから)ちつとも信賴崇敬の念も起さない。世間の事一切萬事が、噂で聞くのと實際に觸れて見る時とは、まるで大違ひなものである。おしやべりする言葉の下から其の虛言であることがばれて行くのにもお構ひなしで、唇のぶつかり放題出任せを叩き散らすといふやうな部類では、すぐにそれが虛言であるなと合點がいく。又自分自身もすでに(こいつは)虛言らしいぞと思ひながら、他人が話した通りに、小鼻をうごめかして如何にも得々然と吹聽するやうなのは、これは虛言の仲買(ブローカー)で、其の人自身がでつちあげた虛言ではない。(ところが、誰が聞いても本當と思はずにゐられないやうに)如何にも尤もらしく聞えるやうに、(わざ〳〵)話のあちらこちらをぼかしておき、よくは知らないといつたやうな風をして、しかも其の肝心な筋道の辻褄を合せて物語るこいふ(仕組んである)虛言になると、まことに恐るべきものである。(一體)聽かされる當人に花を持たせるやうに仕向けてある虛言が言ひ出された場合は、誰も(一應抗辯はしても、惡い氣持がしないから)强ひて抗辯したり否定したりはしないものだ。又一座の者全部が興る興味を感じてゐるやうな虛言は、自分一人だけが、(むきになつて)「そんな話ぢやなかつたのに」と言ひ出して主張して見たところで始まらないので、異議も挿まずに默つて聞き流してゐるうちに、いつしか其の話の證人にまでされてしまふといふやうな破目になつて、其の虛言がすつかり眞實なこゝきまつてしまふのである。とにかく(上記のやうな發生原因から)うそだらけな世の中である。だからさうした珍しい話や耳新しい話にぶつかつたら、すぐさま安請合せずに、なあに、世間にざらにあるありふれた話と一列に心得てゐさへすれば、まづ萬事萬端あてはづれがないのである。(概して)下賤な人々のする話は、耳がとんぼがへりするやうな奇話珍談づくめなものだ。上品な嗜みある人たちは、さうした荒唐無稽な大仰な話はしないものだ。さうは言ふものゝ、佛や神の奇蹟的な物語や緣起や、非凡な高僧とか修驗者などの傳記などに散見する不思議な行蹟などまでも、一切がつさい信をおかないといふのもよくない。上記のやうな事柄には、俗間で勝手にでつち上げた虛言や出鱈目もあるから、それを一から十まで眞にうけて信じきるのも馬鹿らしいし、さうかといつて、「まさかそんな(阿呆らしい)ことはあるまい」と反駁して見たところで始まらない話だから、まづ大體のところは、「さうもあらう」といふ位に程よくあしらつておいて、一途に信じきつたり、又は疑ひ嘲つたりしない方がよい。

【餘論】　「うそでまろめて、手練で揑ねて」といふやうに、今も昔も人の世はうそで固つてゐたと思はれる。「傾城にまことがあれば、三十日に月が出る」とも言つてゐる。「嘘も方便の一つ」。人間が作つた世の中を、人間が渡つていくための方便であつて見れば、嘘でも盜みでも、御都合次第で、最もよい方便となるであらう。

それはとにかく、性質のよい虛言や、性質のわるい虛言やの三樣を擧げたところが面白い。第三の最も性質の惡い虛言に至つては、氣のよい連中は皆してやられる。大聖孔子樣の如き人ならば「宰我問曰、仁者雖告之曰」

井有レ仁焉、其從レ之也。子曰何爲レ、其然レ也。君子可レ逝レ也、不レ可レ陷レ也。可レ欺レ也、不レ可レ罔レ也。（雍也篇）

といつて、「道理のあるところを以て欺くことは出來るけれども、道理のなき所を以て誑ひくらますことは出來ないものだ」と說いてゐられるが、凡俗は皆この手で參らされてしまふ。

「ところどころうちおぼめき、よく知らぬよししして、さりながらつまづきを合せて語るそらごとは恐しきことなり。」此の一文は實に千古の哲學である。故小泉又一氏といふ督學官が、曾て某校の學校騷動の眞相調査に行つた歸途、某所で其の話をされたことがあつた。其の時の話の斷片が忘れられない。曰く『學校騷動の背後には、必ず教職員のうちに二派が對立してゐる。さうして生徒を使嗾して教師の排斥を行はせるのであるが、此の場合、教師が正面から他の教師の非違や不都合を彈劾したのでは、效果がなくて、大した問題にならぬ。所が、生徒等が信賴してゐる教師に對する生徒達の評言『あの先生は誠に立派なよい先生と思ひますが』など丶あるのを、『いやあんな卑劣な、低能兒はない、君等はすつかりだまされてゐる』など丶攻擊すると、生徒はむしろ、非難する教師に反感を懷いて、『へん、さういふ御自身こそ碌な奴ぢやない癖に』など丶來るが、そこを巧に受け取つて『さうだね、成程あの教師は誠によい人だが、しかし人は見かけによらないものでね……實は僕もよくは知らないが、大分その私的生活に……いや、こんなことを言ふんぢやなかつた。今の言葉は君等の信賴する模範教師の名譽の爲に取消す』など丶言つておく。さうすると『何ですか、その私的生活に何か伏在してゐるといふのは、是非聞かせて下さいと來る。「いや、何でもないよ。もう取消したんだから忘れてくれ給へ。』など丶言つてぢらしておく。さうすると、生徒達が、『おい〳〵、變だぞ。して見ると、僕等が信賴してゐるあの先生にも何か事情があるらしいぞ。手分けして探偵して見よう。』といふやうなことになり、神ならぬ人間の、誰も缺點や失策の一つや二つはあらう。發見するに努力を要すれば要するほど、そのほんの針ほどな事柄でも重大事として價値つけねば承知出來ないのが人情の常、病死した猫の子を隣の屋敷へ捨てた位の些末な事件でも、一大惡事のやうに言ひ觸らしてケチにし、遂に排斥運動の材料や口實にするといふ處まで立至るのである。」と。まことに「……うちおぼめき、よく知らぬよししして」言ひ放つ言の葉ぐさの恐しさよ。

人ごとに——第八〇段——

人ごとに、わが身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道を立てゝ夷は弓引くすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなるおのれが道より、なほ人は思ひ侮られぬべし。法師のみにあらず、上達部・殿上人・上ざままで、おしなべて武を好む人多かり。百たび戰ひて百たび勝つとも、未だ武勇の名を定め難し。その故は、運に乘じてあだをくだく時、勇者にあらずといふ人なし。つはものは、武に誇るべからず。人倫に遠く、禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

【章旨】　要も無き非專門に手出しする移り氣な人性の眞を語り、其の一例として文官が武事に携はる世相を語り、眞勇の定義を力說してゐる。

【語釋】　○うとき事　自分の專門に緣遠いこと。　○つはものの道を立て　武技に熟練しようと肩を入れてゐる。　○夷　もと

都から僻遠な地(主として東國)に住む民をいふ。轉じて田舍武士、就中東國武士のことをいふ。こゝも後の意。　○氣色し　樣子や擧動をなし。　○連歌(レンガと濁つて訓む)　こゝにいふ連歌は、鎌倉初期後鳥羽院の頃から支那の聯句の風體が輸入せられて、五十韻百韻と多くの句を聯ねるやうになつた狹義の連歌のこと。その最初の五七五の句を發句・次の七七を脇句、次の五七五の句を第三句、以下第四句第五句と呼び、五十韻ならば五十句目の七七の句を、百韻ならば第百句目の七七の句を擧句(アゲク)又は結句といふ。當時連歌が盛であり、これを賭事に供したことは、本書第八十九段の「猫又、よや〳〵」の段に出て來る阿彌陀佛の懐にあつた「扇・小箱」の一件でもよくわかる。　○おろかなるおのれが道　拙劣と思はれる自分の專門の藝能。　○思ひ侮られぬべし　見さげられ輕蔑されるものだ。　○上達部(カンダチメ又はカンダチベ)官でいへば參議以上。位からいへば三位の者。月卿雲客と熟する時の月卿とあるがそれ。　○殿上人　雲客ともいひ、淸涼殿の殿上の間に伺候することを許された人。四位五位の人、及び藏人ならば六位の人もこのお許しが出てゐた。　○上ざま　上流の人。　○勇者にあらずといふ人なし　誰もかも勇者の部類に屬することになる。　○つはものの盡き　つはものは兵仗で即ち武器のこと。それが損じたり無くなつたりし。　○矢きはまりて　矢だねが皆無になつても。　○死を易くして　死を何とも思はぬ。死を見ること歸するが如く惡びれずに死ぬ。　○生けらむほど　荷も生きて居る間は。死を易くしてはじめて武名を擧げらるのだから、生きてゐる間はまだ〳〵眞の武名は擧げ得ないのである。　○その家　弓矢とりの家、即ち武家。

【口譯】　どの人も此の人も、(みんな自分の專門の方はおろそかにして、)非專門の事ばかり好んで修めようとしてゐる。(此の頃の)法師たちは、(佛法の事などてんで省みず、ひたすらに)武藝戰陣のことに肩を入れてゐるし、東國の武人たちは又本職の弓ひく矢を番へることはそつちのけで、どれもこれも佛法三昧に入つたり、連歌に耽つたり、管絃歌舞に身を入れてゐるといふ體たらくである。けれども、それら非專門の諸藝の方は、(本人では大分いい氣でゐるか知らぬが、とてもお話にならぬ程の拙劣さで)、自分ながらまだ〳〵拙劣未熟だと思つてゐる其の專門の藝能の方よりはよつぽどまづくて、やはり何といつても他人からの嘲笑を免れることは出來ないのである。いや、かうした事例は法師社會のみに限つたことでなく、上達部や殿上人など上流の文官仲間にも、一般にこの武技武藝に身を入れるといふ者が多い。だが此の武藝武技といふものは、よしや百戰百勝といふ好結果を得たからといつても、まだ〳〵武勇の名譽を獨り占めさせるわけには行かぬ。なぜかといへば、萬事好都合といふ好機に乘じて敵を粉微塵に粉碎する場合には、(誰が立ち向つてもかうなるので、隨つて)誰も彼も(古今無双の)勇者と稱せられるからである。ところが眞の武勇といふものは、事、志と違ひ、戰利あらず、ありたけの武器は損じ役に立たなくなり、剩へ矢だねも兵糧も盡き果てたといふ窮地に陷つても、到頭最後の時まで敵に降參せず、さて泰然自若として悠々死に就いて、そこで始めて眞の武勇者としての稱讃を博すべき道理のものであるからである。左樣な次第で、生きてゐる間は、何といつてもまだ武勇者といふ美名を與ふべきものでないし、又誇るべきものでもない。一體血腥い殺傷沙汰を事とする武技武藝などといふものは、慈悲を主とすべき人道からかけ離れた、謂はゞ禽獸の所行に近い方の事だから、本來弓矢取りの家の出身でないならば、(決して)好きこのんで携つても、何の役にも立たぬことなのである。

【餘論】　誇に「うちの飯には心がある。」といふ。又「隣の花が赤い。」といふ。とかく他人の地位や職業に對して羨望模倣の心を起すのは人情の弱點である。さうしてそれら非專門の餘技餘藝が比較的自惚心を滿足させるといふのは、主觀的にはよしや拙劣でも、「非專門だから」といふ逃げ路があつて、他人の毀譽褒貶をば可なり餘裕ある態度——

卽ち致命傷的でない心持で聞き得ることと、客觀的には、いくら褒言葉の安賣をしてやつても、決して自己の專門的地歩に災せぬと見てゐる其の道の專門家達から、「素人にしては巧者だ。」「玄人跣足だ。」などゝいふ安つぽい——不眞面目な讃辭を浴びせられることなどから原因することと思はれる。それはとにかく孔子も、「大宰問於子貢曰、夫子聖者與。何多能也。子貢曰、固天縱之將聖。又多能也。子聞之曰、大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多哉。不多也。」(論語、子罕篇)といつて、多能は決して君子の重んじ貴ぶ所でない由を表明してゐられる。兼好は時勢の風潮を警めてゐることは勿論であるが、孔子のこの言と一脈相通ずるところがあるやうだから附言したのである。

うすものの表紙は——第八二段——

「うすものの表紙は、とく損ずるがわびしき。」と人の言ひしに、頓阿が、「うすものは上下はづれ、螺鈿の軸は貝落ちて後こそいみじけれ。」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草子などの、同じやうにあらぬを見にくしと言へど、弘融僧都が、「ものを必ず一具に整へむとするは拙き者のすることなり。不具なるこそよけれ。」と言ひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな、事のととのほりたるは、あしきことなり、し殘したるを、さてうち置きたるはおもしろく、生きのぶるわざなり。內裏造らるるにも、必ず造りはてぬ所を殘すことなりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる內外の文にも、章段の缺けたることのみぞ侍る。

【章旨】　趣味識の發達した兼好一流の、損傷せるもの、不整齊な物、不安全な物のうちから發見される審美論である。

【語釋】　○うすものの表紙　薄く織つた絹や紗の類で裝幀した表紙。　○わびしき　厭になつてしまふ。　○頓阿　正安三年に生れ、元中元年に八十四歳で寂す。近古室町時代和歌四天王(兼好・慶運・淨辨・頓阿)の一人で、俗名を二階堂貞宗といひ、二條殿の末なる師實といふ人の子孫であるといふ。二十四歳の時出家して叡山に入り、後高野山に登つても修行したが、都に歸つてから歌名が頓に高く、詩友との交際と用件とで明かし暮して、八十餘年の長い生涯を風雅に終へた。歌論の書に井蛙抄、水蛙眼目があり、家集に草庵集がある。本文の「螺鈿の軸は云々」の言葉で、彼が古雅を愛し華麗を厭うた趣味性があらはれてゐる。　○上下はづれ　上や下のへりなどが擦りきれ損じ。　○螺鈿の軸　貝の美しい眞珠層を漆器等に摺り込んで磨き出したものを螺鈿といふ。卷物の中心となる軸にさうした裝飾が施してあるもの。　○貝落ちて　摺り込んだ貝が剝落して。　○いみじけれ　風致がある。　○一部とある草子　數册で一部となつてゐる物語や隨筆などの綴ぢ本。　○同じやうにあらぬを　其の表紙の質や色合や綴ぢ絲などの體裁が揃つてゐないのを。　○弘融僧都　兼好と同時代の人で、權少僧都、伊賀國佛性寺運性院に住してゐた歌僧。　○一具に　一律に。一樣に。　○不具　不揃ひ、一樣でないこと。　○さてうち置きたるは　そのまゝで手をかけずにおいたのは。　○生き延ぶるわざ　それによつて心が慰んで壽命も延びるやうな氣になる。　○內外の文　佛教隆盛時代に、佛典を中心として、佛典を內典(ナイテン)といひ、儒教や諸子百家の書を外典(ゲテン)といふ。　○章段　或一章や、或一段又は數段などが缺け失はれて後世に傳はつてないことをいふ。

【口譯】　「うすものを以て裝幀した書物の表紙もいいが、どうもぢきに磨りきれたりしてしまふので厭になつてしまふ。」と或人が言つたら、頓阿法師が之を聞きつけて、「(私はさうは思はぬ)あのうすものの表紙は(始終手ずれのする)上の方や下の方などが磨りきれ損じたりしてからが、それから又卷物の螺鈿の軸では、其の螺鈿の貝がそちこ

ち脱落してからが、古めかしく、さびがついて風致が添はるのだ。」と申したのは、頗る卓拔な趣味識で、私にも大いに共鳴が出來る說である。又幾册かで一部といふことに纒つてゐる草子などが、全部同一體裁でないのを見つともないなど〻言ふ人もあるが、弘隔僧都が「何でもかでも物を皆一樣に揃へてしまはうとするのは、美的趣味識の發達してゐない者のやることだ。その不揃のところに無限の趣味があるのである。」と言つたのも、徹頭徹尾同感である。すべて何事に拘らず、あんまりキチンと整ひ過ぎてゐるのは、面白くなく。ちよいとし足りないところを其のまゝに存してあるのが、趣味多くも感じられ、それを鑑賞することによつて、命も生きのびるやうな氣がするものだ。畏れ多くも、あの内裏を御造營させられる場合にも、きつとどこか一所ぐらゐ未完成な箇所を殘しておくきまりであると、或物識りが申して居た。（さういへば）昔の賢人哲人たちの作つた佛典や漢籍などにも、或章や一段乃至數段の缺けてゐるのがざらにある。

【餘論】　「餘りに完備すると魔がさす。」などいふ俗語もある。魔がさすかささぬかはともかくとして、あまりに完全であり無缺であることは、一歩動けば、其の完全無缺狀態から一轉して、缺點狀態、不完全現象を現出するといふことを豫約するものである。すでに完全狀態、無缺狀態を見馴れた目と心で、次に同一物の不完全・缺陷ある事物を見續けさせられることの不滿と苦痛とは、如何ばかり大きいかは、吾々の日常經驗に徵しても首肯出來ると思ふ。乃ち最初から「し殘したるを、さてうち置きたる」あたりが、かうした悲觀や不滿を未然に防遏する――換言すればその物に對する嫌厭の情の豫防手段となり、魔の調伏擊退法として最も策の得たこと〻なるのである。知恩院の屋根裏の椽の間に存置された左甚五郎の忘れ傘、日光の陽明門の逆さ柱も名工達の胸臆には自らにして這箇の機微が宿つてゐたものに違ひない。こゝまで趣味識が洗練され、人生が分つて來たものには、從つて、今度は、損じ磨りきれたうすもの〻表紙や、貝の脱落した螺鈿の軸にも、はた又畸形的な盆栽花卉、歪みなりの茶碗や德利に却て無限の趣味愛着を感じる心持も自づと領會されてくること〻思ふ。

人の心すなほならねば――第八五段――

人の心すなほならねば、僞なきにしもあらず。されどもおのづから正直の人などかからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たまたま賢なる人を見て、これをにくむ。「大きなる利を得むが爲に、少しき利を受けず、僞りかざりて、名を立てむとす。」とそしる。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性、移るべからず。僞りて小利をも辭すべからず。かりにも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。僞りても賢を學ばむを賢といふべし。

【章旨】　論語の里仁篇にある孔子語「苟志於仁矣、無惡也」とあるのや、「見賢思齊焉」などにヒントを得たかと思はれる章句で、要するに形だけでもよい、いな僞つてでもよいから賢者の言動を學べと力說してゐる。

【語釋】　○すなほならねば　正直でないから。　○人の賢を羨む　他人の賢ることを羨み嫉ましくおもふ。　○至りて愚なる人　濟度すべからざる頑愚不正直な人。　○これをにくむ　一般世人が人の賢を見て、これを羨み輕い嫉ましさを感ずるなどと

は違つて、淺望鏃視の果これを咒ひ憎しむの情炎を燃すこと。　○僞りかざりて　實は咽喉から手が出るほど欲しいのであるが、表面だけは微塵も欲氣のないやうに見せかけて。　○此の人は　賢者をにくむ至愚の人。　○下愚の性は……　下愚下根の性分で、どんなに面倒を見てやつても、根本的にきたへ直す(即ち賢者にする)可能性がない。論語陽貨篇に「上智與二下愚一不レ移」とあるによる。上智は最上級の睿智の優れた者。論語の章旨は陶冶可能性のあるのは、この兩者の中間級のものであるとの意。　○大路　往來。　○驥を學ぶは　驥とは一日に千里を馳驅するといふ駿馬のこと。　楊子法言の學行篇「「晞」驥之馬、亦驥之乘(そへ馬)也。晞レ顏(孔子の高弟顏淵)之人亦顏之徒也。」とあるによる。即ち驥の眞似をする馬は驥の仲間である。　○舜を學ぶは　上の「驥を學ぶは」につゞく言葉としては、「顏を學ぶ」とあるべきであらうが、或はわざと重大性を帶ばせる爲に、孟子盡心章句上にある。「鷄鳴而起、孳々爲レ善者舜之徒也。」とあるのに結びつけたためかも知れない。舜は、堯・舜・禹・湯文・武・周公などと並稱されてゐる支那上代の聖天子。

【口譯】　どうも人の心といふものは正直一途とばかり言はれないものだから、人間にうそ僞が絶無だとはいひきれない。(いや〳〵實のところ僞澤山な世の中だ。)けれども、其の中には、天性眞正直な生一本な人が一人もないとどうして斷言出來よう。そりや必ず有ることはある。よしや自分自身は正直でないにせよ、他人の賢くて正直なことを見て、自分もあゝいふ風にありたいと羨み嫉むのが人情の常である。(此の羨むといふ心を起す人や、又かういふ心を起させる對象となる人が存在するといふことは、とりも直さず、他人の正直や賢良を、正直賢良と認める人、及びさう認められる正直な賢者の存在を明白に證據だててゐるので、この通り眞正直、生一本な人も確かに存在してゐる。)ところで(箸にも棒にもかからぬといふやうな)天性頑愚不正直な人になると、たま〳〵正直賢良な人を見ると、(「あゝ羨しい、自分もあゝありたい」と素直には考へずに)その賢良さ正直さが癪にさはり、呪はしく憎らしく思つて、「なに、あれは、あとでうんと利息のついた大利として手に入れようといふ下心から、實は欲しくて堪らないのを我慢して、目前にある小利に手を觸れず、いかにも正直者らしく無欲恬淡らしく見せかけて世の好評を博さうとしてゐる僞善者だ。」と口ぎたなくそしつてゐる。だが、さう誹謗する人の心理を解剖して見ると、彼自身が小利でも惡錢でも、苟も利と來たら目もないといふ自分自身の心持が、清明廉直な心持と全然かけ離れてゐて想像もつかないので、自分の心を當てがつてさういふ惡口をいふのであつて、(語るにおちるとはこのことで、)さうした惡口を言ふことで、すつかり其の人の地金が知れてしまふ。かういふ人は謂はゆる下愚下根の生れつきでどんなにきたへ直しても正直賢良な者になる可能性のない代物である。そればかりでなく此の種の輩は、爪の垢ほどの小利にでも、人目も恥もかまはず貪り取るといふ者で、僞善者らしく見せかけてもいゝから、少しは小利を貪り取ることを差控へてくれると、品がよいんだが、到底それの出來ない連中である。以上のことから考へて見るにほんの一時的な冗談半分なことに於ても、愚人の言動を眞似てはならぬ。今もし、狂人の眞似をして見るのだといつて、(素裸で、髪でも振り亂して)往來を走つたら、本人は眞似のつもりでも、他から見れば本物の氣狂としか見えぬ。又惡黨の眞似事だといつて殺人をやるなら、本人だけは眞似事だと思つてゐても、事實大惡人である。これに反して(よしや本人からでなく、ほんのかたばかりの眞似事にせよ)驥を眞似る駑馬は、やはり驥の仲間と見做さるべく、舜の行蹟を眞似るのは、よしや小人でも、やはり、舜の仲間とは言ひ得る。だから、極端にいへば、猫をかぶつて見せかけだけをつくつてゐる者でも、賢良正直な人の行蹟を眞似る人は、やはり賢良正直な人と謂つてもよいと思ふ。

【餘論】　一、人の心がすなほでなくて、僞の多いものであることは、謠曲「羽衣」の中の天女の「……疑は人間にあり。天にいつはりなきものを。」の千古の大警句で、永久に剝げない折紙がつけられてある。冷汗三斗の思あるのは、伯龍一人ではない筈である。

二、至愚下根の人が賢人嘲罵のところの兼好の批評は痛烈骨をさすものがある。これについて思ひ出すのは、ツルゲニエフの「處世法」と題した散文詩である。

「若し、君が敵を手ひどく苦しめ、迫害してやらうと思ふなら」とある狡猾な老漢が私に言つた。「君は君自身の持つてゐると思ふ缺點や惡德を以て罵つてやり給へ……大いに憤慨して、罵つてやり給へ！

「さうすれば、まづ君がその惡德を有つてゐないとおもはせる。

「次には、君の憤慨は嘘でなくてすむ……且つまた君は、自分の良心の的となるのを避け得られる。

「たとへば、君が變節者ならば、君の敵を信念の無い奴と罵り給へ……

「若し、君が卑怯な性質なら、口を極めて、『彼が奴隷だ……文明の、歐羅巴の、社會主義の奴隷だ』と罵つてやりたまへ……」

『非奴隷主義の奴隷とも言へるか知ら。』と私は氣を引いて見た。

『左樣、さうも言へる。』と老獪な奸物はうなづいた。（生田春月氏譯）

三、江戸時代の松平某といふ領主が、領内巡視の時、某孝子が其の行列を拜せしめようとて、足腰の立たぬ老母を背負つて路傍に佇み、其の善行が領主の見聞に達し、身にあまる褒詞と金物を惠まれたといふ。これを聞き傳へた隣村の無頼漢が、其の次の巡視の折、無病息災で勞働に從事してゐる父親を無理矢理に説伏して背負はれて貰ひ、わざと路傍に出しやばつて領主の褒賞を待つてゐた。領主からはこの僞孝子をも賞賜しようとした。すると其の素性を知つてゐる臣下から、實情を具して沙汰止みにせんことを申出た。が、領主は首をふつて「いや〳〵、親孝行のやうなよいことは、眞似でも、贋でも、しないよりは大いに善いことぢや。」と言つて、やはり多分に褒賞してやつたといふ。この仁慈と勸善の温情は、遂に其の僞孝子の無頼漢をして本物の孝子たらしめ、領内の民風も亦頓に敦厚に趨いたといふ。「苟志二於仁一矣、無レ惡也」、志さぬ者に比して、志す者の方が、遙に積極的可能性のあることは、大いに首肯出來ることである。

下部に酒飲ますることは——第八七段——

下部に酒飲ますることは、心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時、迎へに馬をつかはしたりければ、「遙なる程なり、口つきの男にまづ一どせさせよ。」とて酒を出したれば、さし受けさし受け、よゝと飲みぬ。太刀うちはきて、かひがひしげなれば、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ち向ひて、「日くれにたるに山中にあやしきぞ、とまり候へ。」といひて、太刀を引き拔きければ、人もみな太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「うつし心なく醉ひたるものに候ふ。まげて許し給はらむ。」といひければ、おの〳〵嘲りて過ぎぬ。この男、具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事

し給ひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名仕らむとするを、拔ける太刀、空しくなし給ひつること。」と怒りて、ひた切りに切り落しつ。さて「山だちあり。」とののしりければ、里人起り出であへば、「われこそ山だちよ。」と言ひて、走りかかりつゝ切り廻りけるを、あまたして手おほせ、うち伏せて縛りけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男どもあまた走らかしたれば、具覺坊は、梶原にによび伏したるを、もとめ出でて、舁きもて來つ。からき命生きたれど、腰切り損ぜられて、かたはになりにけり。

【章旨】　市井の一椿事――即ち酒亂（あばれ上戸）の下部に酒を與へて、大狼藉を仕出來させ、我が身も爲に終生不具の身となり了つた話。

【語釋】　○京に　京の町に住める。　○具覺坊　傳不詳。　○なまめきたる　風流道に嗜深い。　○小舅　配偶者の兄弟姉妹にいふ。即ち義理の兄弟に當る間柄。　○申し睦び　へだてなく言ひ語らつて親しんでゐる。　○迎へに　宇治なる男の方から、京都なる小舅具覺坊を呼び迎へに。　○遙かなる程なり　具覺坊が嬉つた語で、「遠路わざ〳〵御苦勞である」。　○口つきの男　馬の口取りの若い衆。　○まづ一どせさせよ　何はなくともまあ一杯振舞つてやれ。この「一ど」とあるのは、必ずしも數量的に一杯（One Cup）の意味でなく、それぢや一つお願申すとしませう。」などの「一つ」と同じ用例。　○よゝと　ぐい〳〵と、息もつがずにぐい〳〵と飲むさまにいふ語。　○木幡　京都と宇治との中間にある小邑。　○奈良法師　謂はゆる南都北嶺の大衆などいふ其の南都東大寺・興福寺あたりの一癖ある住僧。　○兵士　專門の武人。　○遙ひたるに　具覺坊の一行に出會つたのに對し。　○矢矧げ　矢を弓に番ひ。　○まげて　こちらから無禮をしかけておいて、又許してくれなどとは、無理な賴だが、そこを特に。　○具覺坊にあひて　具覺坊に向つて。　○ひた切りに　滅多討ちに。　○切り落しつ　馬上の具覺坊に切りかゝつてこれを轉落せしめたこと。　○さて　さうしてから。　○山だち　野伏・山立と對して用ひられる語で、山野に起き伏ししてゐて辻斬强盜を働くもの。山賊。御馳走してくれた人、主人の大事なお客に斬りつけるほど正氣を失つてゐる男自身が、もつと人に挑みからかつて見たくて、自ら「山だちあり」と叫んで人寄せをしたのである。　○起りて　一度に出て來て。　○手おほせて　手負ひにして、利き腕でも叩きのめして負傷させて。　○あさましくて　呆れ驚いて。　○梶原　くちなしの木の多く茂つた原。　○よび　弱つて苦しい時うん〳〵とうめくこと。　○求め出でて　探し出して。　○舁きもて來つ　駕籠などに載せて連れて來た。

【口譯】　供廻りや下男などいふ自制心のない者に酒を振舞つたりすることは、よく〳〵注意せねばならぬ。（時期とか、分量とか其の人體によつて）宇治に住んでゐた男（俗人）が、京都在住の具覺坊といつて風流道に嗜深い出家と、義理の兄弟關係にあつたので、いつも隔てなく（往來して）睦じく交らつてゐた。或時、この宇治の男の方から京都の具覺坊のところへ、下男に馬を牽かせて、それに乘せてくるやうにと迎へにやつたところ、具覺坊は、「遙々の處を御苦勞だ。馬の口取男に何は無くとも一杯振舞つてやれ。」と言つて酒を出したから、（大好物のことゝて）口取男は幾杯も〳〵もなみ〳〵とついで貰つてぐい〳〵と飲み干した。さて此の口取男の人體を見るに、太刀を佩いて如何にも物の役に立ちさうに見えるので、具覺坊は（「これなら夜道にかゝつても大丈夫」と）賴もしく思つて召し連れて行つたが、木幡邊に差しかゝつた頃、奈良法師が、澤山の武士を引き連れてやつて來るのに、出つくはした。すると、何の氣を起したものか、件の口取男が、其の一行を向ふにまはして、「やあ〳〵、日の暮れた今時、此の山中に、（その物々しい扮裝で多數の者がやつていくとは、只者ではあるまい。うさん臭いぞ、さあ〳〵立ち

止まれ。」と呼びかけて、太刀を抜き放つたから、先方でも「やあ〳〵推參なり、下郎、それたゝんでしまへ。」と皆一度に太刀を抜き、弓に矢をつがへて打つてかゝらうとするのを、具覺坊が手をすつて哀訴歎願して、「ぐでん〳〵に醉つぱらつて、正氣の無い下郎奴でございます。どうぞお胸にするかねるところをこの愚僧に免じて御見のがし下さいますやうお願ひ申します。」と詫び入つたので、その一行は口々に「いや飛んでもない人騒がせな下郎だ。」あんな奴にかかり合つてもこちらの名譽にやならぬ。」「坊主は相見互ぢやから」など〵嘲罵しながら、刀ををさめて通り過ぎた。さて、具覺坊は「やれ〳〵、危いところを助かつた、一時はどうなることかと氣も心も顚倒してしまつたが」と思つてゐると、今度は此の口取男が、怨めしげに馬上の具覺坊を對手にまはして、「いや、御坊は、（いらぬところへ邪魔に入つて）何といふ殘念なことをして下さる。わしはちつとも醉つぱらつてなんか居やしない。久しぶりであいつらを片端から、切りまくつて、自慢の腕前を見せてやらうとしたのに、よくも拔き放つた此の太刀に恥をかゝせてくれましたな。よし然らば今度は御坊が相手。」と怒り狂つて、滅多無性に切りまくつて、手傷を負はせ馬上から轉落させてしまつた。これでもまだ蟲の收らない血に飢ゑた口取男は、（もつと多數の人々に挑らつて見たくて堪らないので）「やあ、山賊だ〳〵」と大聲でわめき立てたので、村人達が一度に出て來て、其の場に集ると、「わしが、其の山賊樣ぢや、（山賊樣の御手並を拜見せよ）」と言つて、誰彼の差別なく走りかゝつて切り廻つたのを、多數が一度にかゝつて手傷を負はせて自由の利かないやうにし、さてねぢ伏せて縛しあげてしまつた。馬は、具覺坊が斬られた際の血汐を浴びたまゝ、鞍一つで宇治大路なるおのが主家へ驅け込んだ。さては具覺坊殿の身に一大事があつたに違ひないと見てとつた家人は、究竟の若者を多數京都への道筋へ急派したら、當の具覺坊は現場からやゝ隔つた梔原にうん〳〵うめき苦しんで倒れてゐたのを、探し出して、駕籠かなんぞに載せて連れて來た。まことにあぶないところを、一命だけは取り止めたけれど、腰骨のあたりをしたたか斬り込まれて、たうとう不具になつてしまつた。

【餘論】　一、この話は、よほど兼好に興味を與へたものと見えて、文としてもなか〳〵巧みな表現が企てられてゐる。それから後世人も、喜んでこれを鑑賞したと見えて、文藝鑑賞の辿るべき最後の道程であらねばならぬ「賞鑑より創作へ」が營まれてゐる。几董の句に

　下部等に酒盛り過ぎた鯖の酢。

といふのがあり、しかも其の前置に「兼好法師の口まねして」とあるところが興味深く感じられる。

二、「ひた切りに切り落しつ」は「滅多無性に切りまくつた。」でもよいやうであるが、後の「馬は血つきて」や「腰切り損ぜられて」の記述から考へると、どうしても馬上の具覺坊に斬りつけて、大負傷をさせ、その痛みと驚きとで落馬し、さて村人と亂鬪を演じてゐる際に這ふ〳〵梔原へと這ひ逃れたものと見たい。下にゐて、斬りつけられた血汐が馬に飛びかゝつたとすると聊か不自然であるし、それに「腰切り損ぜられて」も、馬上ならば、丁度刀尖が腰から太股のつけ根あたりへかけて當るところと思ふ。たゞ聊かどうかと思はれるのは、さうだとすると、奈良法師に陳謝歎願する時、具覺坊がやはり馬上に居つたか。そんな高あがりでは先方が承知しまいと言ふことであるが、そこもよく考察すれば無理が無くなると思ふ。即ち陳謝は馬から下りてしたに違ひない。それから拔いた太刀のやり場に困つて怨めしげに後見送つて突立つてゐる口取男を、見返りながら奈良法師の一團が、口々に嘲笑を浴びせつ

ゝ、やゝ遠のいて行く間に、日も暮れてゐるし、まだ前途も相當にあり、思はぬことに際どつた具覺坊は心急いて再び馬上の人となつたのに違ひない。もしまだ奈良法師の一行がそこに居合はすのに、其の目前で直ちに醉漢が具覺坊に惡口ついたり、切りかかつたとしたら、たつた今具覺坊の僧形と歎願とに同情して其の申出を容れた奈良法師の一行は、きつと、おのれ、不屆者、今度こそは容赦はならぬ。」と、具覺坊をかばつて其の口取男を成敗してしまふに違ひない筈だから。

三、「奈良法師が兵士あまた具して」のあたりに、武力を養つて、權威を張り、やゝもすれば鬪諍を事としてゐる當時の南都北嶺などの生活相が自から明白に語られてゐる。

四、なまめきたる具覺坊であつたので、人情味があり、粋を利かせて、ねぎらふ積りに酒を一口振舞つたのである。かうして温い處置で、世間の奴僕や日雇などの仕事に非常に能率をあげて、大成功を收める場合が多い。だからかうした處置は決して間違つたことではない。いな大いに人と、時と、分量とさへ考慮してやれば、有效なことである。さうしてそれは情知りの氣のつく人でなければ出來ないことである。具覺坊のこの處置は、たゞ時と、分量とがまづかつたのである。これを宇治に安着してからに、施したら、かうした過は起らなかつたのである。具覺坊が「かひ〳〵しければ賴もしぼに」思つたのも無理はない。かうした酒亂癖を持つた男に限つて、飲まぬ時の素直さ、忠實さ、恪勤ぶりといつたらありはしないから。要するに、兼好も「下部に酒飲ますることは、心すべきことなり。」といつて、「下部に酒飲ますべからず。」といつて居ないところに深甚な意味があることを見逃してはならぬ。

大臣　常磐井の相國――第九四段――

常磐井の相國、出仕し給ひけるに、勅書をもちたる北面あひ奉りて馬より下りたりけるを、相國、後に、「北面なにがしは、勅書をもちながら下馬し侍りし者なり。かほどの者、いかでか君につかうまつり候ふべき。」と申されければ、北面を放たれにけり。勅書を馬の上ながら、捧げて見せ奉るべし。下るべからずとぞ。

【章旨】　勅書を奉じた者は、其の職分上尊嚴を持し、大いに自重せねばならないものであることを說き、この作法に反した者の不見識者の罷免を物語つてゐる。

【語釋】　○常磐井の相國　太政大臣西園寺(藤原)實氏の事。京都市、京極常磐井の邸に居住してゐたので此の稱呼があつた。相國は太政大臣の唐名で、又大師・大相國などともいふ。　○出仕　參内。　○勅書　勅旨を書き認めてある文書のこと。禁祕抄に「黃紙に書し、上卿これを奏し、主上、日(日附のこと)を書きたまふ。」とある。　○北面　「きたおもて」とも訓む。北面の武士の略。院の御所即ち上皇の御居所の護衛に任ずる武官。其の詰所が院の御所の北面に當つてゐるので此の名がある。院の昇殿を許された四位・五位の諸太夫を上北面といひ、六位以下の者を下北面といふ。白河院の時から置かれた。　○放たれにけり　其の北面を御罷免になつた。

【口語】　常磐井の太政大臣西園寺實氏公が宮中へ參内なさいました時、途中で勅書を捧持した北面の武士が、此の太政大臣に行き逢ひ申して、敬意を表する爲に馬から下りたのを、（じつと見屆けた）相國は、後で、「某といふ北面の武士は、長多くも院の勅書捧持といふ大役を仰せつかつてゐながら、下馬をして（私に敬禮した）者にございま

す。こんな重大な作法さへ辨へてゐない者が、どうして過ちのない宮仕へが出來ませう。」とお話しになつたので、其の某といふ北面の武士は、御役御免を申し渡されてしまつた。一體勅書を捧持してゐる場合は、（どんな高位高官の者であらうとも、）馬上のまゝ、其の勅書を捧げ持つてお見せ申すのが作法である。決して下馬などしてはならないのだといふことである。

【餘論】　一、すべて皇室に關することや勅命を奉行するときなどでは、我が身の分に拘らず、又社會人としての作法に拘泥すべきでない。これが取りも直さず、君上を敬し、勅命に忠實なる所以となるのである。兼好はさうした一面を本書第四十八段で次のやうに語つて奥床しがつてゐる。「光親卿、院の最勝講奉行して候ひけるを、御前へ召されて、供御を出されて食はせられけり。さて食ひちらしたる銚重を、御簾の中へさし入れて罷り出でにけり。女房「あな、きたな。誰にこれとてか。」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やむごとなきことなり。」とかへすがへす感ぜさせ給ひけるとぞ。」勅命を奉じて朝廷の重大事を奉行してゐる際などには、些々たる食事の跡始末などいふ作法の如きに拘泥せずに、お役目大事と精勵するのが、盡忠の最上手段である。さればこそ後鳥羽上皇が、「かへすがへすも感ぜさせ」られたのである。

二、この章はまた、「お手鼻で紳士の里がすぐと知れ。」といふ川柳のやうに、人の教養や、地位や、職業などは、如何に勿體ぶつて一時はつくろひ飾つても、結局不用意の間に暴露してしまふものだといふ人情の機微を語つてゐるものだといふやうに解せられる。いつも上官や高位顯官には下馬しては敬禮することが習性のやうになつてゐる此の北面は、「太政大臣がいらした」と思つたら、現下の重大使命と自重心とを忘れてしまつて、下賤な北面の體の叩頭生活を無意識的に表現してしまつたのであらう。頃日某若手銀行員の直話を聞いて益々此の感を深くした。彼曰く、「電車の回數券を求めたりすると、いつの間にか職業的習慣性が働いて、すぐ器用な手つきで紙幣でも數へるやうに、其の枚數を檢め數へてしまひ、それからはつと思つて、あたりを見廻し、誰かゞ、この仕草を見て、自分が下級銀行員であることを氣づいて嘲笑してゐはしないかと、顏から火が出る思をすることが屢々である。」と。」味深い述懐ではないか。

寸陰惜しむ人なし——第一〇八段——

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはゞ、一錢輕しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむこころ切なり。刹那覺えずといへども、これを運びてやゝされば、命を終ふる期忽ちに至る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず、只今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし。もし人來りて、わが命あすは必ず失はるべしと告げ知らせたらむに、けふの暮るゝ間、何事をか賴み、何事をか營まむ。われらが生けるけふの日、何ぞ其の時節に異らむ。一日の中に飲食・便利・睡眠・言語・行歩、やむことを得ずして多くの時を失ふ。其のあまりの暇いくばくならぬ中に、無益のことを言ひ、無益のことを思惟して、時を移すのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる、最も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交りを許さざりき。しばらくもこれなき時は死人に同じ。光陰何の爲に惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、

やまむ人はやみ、修せん人は修せよとなり。

【章旨】　今日はありて明日はもう無き數に入るやもはかられぬ無常迅速な人生ゆゑ、現下の一瞬一刻を惜しんで、只管靜慮と俗念離脱との工夫を積み佛道修行に專念せよと奬めてゐる。

【語釋】　○これよく知れるか　僅少の時間だからとて惜しまないのは、すでに、寸陰の惜しむべき筋合を知悉してゐて、後生善所を念じ、改悟得脱の域に達してゐるので、今更さうした必要がないと悟りすましてゐる爲か。　○愚なるか　愚昧無智で、寸陰の惜しむべきことも氣がつかずに、うかうかとして醉生してゐるのか。　○怠る人　佛道を修行して菩提を求めることをせぬ人。　○一錢を惜しむこと切なり　時間にすれば寸陰に當る、ほんの一錢といふやうな少額の金を大切にすることが非常なもんだ。　○刹那　梵語 Kchana の音譯で、急と譯す。即ち一念とは一刹那のこと。印度に於ける時、最少單位のこと、極めて短い時間のことをいふ。「翻譯名義集」に「俱舍論に曰く、壯士一彈指頭に六十五刹那あり。仁王に曰く、一念中に九十五刹那有り。」と說いてゐる。　○覺えず　刹那々々が積り積つて遂に死期に至るといふ事に氣がつかない。　○運びて　おくり續けて　○逍人　こゝでは佛道修行に志す人。　○遠く日月を惜しむべからず　まだ〳〵先きがあると思つて、明日とか來年とかいふ風に、さき〳〵の月日に望をかけて修行をしようと思つてゐてはならぬ。　○我が命明日は必ず失はるべし　來り告げる人の言葉を直寫すれば「汝の命……」となるべきところ。「あなたの命は、明日きつと無くなる。」　○其の時節　死期を豫言れて、其の到來を待つてゐる間。　○便利　大小便。　○言語　談話。　○行步　坐作進退。　○月をわたりて　一月・一月と經過して。　○幾許ならぬうちに　いくらも殘つてゐない時間で。　○無益のことを言ひ　我々の道業を益することのない言葉を語りつゞけ。「大論」に「無益の談とは綺語なり」とあり。「永平清規」の衆寮箴規に「寮中は、世間の事、名利の事、國土　治亂、供衆の麁細を談話すからず、これを無義の語、無益の語、雜穢語、無慚愧の語と名づく。」とある。　○謝靈運　支那六朝（リクチカ）時代の騷人。時人も宋朝も彼を詩人を以て遇してゐたが、彼自身は政事家として世に聞えたい志願を有し、かつて永嘉の太守になつたこともある。山水を遍歷し、遊覽旅行の詩賦が多い。　○法華の筆受　法華經の筆錄者。筆受とは僧の弟子が師の敎を受け其の提ゝ講述を筆記することをいふ。こゝでは佛典を漢譯する際に、梵語の飜譯を漢字に寫すること。謝靈運は法華經の飜譯には關係してゐない。但涅槃經の漢譯には參與してゐたといふ。だからこれは兼好の思ひ誤であらう。佛經に大分肩を入れてゐたことは事實だが。　○風雲の思を觀ぜしかば　諸說があるが、風雲に乘じて志を天下に行はうといふ企、即ち上記無益の語の註にある「世間の事國土の治亂」などいふ佛徒の關心すべからざる無益な事に思を潛めてゐたから。謝靈運は晉が亡びて宋朝になつたのを怨み、再び晉朝の復興を思念し、遂に亂を起して成らず、元嘉十年四十九歲で刑死した人である。　○惠遠　睹道と號し、支那眉山金流鎭の人、晉の臨濟僧、諸大刹を經て虎丘に入り、更に詔を奉じて高亭山崇先寺に住し、又靈隱寺に遷る。孝宗皇帝、勅して佛海禪師の號を賜うた。　○白蓮の交　惠遠が其の院の池に多くの白蓮を植ゑて極樂淨土に擬し、僧俗の信徒や高士を相會して、淸い交りを結んでゐた。これを白蓮社と稱した。これに謝靈運の參會することを拒否した。　○これなき時は「これ」は上記の要領で、寸陰を惜しみ、死の到來を待ち、佛道に專念することをさす。　○内に思慮なく　心中には無益な思慮雜念なく。　○外に世事なく　外には世間のこと名利の事なゞに煩はるゝことなく。　○やまむ人はやみ以下は、

内に思慮なく……
外に世事なくして　}（やまむ人はやみ……（冒頭の「よく知れる人は」）
（修せむ人は修せよ……（冒頭の「愚にして怠る人は」）

のやうに書きわけると其の照應がはつきりして來る。即ちすでに修行の出來てゐる人は、「念々を内に思慮なく、外に世事なき境涯にして其のさき佛道修行といふことはもうやらずにおいてよからうし。」愚にして佛道修行を忘り忘れてゐる人は、「念々を、

先づ内に思慮なく、外に世事なき境涯となし、更に進んで佛道修行に一向專念なれ。」といふのである。

【口譯】　（世人を見渡すと、どうも）寸陰を惜しんで佛道修行にいそしむ人が無い。（これは一體）もはや已に佛道の極意を知悉してしまつて、（其の必要が無いために）惜しまないのか、それとも愚昧な爲に、これほどの一大事に氣がつかない爲に惜しまないのか。（すでに寸陰の惜しむべきことを知り拔いてゐて、而も惜しまぬ人に對しては、釋迦に說法だから差控へるが）生來愚昧で寸陰の惜しむべき道理を知らぬ者の爲に、（分り易いやうに今金錢の事に譬をとつて）申すならあの一錢といふ金、それは誠に輕少なものであるが、これを幾萬幾百萬と、文無しの素寒貧を千萬長者といはれる者にするのである。だから見給へ、商人達が僅か一錢の金に强烈な執着心を持つてゐるから。（目には見えないから、誰もそれ程に重要視してゐないが、時間といふものもこれと同樣なものだ。）一刹那々々々を分割的に考へてゐるから、さつぱり氣が付かずにゐるが、この一刹那々々をどこまでも過しつゞけて行けば、（長いと思つてゐる五十年七十年の春秋も、いつの間にか經過してしまつて）、死期といふものが忽ちに目前に迫るのである。それだから、（商人が一錢を惜しむやうに、一刹那々々の尊重すべきことを知つてゐる）佛道修行に志す人は、そのうち〳〵といつたやうに、遠い先々の月日に望をかけてゐるやうな（迂濶な）事でなく、現に直面してゐる一瞬一刻が、無價値に過ぎてしまふことを惜しむべきである。今もし人が來て、自分に「あなたの命は明日はきつと無くなるだらうと豫言したとしたら、その死期までの間卽ち今日一日の暮れ行く間、（もはや氣落ちがしてしまつて）俗世間の何事も賴みにはしまいし、又何事にも手をつけやしないだらう。（たゞひたすらに、後世の安穩と臨終正念を念ずる外あるまい。）私たちが現在かうして平氣で生きてゐる今日の暮るゝ間も、思へば（無常迅速のこの世の習）かの死期の豫告をうけて、其の到來を待つてゐる間の心持とどこが違ふか。ちつとも違ひはしない。（一體佛道修行に專念しようと心がけてゐる者にも、四六時中間斷もなく精進出來るものぢやない。最少限度にきりつめても、）一日の中には飲食や、大小便や、睡眠や、他人との對談や坐作進退などで、のつぴきならぬ多くの時間を（佛道修行以外の事で）失つてしまふ。さて二十四時間から以上の生活上必須の時間を差引いた殘餘の、もういくらもない其の僅少な時間（これをそつくり佛道修行の方へ廻すなら、まだ感心なところもあるが）のうちに、佛道修行の邪魔にこそなれ、何等役に立たぬ無駄事をしたり、言つたり、思つたりしてあたら「時」を空費する。いや「時」位ならまだしも、さやうにして便々と日を過し、月をおくり、（一年・十年・五十年を過していつて）結局一生を棒にふつてしまふ。かうした無意味無反省な生活をしてゐる者が、最も愚昧なものである。晉代から宋代にかけて世に聞えてゐた支那の謝靈運といふ人は、法華經の筆受までやつた中々の佛道執心な仁ではあつたが、どうも其の心底には俗的な名聞心などが橫たはつてゐて、佛道に對して一向專修といふ隨喜渴仰的態度に缺くるところがほの見えたとやらで、惠遠といふ當時の大德は、白蓮社の交友とすることを許さなかつた。で、人として一瞬一刻たりとも、佛道に專念するために寸陰を惜しみ、さうして一大事（死）の到來に備へない時には、生ける屍であつて、眞實に生きてゐる者とは申されぬ。（かほどまで惜しめ惜しめと力說した）光陰は、然らば何の爲に惜しむべきものかといふことを更に要約するならば、内部的には心を苦しめ煩はすやうな雜念煩惱がなく、外部的には身を惱ましく苦役せしめるやうな俗事のないやうにして、さてすでに修行が出來、一大事の覺悟の出來てゐる人はそのまゝ其の無關心な明鏡止水の心を持ち續けて居ればよいし、愚昧にして未だ修行の出來てゐない人は、さうした内外の物と心に煩はさ

れぬ心を以て、佛道修行の一事に精進する――といふ、その何れかに充常させる爲にのみ寸陰を惜しめといふのである。

【餘論】　一、時の惜しむべき理由を、ひたすらに消極的、厭世的な見地からして、佛道修行、欣求淨土の爲としたところは、兼好一流の我田引水的說明であるが、徹頭徹尾その一事に終始してゐるところは勇敢である。

二、「人を見て法を說く」の妙機は、「愚にして怠る人」即ち利慾にのみ目眩み、惑溺してゐて、佛道修行など心にもかけぬ拜金宗信者の爲にもたらし來つた譬喩が、一錢拿重といふ金錢問題であることである。乞食の子は茶碗の音に、武士の子は轡の音に目を覺ますといふ俚諺の筆法からいへば、商人の子は算盤の音で目を覺す筈、この遺傳の本源の親たる者が、金錢の譬に目を閉ぢ耳を塞いでゐられようか。論語にもかういふ語がある、「君子喩二於義一、小人喩二於利一。」と。

三、「時を移すのみならず、日を消し、月をわたりて、一生を送る」の漸層法の修辭亦頗る力がある。

四、「我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るゝ間、何事をか賴み、何事をか營まむ。」とある心を、他面から說述したと思はれるのが、第一一二段の「明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば人言ひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切になげく事もある人は、他のこと聞き入れず、人の愁喜をもとはず……」とある一節である。同段の「……日暮れ途遠し、わが生既に蹉跎たり、諸緣を放下すべき時なり。」も「只今の一念、空しく過ぐる事を惜しむべし。」に應じてゐるやうで、兼好の持論が色濃く塗られてゐると思ふ。

五、この段に「一日の中に、飲食・便利・睡眠・言語・行步やむことを得ずして多くの時を失ふ。」と言つてゐる。兼好、は、とにかく餘程時間に對しては近代人的な敏感性と價値觀とを抱懷してゐたやうだ。勿論其の目的には佛道修行と金との相違はあるが。だから第一二三段にも「無益の事をなして時を移すを、愚なる人とも、ひがことする人ともいふべし。國のため、君の爲に、やむことを得ずしてなすべき事多し。其のあまりの暇いくばくならず、思ふべし。人の身にやむ事を得ずしていとなむ所、第一に食物、第二に著る物第三に居る所なり。……」と說いてゐるが、こゝに「國のため、君の爲にやむことを得ずしてなすべき事多し。」とあるところがうれしい。第一段の「みかどの御位はいともかしこし、竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやむごとなき。」の言葉で、兼好の忠君心を發見した私は上記の語に於ても亦さすがに此の王土に孕まれ、此の國の水土に生ひ立ち、特に後宇多上皇の親昵を忝うした者だけの事があると、ひそかに會心の微笑を禁し得ないのである。

明日は遠國へ――第一一二段――

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心しづかになすべからむわざをば、人言ひかけてむや。俄の大事をも營み、切になげく事もある人は、他のこと聞き入れず、人の愁喜をも問はず。問はずとて、「などや」と恨むる人もなし。されば年もやうやう長け、病にもまつはれ、況や世を遁れたらむ人、またこれに同じかるべし、人間の儀式いづれの事かさり難からぬ。世俗のもだし難きに從ひて、これを必ずとせば、願も多く、身も苦しく、心のいとまもなく、一生は雜事の小節にさへられて空しく暮れなむ。日暮れ途遠し、わが生すでに蹉跎

たり、諸緣を放下すべき時なり、信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を得ざらむ人は、ものぐるひともいへ、うつゝなし情なしとも思へ、譏るとも苦しまじ、譽むるとも聞き入れじ。」

【章旨】　世間の義理や人情にのみかゝづらひ、ほだされてゐずに、さつさと一切の世事俗念を放下して、菩提を求め、修身に專一なれと勸めたもの。

【語釋】　○聞かん人　言ふ人、聲明してゐる人に對し　○心しづかになすべからむわざ　じつと心を落ちつけてしなければならないやうな用事。　○言ひかけてんや　持ち出して話しかけるやうなことをするだらうか、どんな沒分曉漢でもそんなことはしないにきまつてゐる。　○餓の大事　病死とか野邊送りとかいふこと。　○愁喜　吉凶、不幸や祝ひ事。　○などやと怨むなぜ吉凶の音問をしてくれぬと怨み言いふ人もない。　○人間の儀式　冠婚葬祭などいふ世間附會の禮儀や義理。　○いづれのことかさり難からぬ。何事が避けがたくないものがあらうか、どれもこれも皆避けがたいものばかりである。　○世俗　世間體だの人情だの義理合ひだのをいふ。　○もだし　默すで、何等意に介せずにおくこと。　○必ずとせば　是非果さねばならぬとすると。　○雜事の小節　或は小節の雜事と置きかへて解する方が分りよからう。こまゝ〳〵しい附合やお義理。　○さへられて　遮られて。邪魔されて。一本にさゝへられてとある。この方でも同じこと、支へられて、差支へを生じさせられて。　○日暮れ途遠し　唐の白樂天が七十一歳の時の詩の句に「日暮（レテ）途遠（シ）。吾生已蹉跎（ヌリ）」とあるを引いたもので、もうすつかり老衰期に入つてしまつたが、修業すべき仕事は山のやうにあり、前途（目的到達）はまだ〳〵甚だ遼遠なものがある。無爲に過し來つた老後の悔いである。　○蹉跎　つまづくこと、足どりがよろけて進みがたいことにいひ、轉じて又人が志を得ずにゐること。自分の前途もすつかり行詰つて、展開活躍の力もない。　○諸緣　外界との關係交渉。　○放下　「ハウゲ」とよむ。放は「はなつ」で、手より物を放ち捨てること。精神上にも、身體上にも一物も執することなく、すつかり遠離解脫すること。　○信　他人との約束事。　○この心を得ざらむ人は　この一切萬事を放下して、信も守らじ、禮儀にも拘らぬといふ心持の了解出來ない人は。　○うつつなし　正氣を失つてゐる。情なし、木石のごとき無情冷酷な人。　○苦しまじ　苦にしない。平氣でゐる。　○譽むるとも　文法上「ほむとも」とあるが正しい。

【口譯】　「明日は遠國へ向け旅立ちする」との聲明を聞いてゐる場合、その旅立を聲明してゐるそは〳〵してゐる人に對つて、じつと心を落ちつけてしなければならないやうな性質の用事を、持ち込んでいつてさせるやうなことは、（どんな氣のきかない人だつて）しはしまい。又（前々から豫定してかゝれない）突發的な急死とか、野邊送りなどいふ大事件の處置に取りかゝつてゐる人や、身も世もなく悲歎にくれてゐる人といふものは、（自分の事だけに沒頭してゐるから、よしんば、骨肉近親の間柄のことにもせよ）他人事には一切うはの空であり、他人の吉凶などに對しても音問一つしようとはしない。（これは普通の人情であらう）、吉凶の音問といふ義理を缺いたからとて、（すでに事情を知つて居る者は）「なぜ、見舞に來ないのだらう。」などゝ、怨み言言ふ人もない。（もし、あるなら、さういふ人が無理であり、野暮といふもの）（さて以上は、捨ておけぬ椿事出來の場合に義理を缺いても咎めはしないし、咎めるなら咎める方が無理だといふ例であるが）だん〳〵と年とつて老衰期に入つた人や、（又若くとも）病氣に取りつかれて心身の自由を失つてゐる人や、それから又、況してや其の名からして出家であり、遁世者と呼ばれてゐる人々、即ち無常（死）といふ一大事を眼前に控へてゐる人々なども、やはり上座の例と同樣な取扱（世間の義理や附合を缺いても咎め立てはせぬといふを受くべきわけである。（だから、さうした世間づき合ひや、義理な

どに屈托せず、思を棄てゝ無爲の境涯に一意猛進せよ。)世渡りの上の儀式や附合といふものには、どれ一つ缺かしてよいといふものは一つだつてありやしない。だが、その世間の義理やつき合を缺いてはおかれぬとあつて、一から十まで殘らずこれをつとめ果してゐるならば、あれもこれも、又他人に引けをとらぬやうになどと願望も多くなり、從つて身體にも苦勞が多く、心にも平安な時がなくなり、かやうにして一生はこまゝ〳〵した詰らない事に煩はされて、無意味なうちに過ぎてしまふだらう。白樂天の謂はゆる「日暮れて途遠し、吾が生既に蹉跎たり」といふところである。から氣のついた今日只今こそ、世間的の一切の俗世間の附合や義理立ての一切を斷絶放擲すべき時である。だから世間の約束どこも、禮儀や附合なども守りはしまい。かうした私の心持の理解出來ぬ人は、或は當人を目して狂人と言はゞいへ、正氣を失つた奴、無情冷酷漢と思ふなら勝手に思へ。(一旦かうと心の定まつた者には、)他人の罵言讒謗も平氣の平左であるし、賞讃歎美も、心を引かれはせぬ筈。

【餘論】　一、兼好の說述は、いつも通俗平易なしかも適切極まる譬喩から入つて、深遠幽玄な哲理に導くといふ手法をとつてゐる。佛者の說敎といふのが大方それであるが、中にも本段の「遠國旅行者の例話の如きは誠に適切であり、又味深いものの一つである。

二、求道得菩提に精進せんとするものが、俗事にかゝずらつてゐては功を成し得ないことは古今一徹である。當時の佛門に入らうとしてゐる者、又はすでに佛門に入つてゐるものにも、世事俗習に煩はされて、其の大を成しなかつた者がどんなにか多かつたことであらう。本段はそれらの者への三十棒ともいふべきものであらう。研究に沒頭して、十八ヶ月に亘つたあの日露戰爭の始めから終末までを知らずにゐた學者が明治時代にあつたが、これらは得菩提と學術研究との道こそ遠へ、大いに兼好に賞められる側であらう。

三、徒然草には、世事俗習にのみかゝずらつて、この一心不亂の精進道を迎り得ぬ不徹底さを叱したと見られる記述が頗る多い。第五八段の「人と生れたらむしるしには、いかにもして世を遁れ見む事こそあらまほしけれ。ひとへに貪る事をつとめて、菩提に赴かざらむは、よろづの畜類に變る所あるまじくや。」といひ、第五九段に「大事を思ひ立たむ人は、さりがたく、心にかからむことの本意を遂げずして、さながらすつべきなり。……命は人を待つものかな、無常の來ることは、水火の攻むるよりも速かに、逃れ難きものを、その時、老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、すて難しとてすてざらむや。」といつてゐるのは、主として理論的方面からであるが、第一八八段の「あるもの、子を法師になして『學問して因果の理をも知り、說敎などして世渡るたつきともせよ。』といひければ、敎のまゝに說敎師にならむ爲に、まづ馬に習ひけり。輿・車もたぬ身の、導師に請ぜられむ時、馬など迎へにおこせたらむに、桃尻にて落ちなむは心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒などすゝむることあらむに、法師のむげに能なきは檀那すさまじく思ふべしとて早歌といふことを習ひけり。二つのわざ、やう〳〵境に入りければ、いよ〳〵よくしたく覺えて、たしなみけるほどに、說經習ふべき際なくて年よりにけり。この法師のみにあらず、世間の人、なべてこの事あり……」とあるのは、人間の儀式、世間づき合ひの方面のみに心ひかれてゐて、遂に一大事への精進の好機を逸した。兼好の理想からいへば無爲に過した者の標本的事例である。

さういふ兼好であるから、かの第六〇段において、あらゆる世俗の禮儀作法などを無視してゐる盛親僧都の「……よろづ自由にして、大かた人に從ふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、皆人の前するわたすを待たず、

わが前に据ゑぬれば、やかでひとりうち食ひて、歸りたければ、一人つい立ちて行きけり。時・非時も人にひとしく定めて食はず、わが食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども人のいふ事を聞き入れず、目さめぬればいく夜もいねず、心をすましてうそぶきをありきなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。」といふ傍若無人の振舞をもて、「徳の至れりけるにや。」と評して許してゐるのである。

兼好の理想的人物は、どこまでも一切の世縁を放下してひたすら念佛行願に耽つてゐる者で、第一二四段「いとあらまほし」の評を以て結んでゐる「是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠を立てず、たゞあけくれ念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。」の如き境地にあつたものと思はれる。

四、第一五五段に「世に從はむ人は、まづ機嫌を知るべし、……生住異滅のうつりかはる、まことの大事はたけき河の漲り流るゝが如し、しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり、されば眞俗につけて、必ず果し遂げむと思はむことは、機嫌をいふべからず。……」とあるのも、本段の趣を他而から語つたものと思はれる。

宿河原といふ所にて——第一一五段——

宿河原といふ所にて、ぼろぼろ多く集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入り來るぼろぼろの「もしこの中に、いろおし坊と申すぼろやおはします。」と尋ねければ、その中より「いろおしこゝに候ふ。かくのたまふは誰そ。」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申しし人、東國にていろおしと申すぼろに殺されたりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり。」といふ。いろおし、「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき、こゝに對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。前の河原へ參りあはむ。あなかしこ、わきさしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし。」といひ定めて、二人、河原へ出であひて、心ゆくばかりに貰きあひて、共に死ににけり。

ぼろぼろといふもの、昔はなかりけるにや。近き世にぼろんじ、梵字、漢字などいひけるもの、その始なりけるとかや。世を棄てたるに似て、我執深く、佛道を願ふに似て闘諍をこととす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして、少しもなづきさる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

【章旨】　其の禮儀正しさ、義理がたさ、しかも正々堂々たるぼろ〳〵の仇討の潔さに兼好がすつかり感服して書いた話。

【語釋】　○宿河原　武藏國又は摂津國にあるといふ。　○ぼろぼろ　「梵論字」又は「ぼろ」といふに同じ。支那唐朝時代の奇僧普化禪師を以て開祖とする普化宗を奉ずる修行者のこと。初傳者は異說があるが法燈國師であるといふ。國師が法を寄竹に授け、寄竹から五傳して虛無に至つた。虛無は佛未正成の孫であつて、それが僧となつて吹聲（尺八）を以て諸方に放浪した。虛無僧の名はこれから始つたといふ。爾來浮浪の徒が往々これに歸し、所在に寺を建て、派を分つて隆盛に赴いた。この宗の古刹で有名なものは、下總の一月寺、京都の明暗寺、武藏の鈴法寺等であると。　○九品の念佛　極樂に九品の淨土とて九品種の淨土がある。そこに往生せんと願つて、「南無阿彌陀佛」といふことを九色、調子をかへて唱へることだらうと。　○此の中に　文段抄には「此の御中に」とあるが、前後の關係からは、その方がよいやうに思ふ。　○恨み申さばや　恨み言が言ひたい。實は師匠

の鑁の討ちたい。　○對面　こゝでは立合つて勝負をなすこと。　○道場　もと釋尊が菩提樹下に端坐し、明星を見て成道された場所をいふ。轉じて、佛教を説き、祈禱を修するところ即ち僧侶の住居する寺院をいふ。　こゝは後の意。　○あなかしこ「あゝ恐れ入ります」が原義であるが、こゝでは「ゆめ〳〵」「決して」。　○わきざしたち　脇に居る附添人たち。同行衆。　○みづき給ふな　助太刀し給ふな、加勢し給ふな。　○數多の炽ひ　多くの人々に隙をつぶさせたり、手負でもさせたりしては。　○漢字　上から語呂でかう言ひ續けたのであらう。梵字は印度の婆羅門文字をいふが、さういつたのに言ひ續けたので、虚無僧の普通名詞でも固有名詞でもない。「奈良七重七堂伽藍八重樓」の「七重」や、「誰のめかけか鼻かけか知らないが」の「鼻かけ」や、「どこの牛の骨やら馬の爪やら知らないが」の「馬の爪やら」などと同じやうな用例である。　○我執　自我に執着し、自意を押し通すこと。こゝでは「執念深く、附きまとつて」などの意。　○閧諍　喧嘩・爭ひ、「二人共競名」闘、徒(當相助名)諍」とあり。　○放逸　放は進行に任せて制限させる義、逸は抑留したものゝ離れて行く義、放逸で「氣まゝ」「やりぱなし」といふ程の意で、即ち自己の思想や行爲に何等の檢束する所なきをいふ。　○無慚　自ら罪惡をなして慚づる心のないこと。　○少しもなづまざる　ちつとも命生きたいなどゝ執着せぬ。　○方　方面。　○語りしまゝに　物語つた通りに。

【口譯】　宿河原といふ所で、虚無僧が大勢集つて、九品の念佛といふのを唱和して居るところへ、外から(つか〳〵と)一人の虚無僧がやつて來て、「若しや、この御連中のうちに、いろおし坊と仰しやる虚無僧がいらつしやいませんでせうか。」と尋ねましたら、其の中から「お尋ねのいろおしは、こゝに居ります。(それはさうと)さう仰しやるのは(ついぞお見かけ申したことのない方)一體どなた樣で。」と答へますと、「(いや申しおくれましたが)拙者はしら梵字と申す者でございます。拙者の師匠何某と申さるゝ人が、東國で、いろおしと申す虚無僧に討ちはたされた由承りましたから、其の讐にめぐり會つて、師の坊の仇討本懐を遂げたいものぢやと念じて、お尋ね申す次第でございます。」といふ。(靜かに此の口上を聞き終つたいろおしは、「(いやこれは誠に)御殊勝にもまあ尋ねてお出で下さいました。いかにもいま仰せられる趣のこと、身に覺えがございます。(だが)こゝですぐ御相手申しては、此の道場に血を流すことになりませう。(だから)前の川原へ行つてお立會ひを致しませう。もし〳〵御同座の皆さま、決して〳〵拙者ども何方へも助太刀の儀は御斷り申す。數多の人々に隙をつぶさせたり、手負でもおさせしては、折角の佛事のお邪魔になりませう。」と約束をきめて、兩人(相連れだつて)河原へ出て行き、そこで思ふ存分(戰つた後)刺しちがへて、何れも相果てゝしまつた。

一體虚無僧といふ者は、昔はなかつたものらしい。近世になつて、「梵論字・梵字・とか、漢字とかいふ名稱を耳にするやうになつたが、それが此の虚無僧の起りであつたとかいふことだ。(それはとにかく)此の虚無僧といふものは、ひたすらに世を捨て遁れた者のやうでありながら、實は我意我執の憶念が強く、又ひたすらに佛道を念願してゐるやうでありながら、實は喧嘩爭ひごとにばかり身を入れて居る。氣隨氣まゝで、反省力のない恥知らずのやうにも思はれるが、併し其の死など眼中におかず、微塵も未練がましい風も臆したそぶりもない點が、(いかにも)小氣味よく思はれたので、(聞き捨てにしてしまふのも惜しく)人が物語つてくれた通りに書きつけておく次第である。

【餘論】　一、この話は、兼好にとつて興味深く、又聞き流しにしておくには餘りに惜しい材料であつたばかりでなく、兼好の此の記錄がまた後世の讀者にも頗る感興を催させたものと見えて、蕪村の句に

討ち果す梵論連れ立つ夏野かな。

といふ作があることを先づ紹介しておきたい。

二、次には此の話が、「世を棄てたるに似て我執深く、佛道を願ふに似て闘諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして、少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて」と、諸緣放下を說き、不殺生戒を五戒の第一として奉ずる兼好をして感歎措く能はざらしめた理由は、いかにも此の果し合ひが白晝、正々堂々と名乘をかけ、何れもあわてず迫らず、道場も汚さず、衆人に迷惑をかけぬやうに念を押して、さて些の卑怯未練な振舞もなく立派な最後を遂げたところ――卽ち眞の武士道的措置にあるのである。だから兼好も、此の兩人を飽くまで淸く潔く描寫してやらうとして、練りに練つた上品な、あらたまつた平安朝式の對話をさせてゐる。

「もしこの中にいろおし坊と申すぼろやおはします。」

「いろおしこゝに候ふ。かくのたまふは誰ぞ。」

「しら梵字と申す者なり……その人に逢ひ奉りて恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり。」

「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面し奉らば、道場を汚し侍るべし。……あなかしこ。わきさしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし。」

右の對話の部を更に熟讀玩味せよ。何といふ莊重優雅な好對話であらう。「特に恨み申さばや」「…みつぎ給ふな…」「あまのわづらひにならば」などの語の巧妙さよ、かるが故に筆者は日本語を讃美するとさへ言ひたい。

三、いろおしが「さること侍りき」と、惡びれず、素直に肯定して出るところで、筆者は、菊池寛氏の「敵討以上」といふ戯曲中の、「實之助と了海との邂逅問答」の場面と言葉とを憶ひ浮べずにはゐられない。

養ひ飼ふものには――第一二二段――

養ひ飼ふものには、馬・牛。つなぎ苦しむることそいたましけれど、なくてかなはぬものなればいかがはせむ。犬は守り防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなむ。その外の鳥・けだもの、すべて用なきものなり。走るけだものは檻にこめ、鎖をさされ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山をおもふ愁やむ時なし。その思わが身に當りて忍び難くば、心あらむ人これを楽しまむや。生を苦しめて、目を喜ばしむるは桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林に樂しぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦しめたるにはあらず。およそ「めづらしき鳥、あやしきけだもの、國に養はず。」とこそ、書にも侍るなれ。

【章旨】　殺生戒に豚を引く一種の觀念と、無爲自然の生活の憧憬とから萌してゐると思はれる兼好の貪獸觀である。

【語釋】　○馬・牛　これに羊・犬・豚・鷄の四を加へて六畜と稱してゐるが、もとよりそれらを悉く列擧すべき所を例の省略筆法を用ひたものであらうが、とにかく兼好の當面の論題となるものは馬・牛の二種でよいのである。　○ありなむ　よからう。不自由はなからう。　○籠　コとよむ　かごのこと。　○我が身に當りて　自分がもしさうされてゐたらと引きくらべて。　○心あらむ人　心ある人といふに同じ。人情知り。物のあはれを辨へてゐる人。　○生　シヤウとよむ。生類。生き物。　○桀紂　支那古代の夏の桀王と、殷の紂王。何れも慘忍無道な暴君として傳はつてゐる。　○王子猷　支那の晉代の人、名は徽子、子猷といふ

のは其の字。書の名家王羲之の子。風流韻事を以て聞え、竹を愛し、到る處の住宅に先づ之を植ゑ、竹を「此君」と呼んでゐたといふ人。　○鳥を愛せし　連體形どめで、兼好は折々これを使つてゐる。つまり「そしる」「こそしれ」として、句法に強みを與へる爲の一手段に用ひたのであらう、和漢朗詠集下の雜に章孝標の竹詩に「阮籍嘯場人歩レ月、子猷看處鳥栖レ烟。」といふのがあり、子猷が熱愛してゐる竹林に煙(霧や靄)がゆら〳〵ゆらめいてゐる、そこに物怖ぢせぬ鳥がゆつたりと遊んでゐるのを看て、併せ賞してゐるさまを歌つたもの。　○林　竹林と見るも可であるが、子猷の逍遙區域で山林と見る方が更に妥當であらう。　○逍遙　あちらこちらと氣任せにぶらつき歩いて優遊すること。　○珍しき鳥云々　尙書卷七に「犬馬非二其土性一不レ畜。珍禽奇獸不レ育二于國一。」とあるを引く。

【口譯】　人間が飼ひ養つてゐる普通の畜類に馬と牛とがある。これらを手綱や鼻綱で繫いだり、狹い埒や柵の中に押し籠めたりして不自由な思をさせるのは(如何にも)かはいさうではあるが、(何といつても此の人間の生活に)なくてはならない獸だから、致しかたもない。(其の他の畜類では)犬であるが、これは夜陰を見守り、賊をとがめ防ぐといふ點に於て人間以上に働いてくれるから、必ず飼養しておくべきものである。だが向三軒兩隣どの家にも飼つてあるものだから、わざ〳〵自分の家に飼つておかなくとも事缺くこともなからう。上記牛・馬・犬の三種以外の鳥獸は、すべてこれ(慰み物であつて、利用厚生の上から見て)無用のものである。然るに人間は、よく、慰み物として鳥獸を飼養する。そこで山野を自由に疾驅する本性をもつ獸類が窮屈な檻の中に押しこめられたり、鎖でつながれたりし、自由自在に天空飛翔してゐた鳥が其の翅を切られたり、狹い籠の中に窮命仰せつけられたりして、鳥どもは間がなすきがな自由な天空ばかり戀しがつて悶え、獸どもは又、四六時中廣漠たる山野を懷しむの愁情にいらだつてゐる。かうした住み馴れたそれ〴〵の天空や山野に對する鄕愁といふものが、我々人間の身に惹き起されたとしたなれば、如何ばかり堪へがたいことであらうと思ひ到つたならば、情心のある人が、どうしてそれらの禽獸を見て心の慰むといふことがあらうか。心の慰まう筈がない。かやうに生き物の最も好む其の自然な、さうして自由な生活を奪つて苦しませ、其の苦しむのを見て目を喜ばせ心を慰めるといふのは、情知らずの殘虐性に燃えてゐる點に於て、かの桀王や紂王同樣な心底と謂はねばならぬ。(鳥類などを見て愛し樂しんだといふ一點から見れば、一見前の無情漢と同じ所行をしてゐるやうにも思はれる)かの王子猷についていふならば、王子猷が鳥を見て喜んだといふのは、それが其の自由の天地である山林などに優遊し、樂しみかはしてゐる姿を見つゝ、そゞろある きの友としたのであつて、決してこれを捕へて窮屈な籠の鳥の生活などをさせたのではない。(一體物珍しい鳥だとか、風變りな獸とかは、(聖人賢君の治める)國に飼はぬものだ。」と尙書などに書いてある。(が誠にさうあるべきことゝ思ふ。)

【餘論】　一、脫俗超世を說き、五戒行法を力說する兼好も、流石に生活しつゝある人であるから、六畜の中、直接人の生活に大關係のある牛・馬・犬の三種だけは、之を必需品として、「かはいさうだが仕方がない。」と言つてゐる。尙佛徒らしさの表はれてゐる面白い處は、六畜中、主として食用に供せられる羊・豚・雞の三種の飼養をも、「其の外の鳥獸」の部に入れて「すべて用無きものなり。」と斷じてゐることである。肉食妻帶を許されぬ彼等の生活として、誠に尤もなことではあるが。

二、「犬を守り防ぐ務云々」で、われ〳〵は、如何に當時、强盜窃盜の輩が、普通民の生活を脅威しつゝあつたか

といふ事を語る一資料として面白いと思ふ。それにしても、犬を番犬として使用する原理は、犬の臆病性の利用であり、即ち、非常な臆病物である犬は、さゝやかな物影や、微かな物音にもおびえおどろいて、夜もすがらおち〳〵と安眠せぬものである其の弱點を利用して、それをわざ〳〵戸外に閉め出しておいて、安眠することなしに不寝番を仰せつけてゐるといふ無慈悲な酷使振を知つたならば、兼好の筆端も少しは鈍つたであらうと思ふ。

三、飛ぶ鳥は翅を切り……のあたりで、横井也有の「百蟲譜」の「蝶の花に飛びかひたる、優しきものの限なるべし。それも鳴く音の愛なければ、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。」の一文が頻りに思ひ出される。

四、句法から見て「養ひ飼ふものは馬・牛」ときつてある處は、今日なれば多分「馬・牛等等等」などと書いたであらうと思はれるし、「走るけだものは……飛ぶ鳥は……」と、獸と鳥の順に叙しておきながら、其の後段では、「雲を戀ひ、野山を思ふ愁……」と、鳥と獸の順に書きかへた謂はゆる交錯法を用ひてゐるところなど、なか〳〵味が深いと思はれる。

五、生類にあはれみをかける心ばへは、第一二八段にも色濃く力説されてゐる。參照されたい。

悲田院の堯蓮上人は——第一四一段——

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、「あづまびとこそ、言ひつることは頼まるれ。都の人はことうけのみよくて、實なし。」と言ひしを、聖「それはさこそおぼすらめど、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心劣れりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情ある故に、人のいふほどの事、けやけくいなび難く、よろづえ言ひ放たず、心弱くことうけしつ。偽とせむは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべし。あづま人はわが方なれど、げには心の色なく、情おくれ、ひとへにすくよかなるものなれば、初より否と言ひてやみぬ。にぎはひゆたかなれば、人には頼まるるぞかし。」と、ことわられ侍りしこそ、この聖、聲うちゆがみ、あらあらしくて、聖教のこまやかなる理、いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に、寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

【章旨】　堯蓮上人の關東人、關西人の國民性に關する條理正しい批判に共鳴した兼好の述懐である。

【語釋】　○悲田院　京中の孤兒や貧者や病者などを養ふ爲に公設した寺。「悲田」といふのは八幡田中の一つである病田のことをいふと。施藥院とともに光明皇后の時創設された。　○堯蓮　傳記不明。　○さうなき「雙無き」で即ち無雙の。　○故郷の人　堯蓮の故郷の人。　○頼まるれ　頼みになる。信頼がかけられる。　○ことうけ　言承で、承諾。（實なし　實意がない。　○馴れて見るに　都を馴れて見るにとなる所で、都の風俗や人情の發露するいろ〳〵な場合にぶつかつて見たことから綜合すること。　○情ある　粗笨の反對で、感じ方が細かくて敏い。　○けやけく　一か八かきつぱりと。　○え言ひ放たず　言ひきることが出來ず。　○ことうけしつ　引きうけてしまふ。　○本意通らぬ　他人の頼み事を叶へてやらうとする好意が通じない。　○實には　とつくりと考へて見ると。　○心の色なく　ぶつぎらばうで。　○情おくれ　感じかたが大まかで鈍い。　○すくよか　單刀直入。一本調子。　○ことわられ侍りし　物事を道理によつてさばくこと。　○聲うちゆがみ　發音に從つて言葉に訛り

（關東訛り）があつて正しくないこと。　○聖教　佛のみ教。　○心にくく　奥ゆかしく。　もつと〳〵其の人につき多くを知り且つ近接して見たいと思ふ心の湧くこと。　○多かる中に　都には僧侶がいくらでもゐる中で。　○住持せらるゝは　一寺の主として、其の寺に住みついてゐられるのは。　○其の益も　其のやさしい物わかりのよい性分のお蔭であらう。

【口譯】　悲田院の堯蓮上人は、出家前の名を三浦の某とか言つて、もとは（勇名を以て聞えた）天下無雙の武人である。ある時故郷（三浦とあるからには生國は伊豆の三浦半島と思はれる）の人が此の京都へやつて來て、四方やまの話の序に「（どうも、やはり東國人が一番然諾を重んじるから、信頼が出來る。都人と來たら、調子を合せてよく安請合はするが、さつぱり實意といふものがない。」と都人の心ばへの輕薄さを批評したのを聞いて、上人が「なるほどそれはさう思ふかも知れないし、一應それも尤もとも思はれるが、愚僧は永年此の都に住んで、いろ〳〵さまざまな場合にぶつかつて見てゐるが、さう一概に都人の心が劣つてゐる、信頼が出來ないとは思はない。たゞ概して氣心が柔和で、感じ方が細かく敏い爲に、他人からの申出をば、（即座に）きつぱり斷りかねて、何事にもイエスかノーかを言ひきらず、その氣弱さから、ついずる〳〵と引受けてしまふ。最初から何も僞を構へようなどいふ腹黑さは毛頭無いのだが、（何をいふにも無い袖は振れずで）手許が不如意で、自分の望み通りに果せない人ばかりを來てゐるものだから、おのづと約束を實行しやうと好意本心が徹底せぬ事が多くなるんだらう。これに反して東國人は、私の生れ故郷のこととて、方を持たねばなら筋合ではあるが、實のところ、頗るぶつきらぼうで、物の感じ方が大まかで、たゞ一がいに一本調子な氣質だから、厭なら厭、駄目なら駄目と、（他人の思はくなど構はず）最初からきつぱり斷つて話をつけてしまふ。（併し若し一旦引受けた場合には、何をいふにも）景氣がよく、さうして一般に豁福と來てゐるから、すぐ約束通り（テキハキ）と運んでやる。それで信頼を得てゐるのですよ。」と理義明白に說き明されたのはえらい。實は此の上人は、聲に東國訛りがあつてどうも荒々しく、佛教のこみ入つた有難い趣など篤と飲み込んではゐないだらうぐらゐに、心中ではさげすんでゐたのに、右の說明の一條を聞いてからは、（誠にどうも）奥ゆかしく懷しくなつて、都には僧侶も數多居る中に、歷とした一寺の住職となつてゐられるのは、成程かうした優しい、物分りよい持前があればこそ、その德によるのであるわいとすつかり得心がいつた次第である。

【餘論）　一、經濟生活から見て、萬事生產的であり積極的であつた當時の東國人と、一體に非生產的かつ消極的な都人の言動を比較した此の論は、可なりに公平に論ぜられてゐるやうに思ふ。

二、「乏しくかなはぬ人のみあれば」とは、右の經濟生活の半面を語つてゐるものであるが、或人はかうした方面の例證に、所謂京土產として販賣される品物平安五色豆、有平糖、聖護院八ツ橋、すぐき、蕎麥ボール などについて、材料として甚だ廉價本なつまらないものに一寸加工して賑々しさを添へてゐるのは、つまり乏しい消極的な經濟生活が生んだ發明であると論じてゐる。今日の京都に對するのみならず、愛好在世時代に適用される傾向であるやうに推せられる。

三、「う音便」と「捉音便」の差、例へば「買うて來た」とふ京言葉と、「買つて來た」といふ關東言葉との音響が與へる柔と剛、從つて優しいが賴りなささうな語調と、荒々しいが如何にも賴もしく思はれる語調なども、兩國民性（？）をはつきりと色づけて居るやうに思はれるが、大方諸子は以て如何となす。

心なしと見ゆる者も――第一四二段――

無学の有

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや。」と問ひしに、「一人も持ち侍らず。」と答へしかば、「さてはもののあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いと恐し。子故にこそ、よろづのあはれは思ひ知らるれ。」と言ひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かかる者の心に慈悲ありなむや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志は思ひ知るなれ。世を棄てたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづにへつらひ、望ふかきを見て、むげに思ひくたすは僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、盗をもしつべき事なり。されば盗人をいましめ、僻事をのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに世をば行はまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人きはまりて盗す。世治らずして、凍餒のくるしみあらば、科の者絶ゆべからず。人を苦しめ、法を犯さしめて、それを罪なはむこと、不便のわざなり。さていかゞして、人を恵むべきとならば、上の奢り費す所をやめ、民を撫で、農をすすめば、下に利あらむこと疑あるべからず。衣食世の常なる上に、ひがごとせむ人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

【章旨】　世に尊き親子間の恩愛の情が、一切の人間的行動の源泉である所以を述べ、この親子の愛を完成させる爲に、當路者は須らく愛に根柢づける政治を施すべく、而して防貧及び救貧等に關する社會政策的意見を開陳してゐる。

【語釋】　○心無し　無問修養の功を積んでゐないもの。　物事の情味を解してゐないもの。　○荒夷　關東武者。坂東武者。　○かたへ　傍輩。　傍の人。　又は仲間。　物のあはれ　人情・物事の情趣。　○物し給ふ　ここでは「いらつしやる」。　○恩愛の道　親子の間の情愛。　○かゝる者　こんな荒夷風情の者が。　○孝養　ケウヤウと讀む。孝行に同じ。○するすみ　四夫の意味。裸一貫、何等の係累をも持たぬ身。白氏文集の偶吟の詩に「……四知身ノ後有ニ何事一」とある「四知身」を「するすみ」と訓みならはしてゐる。　○ほだし　妻子眷屬など手足まとひとなるもの。　係累。　○思ひくたす　見下げおとしめる。　○其人　するすみから見下げられてゐる係累持ちの人。　○悲しからむ親の爲……いとほしみ、不便に思ふ親の爲……。悲しからむで文を切り、さて「親の爲……」以下を別の節とする人もある。それでも意は通じる。その時は、さう見下げられたら、其の本人の心になつて見たら、隨分悲しく不愉快に思はれるであろう。」となる。　○世をば行ふ　政治を取り行ふ。　○恒の産　孟子梁惠王章句の上に「無ニ恒産一而有ニ恒心一者、惟士爲レ能。若レ民則無ニ恒産一、因無ニ恒心一。苟無ニ恒心一、放辟邪侈、無レ不レ爲レ已。及レ陷ニ於罪一、然後從而刑レ之、是罔レ民也。焉有ニ仁人在レ位罔レ民而可レ爲也。」による。さて恒産とは、生活に事缺かぬだけの資産又は一定の收入のある職業をいふ。　○人きはまりて盗す　孔子家語に「獸窮則攫、鳥窮則喙、人窮則詐。」などの語がある。なほ管子に「禮儀生ニ於富足一、盗賊起ニ於貧窮一」の語もある。　○凍餒　こごゑうゑること。　○法を犯さしめて云々　前記孟子中の「及レ陷ニ於罪一……」を引く。　○罪なはむ　罪なふで、處罰する。

【口譯】　格別學德修養の功を積みもしない、一見情愛などは解して居ないと思はれる者でも、時には誠に味ふべき名言を吐くものだ。或る見るから怖しげな無骨らしい關東武者が、側の人に向つて、話の序に「(時に)御子さんはお持ちですか。」と問ひかけた所、「いや、一人も持ちませんよ。」と答へた。すると關東武者が重ねて、「いや、それ

ちや、あなたは人間同志の情愛は御存じありますまい。無情冷酷な心の持主に違ひなからうと思はれて、何だか近づきにくいです。子供といふものを持つて見て、はじめて人間づき合ひの情味といふものがわかるんですからね。」と言つたのはいかにも尤もで、誠にさうあるべき事と思ふ。（第一）子を持つて、我が子かはいさの一念に浸つた體驗のある者でないならば、かうした（獸の親類といつたやうな）關東武者などの心に、かやうな濃い慈悲心なんか見出せやう筈がない。孝心など微塵も思ひかけぬ不届者でも、さて自分の子といふものを持つて見て、はじめて「子心よりも親心」といふ博大な親心がしみ〴〵と思ひ知られるものであるよ。出家遁出した人で、一切、身に係累がなく謂はゆる裸一貫といふ身輕い人が、概して妻子眷屬をかかへた世の苦勞人達の、腰の低さや、あれこれと物欲しさうに立廻るを見て、（何といふ意氣地なさだ、慾深いことだなどと）むやみに惡口したりさげすんだりするのは、不都合千萬な事である。妻子眷屬をかかへ込んでゐる當人の立場になつて見たら、そりや愛する、いとほしい親や妻子が飢餓に瀕して、切迫まつたとしたらば、その者どもの爲には、耻も外聞も忘れ、物取り强盜でも何も敢てするといふのは、誠に尤なことさ。（だから、物取り强盜などといふ大それたことでなく、たか〴〵低くあちこちにお追從を言つたり、あれこれと物を欲しがるくらゐは、大目に見てやらなければかはいさうだよ。）だから、（大勢の家族の顎が乾いてしまふといふので、貧苦に迫られて）犯した盜人を捕縛して牢屋にぶちこんだり、同樣な原因からの不義非道を嚴罰しようよりは、一般民が衣食住に事を缺かぬやうな政策を實行してほしいものだ。一體、人間といふものは恒産がなければ恒心（人間的な立派な心を持ち續けていくこと）もないものだ。衣食に窮迫すれば、盜みをするにきまつてゐる。ところで善政が行はれず、着るに衣なく、食ふに食なき生活難者が存在する限り、罪人は根絶出來やしない。惡政の結果貧苦で民を苦しめ、苦しみに堪へかねて盜みをして法を犯す、と、待つてゐたとばかり之を捕縛し、嚴罰に處するといふことは、思へば憫然至極な振舞と言はねばならぬ。然らば、如何なる手段方法で、民の生活を潤ほしてやるがよからうかと考へて見るならば、先づ第一に、上に立つ者の奢侈やむだづかひを一掃し、（身を以て勤儉の美風を示すと共に、其の節減した冗費や餘裕を窮民に頒ち賑はし）、一意民を愛撫し、農桑の生業にいそしむやうに督勵するならば、下々の生活が潤澤になつていくことは疑もない。さて衣食が人並に得られて事缺かぬにも拘らず、なほ不都合な所作を敢てする者は、これこそ生活難から切迫つての盜賊といふのでなく、我が身の私慾を逞うせんが爲に社會を毒する本當の惡黨であり盜賊であるから、かゝる者に對して些しも情狀を酌量する極刑に處してよい。

【餘論】　一、すべての情愛の源泉が子に對する親の心から出發してゐるといふに共鳴し、共感してゐる兼好は、誠にお察しのよい人と言はねばならぬ。或は名乘らない實子でもあつたんぢやないかとまで想はせる。それはとにかく石樽千亦氏の歌に

手道具の包の外に一包み、子等へと苣と思ふに親しき。

といふ懷しい一首などは誰も共鳴するであらう。

二、「子故にこそ萬のあはれは思ひ知らるれ」の一語は、餌を拾ふ雄雞の役目と、翼を廣げて雛を育くむ雌雞の役目を兼ねて、並にならぬ苦勞をした父性愛を描いた島崎藤村氏の名作「嵐」の中にも、此の「子故にこそ……」の註釋としてふさはしい一節がある。

「次第に私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、石蹴・めんこ・剣玉・べい獨樂といふ風に、ある物は流行り、あるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが、時につれて移り變りつゝある……」

三、「民を罔する」といふ語の通りの「盗人をいましめ、僻事をのみ罪せむよりは……」といふ事後の懲罰主義の刑事政策よりは、これを未然に防止する防貧といふ社會政策的意見を高調してゐるところが卓見である。これと同時に、かうした意見の存在は、當時もやはり極貧者の盗みといふことが相應に繁く世に行はれてゐたといふことゝ、當時の當事者たちが案外豪奢に振舞つてゐて、民の疾苦を顧慮しなかつたらしい世相の一端も想察されるやうだ。兼好は何も孟子の文句などにヒントを得て、書かなくともよい非現實的な妄想を、たゞ書くために書いたのではなからうと思ふ。

筆を取ればもの書かれ——第一五七段——

筆を取ればもの書かれ、樂器を取れば音を立てむと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば擬うたむ事を思ふ心は必ず事に觸れて來る。かりにも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。率爾にして多年の非を改むる事もあり。假に今、この文をひろげざらましかば、この事を知らむや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて數珠をとり、經をとらば、怠る中にも、善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もしそむかざれば、内證必ず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

【章旨】　環境外物の心に及ぼす影響の如何に力強きものであるかを說き、形より入る修養法の妙諦を誨へてゐる。

【語釋】　○物書かれ　書かずにゐられなくなる。　○樂器　八音を生ずる器即ち金・石・絲・竹・匏・土・革・木製の諸樂器。　○擬うたん　「擬」とは撒き散らす義。　擬をうつとは、錢の表裏の出かたによつて勝負をきめるために錢を卓上になげうつこと。こゝでは「雙六遊びをすること」などの意。　○事に觸れて　外界の事物に接觸して。　○あからさまに「かりそめに」に同じ。ついちよつと。　○率爾にして　忽然として。不圖。　○非　過失。　○この文　聖教のこと。　○心　信仰心。　○更に　少しも。露ほども。　○善業　善果を得べき業因。　業とは人が身・口・意で行つてゐる所作をいふ。これに善業と惡業とがある。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不綺語等の行が善業で、殺生・偸盜・邪淫・妄語・綺語等の行が惡業である。　○修せられ　修行せずにゐられなくなる。　○散亂の心　一心不亂の反對。　○繩床　交椅(腰掛のこと)・胡床・交床といふも同じ。「五車妙選」の註に「繩を以て穿つて坐具と爲す。即ち今の交椅なり。一に胡床といふ。隋の時代では胡を惡んだので改めて交床と名づく。唐に至つて繩床と改む」とあり。今時の椅子の如くで、疊むことを得るやうに出來たもの。(禪宗辭典)　○禪定　ゼンヂヤウ。諸の塵慮を靜めて、天眞の自性を顯現せしめる爲に、靜閑なる境に於て、正身端坐し、是非善惡等の凡ての念慮を放下し、散亂に趨らず、昏沈に墮せず、精神をして常に中正ならしめ、默々として坐定すること。　○事理　事とは相對差別の現象、即ち緣起の諸法のことで、外に現はれた動作。繩床に坐したり、經文や數珠を手にする類。後文の「外相」に當る。理とは絶對無差別の本體

即ち緣起の本體たる不變の理で、この文では內心の作用、「內證」とあるに同じ。　○二つならず　事と理即ち外形と內心とは、孤立した存在でなく、事は理の顯れ、換言すれば現象は本體の外形であり、本體は又外形のうちに含まれてゐるもので、要するに事即ち理で、觀察點をかへれば二つとなるだけのことで、實體は一つであるといふこと。「事理無二、外相不ル背內證必ズ熟ス」の語は橫川の惠心僧都が常に口にした句であると。　○外相　外形、外部に表れたすがた現象。　○背かざれば　ちやんと道に合してゐさへすれば。○內證　心の悟り。　○熟す　成就する。　○強ひて　心の伴はぬことをしてゐるからとて、あながちに不信心呼ばはりしてはならぬ。さうした形を整へることからやがて眞實の信心的心境、內證の熟した境地　到達するのだから。

○これを尊むべし　外形を整へ、外相を修することを專一とするがよい。

【口譯】　筆を手に持つてゐると、自然とそれで何か書かずに居られぬやうになるし、樂器を手まさぐつてゐると、いつか搔き鳴らして見ようといふ氣になる。(又)盃を手にするとおのづと酒が酌んで見たくなり、骰子ころを手すさびにしてゐると、(つい)それで雙六を一番やらうといふ氣になる。かやうに我々の內部にひそんでゐる心といふものは、きづと外界外物に觸れたり刺激されると、すぐ何等かの行動を生起させるものである。それゆゑに、ほんのちよつとした間といつても、善くない遊びたはむれはやつてはならない。何といふ氣なしに、ほんのちよつとでも、經文の一句をさしのぞくと、つい思はずに前の句の前後の句にまで目が走るものだ。そんなやうなわけで、(偶然そこらの文句を讀誦したことから思ひかけぬ修養上の發見をした爲に、)忽ちにしてこれまで多年知らずに過してゐた過失をふつつり改め正す機會を與へられることもある。若しその時經文を繰り廣げるといふことをしなかつたならば、多年持ち來つた此の過失の過失たることに氣がつくだらうか。決してさういふ機會の與へられよう筈がないのだ。して見ると、これがやはり(最初の無意識的ながらも)外的に觸れ携つたことによつて得た儲物である。よしやほとけ信心の念が更に萌してゐなくとも、佛前に端坐して、念珠をつまぐり、經文に手を取り上げたなら、最初はほんの遊び半分でさうしてゐるうちにも、次第に其の方に心が進んでいつて、來世に善果を得る業因がおのづと積まれることになるし、とても精神統一などの出來さうにもない雜念充滿の心であつても、座禪の座の椅子に就いて、きちんと居ずまひを正してゐると、いつか知らぬ間に塵慮をしづめて天眞の自性を顯現しようといふ三昧境に入るであらう。元來外形と本體とは、相隔絕した二つの存在ではなく、要するに同一物の二面といつてもよいものであるから、其の外形さへ道に合致してゐるなら、それによつて心の悟りが必ず開けるものである。かやうな次第であるから、信心どゝろがなくて數珠や經文を手にし、或は散亂した雜念充滿の座禪の席に坐することなどをも、一がいにそんな不信な心構でいけないぢやないかなどゝ非難してはならない。むしろそれをばやがて悟りに入るべき絕好の契機として尊み重んずべきである。

【餘論】　居は氣を移すといふ古言があり、又苟も舜を學ぶものは舜の徒であり、騏驥に倣ふものは騏驥の類であるといふ語もある。みだりに實質主義を高唱して、形式的陶冶を全然閑却しようとしてゐる現代の世相に對しても、誠に頂門の一針たるべき好敎訓と思はれる。

（徒然草講義完）

昭和五年十二月十日印刷
昭和五年十二月廿日發行

（非賣品）

國文學講座
全二十八冊の内
徒然草講義

編輯兼發行者　受驗講座刊行會
右代表者　加藤雄策
印刷者　濤川薫
東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内
受驗講座刊行會
振替口座東京二九六三九番

（第九回配本）

株式會社平凡社印刷部印行

601
12

終